

2025年8月27日(水)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月27日(水) 9:40～10:38 皿 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

9:40～9:58

[12人-口-01]

身体の国民化

戦前の野外教育に着目して

*田中 安津子¹ (1. 九州大学大学院)

10:00～10:18

[12人-口-02]

台湾における武徳殿の活用についての一考察

「高雄市武徳殿」での剣道実践者を対象として

*三宅 智子¹ (1. 天理大学 大学院 体育学研究科)

10:20～10:38

[12人-口-03]

民俗芸能の衣裳・装備の変遷におけるスポーツ人類学的一考察

長野県南伊那地域の屋台獅子の活動を中心に

*松本 彰之¹ (1. 飯田短期大学)

2025年8月29日(金)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育経営管理

■ 2025年8月29日(金) 10:00 ~ 10:59 ■ 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[3a1001-03] 体育経営管理／口頭発表①

座長:石井 十郎(東海大学)

10:00 ~ 10:19

[06経-口-01]

総合型地域スポーツクラブにおけるクラブマネジャーの世代交代

*西村 貴之^{1,2}、作野 誠一² (1. 金沢星稜大学、2. 早稲田大学)

10:20 ~ 10:39

[06経-口-02]

地域子どもスポーツ振興におけるトータルマネジメントに関する初期評価

*小野里 真弓¹、江向 真理子²、水上 雅子³ (1. 尚美学園大学、2. 鶴ヶ島市スポーツ少年団、3. 杉野服飾大学)

10:40 ~ 10:59

[06経-口-03]

総合型地域スポーツクラブにおけるソーシャル・イノベーションプロセスと支援体制の関係性

特定非営利活動法人取得クラブのインタビュー調査に基づく考察

*祐末 ひとみ¹、長積 仁² (1. 神戸親和大学、2. 立命館大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育経営管理

■ 2025年8月29日(金) 11:10 ~ 11:49 ■ 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[3a1004-05] 体育経営管理／口頭発表②

座長:山本 悦史(新潟医療福祉大学)

11:10 ~ 11:29

[06経-口-04]

官民協働によるボールパーク建設とスポーツまちづくり

北海道ボールパークFビレッジの事例研究

*松橋 崇史¹ (1. 拓殖大学)

11:30 ~ 11:49

[06経-口-05]

スタジアム・アリーナ改革とソーシャルイノベーション

地域・コミュニティの革新の視点から

*平山 友梨¹ (1. 立命館大学院経営学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

■ 2025年8月29日(金) 9:15 ~ 9:59 皿 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1101-03] 介護予防・健康づくり／口頭発表①

座長:木村 駿介(静岡産業大学)

9:15 ~ 9:29

[14介-口-01]

動作改善トレーニング時の対話の有無が血圧に及ぼす影響について

*早川 公康¹ (1. 仙台大学)

9:30 ~ 9:44

[14介-口-02]

日中の眠気に対する二酸化炭素曝露の影響：睡眠潜時反復検査による証拠

二酸化炭素曝露と日中の眠気

*金 瑞年^{1,2} (1. 仙台大学 体育学部、2. 東北大学大学院医学系研究科運動学分野)

9:45 ~ 9:59

[14介-口-03]

HADOにおける活動強度の定量化と心理的影響の検討

*松元 隆秀¹、山本 憲英² (1. 常葉大学教育学部生涯学習学科、2. 株式会社KUL SC事業部 eスポーツ事業推進室)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

■ 2025年8月29日(金) 10:05 ~ 10:49 皿 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1104-06] 介護予防・健康づくり／口頭発表②

座長:久保田 晃生(東海大学)

10:05 ~ 10:19

[14介-口-04]

Application of Obesity Indicators in Identifying Hypertension Risk: Evidence from Adults in Macao

An Analysis Based on the 2020 Physical Fitness Surveillance Data of Macao

*Jiang Lupei^{1,2}, Koya Suzuki², Xiang Pan^{1,2}, Yibo Gao^{1,2}, Donghai Xu² (1. Kokumin Tairyoku Monitoring Kagaku Kenshin Kenkyu Center, 2. Supotsu Kenko Kagaku Kenkyuka)

10:20 ~ 10:34

[14介-口-05]

赤外線深度センサーによる高齢者のステッピングテスト評価の性差

*藤田 英二¹、竹島 伸生²、小濱 剛³、楠 正暢³、大庭 有希也⁴、高磯 諒大² (1. 鹿屋体育大学、2. 朝日大学、3. 近畿大学、4. ハワイ大学マノア校)

10:35 ~ 10:49

[14介-口-06]

高齢者の日常生活・社会活動と嚥下機能との関連

*藤田 恵理¹、平工 志穂²、横澤 喜久子² (1. 帝京大学、2. 東京女子大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

■ 2025年8月29日(金) 10:55 ~ 11:54 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1107-10] 介護予防・健康づくり／口頭発表③

座長:根本 みゆき(筑波大学)

10:55 ~ 11:09

[14介-口-07]

オリジナル体操を含む地域密着型運動プログラムの実施と評価

高齢者の身体機能と心理的变化に着目した実践報告

*丸山 裕司¹、田中 亨²、福富 彩子³ (1. 東海学園大学、2. 仙台大学、3. 愛媛大学)

11:10 ~ 11:24

[14介-口-08]

高齢者における自覚的な発声評価と身体的・心理的健康状態との縦断的研究

かさまスタディによる2年間の追跡研究

*西村 生¹、角田 憲治¹、大藏 倫博¹ (1. 筑波大学)

11:25 ~ 11:39

[14介-口-09]

地方高齢者の歩行・活動量の実態と健康維持の課題

*花岡 美智子¹ (1. 東海大学)

11:40 ~ 11:54

[14介-口-10]

週1回の集団エクササイズトレーニングを行っている高齢者の体力の変化

*松井 健¹、林 勇樹¹、巽 樹理¹ (1. 追手門学院大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:18 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1201-04] スポーツ人類学／口頭発表②

座長:高橋 京子(フェリス女学院大学)

9:00 ~ 9:18

[12人-口-04]

イギリススポーツ団体における子どもの意見表明権実現のための試みとセーフガーディングにおける意義について

*森 克己¹、山田 理恵² (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿児島大学稲盛アカデミー)

9:20 ~ 9:38

[12人-口-05]

独立後のカンボジアにおける体育制度の再建
体育に関する国際支援の動向に着目して

*山口 拓¹ (1. 筑波大学)

9:40 ~ 9:58

[12人-口-06]

日本の武道を通じた国際開発における子どもへの虐待防止制度の意義と課題に関する研究

*町田 直大¹、森 克己¹ (1. 鹿屋体育大学)

10:00 ~ 10:18

[12人-口-07]

ドイツの柔道教育における形の位置付け
ドイツ柔道連盟の取り組みの分析を中心に

*ソリドーワル マーヤ¹ (1. 津田塾大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

10:30 ~ 10:48

[12人-口-08]

修行文化としての武術

現代中国における道教と武当山武術の接点

*張 卿¹、張 逸軒¹ (1. 日本体育大学)

10:50 ~ 11:08

[12人-口-09]

天真体道にみる統合的身体運動文化の構造

トランスモダン視座による青木宏之の体技思想の分析

*関口 遵¹ (1. 日本体育大学)

11:10 ~ 11:28

[12人-口-10]

応援団コスモロジー

女性リーダーの誕生とその文化継承

*瀬戸 邦弘¹ (1. 鳥取大学 高等教育開発センター)

11:30 ~ 11:48

[12人-口-11]

大阪市大正区における沖縄空手の流入と実践の現在*豊島 誠也¹、田邊 元²、小木曾 航平³ (1. 広島大学、2. 富山大学、3. 九州大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月29日(金) 12:00 ~ 12:58 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1209-11] スポーツ人類学／口頭発表④

座長:田簀 健太郎(流通経済大学)

12:00 ~ 12:18

[12人-口-12]

eスポーツとしてのイーベースボールの社会的意義

第一回eプレミア12を通じて

*鄭 稼棋¹ (1. 東京理科大学)

12:20 ~ 12:38

[12人-口-13]

障害者の身体活動機会を創出するNPOの運営戦略

須磨ユニバーサルビーチプロジェクトの事例から

*栗原 直也¹、森 克己¹、山田 理恵² (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿児島大学稲盛アカデミー)

12:40 ~ 12:58

[12人-口-14]

ヘリテージ概念を用いたスポーツ空間文化についての考察

台湾・台北の圓山公園の歴史的重層性と集团的記憶

*田里 千代¹ (1. 天理大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:58 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1301-02] 体育哲学／口頭発表①

座長:田井 健太郎(群馬大学)

9:00 ~ 9:28

[00哲-口-01]

伝統か現代か

伝統的な武術訓練場における意味の生成

*李 恩熙¹ (1. 日本体育大学大学院)

9:30 ~ 9:58

[00哲-口-02]

遊尽（ゆじん/Play and Exercise）の文化哲学

クリケットあるいは「真理・価値・形式」

*林 洋輔¹ (1. 大阪教育大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:08 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1303-04] 体育哲学／口頭発表②

座長:竹村 瑞穂(東洋大学)

10:10 ~ 10:38

[00哲-口-03]

コーチングの共同行為における「主体性・自律性」の位置づけ

行為理論的検討を通して

*井手上 新¹ (1. 日本体育大学大学院)

10:40 ~ 11:08

[00哲-口-04]

実践からのコーチング哲学

スポーツ・インテグリティのインテグリティについて

*高尾 尚平¹ (1. 日本福祉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

■ 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 13:58 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1305-06] 体育哲学／口頭発表③

座長:根本 想(育英大学)

13:00 ~ 13:28

[00哲-口-05]

組み合わせ最適化問題の観点でスポーツ科学研究を視る

*齋藤 健治¹ (1. 名古屋学院大学)

13:30 ~ 13:58

[00哲-口-06]

eスポーツのオリンピック導入に関する研究の動向

哲学的研究を中心に

*伊藤 洸太郎¹、竹村 瑞穂² (1. 東洋大学大学院、2. 東洋大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

■ 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 15:08 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1307-08] 体育哲学／口頭発表④

座長:石垣 健二(東海学園大学)

14:10 ~ 14:38

[00哲-口-07]

プラグマティズムの立場から捉える体育の教育的意義

リチャード・ローティの「啓発」概念を手がかりに

*浅田 風太¹ (1. 東海大学大学院)

14:40 ~ 15:08

[00哲-口-08]

ヘザリントン (Hetherington, C. W.) の体育理論にみる新体育の特徴

*高橋 徹¹ (1. 岡山大学学術研究院教育学域)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

📅 2025年8月29日(金) 15:20 ~ 16:18 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1309-10] 体育哲学／口頭発表⑤

座長:松宮 智生(東洋大学)

15:20 ~ 15:48

[00哲-口-09]

ドイツサッカーにおける「男らしさ」のポリティクス
ウルトラスの男性学

*大槻 茂久¹、釜崎 太² (1. 日本女子体育大学、2. 明治大学)

15:50 ~ 16:18

[00哲-口-10]

現象形態としての「ポスト・スポーツ」
始原としてのシンボル化能力

*河野 清司¹ (1. 至学館大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：発育発達

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1401-04] 発育発達／口頭発表①

座長:野井 真吾(日本体育大学)

9:00 ~ 9:14

[07発-口-01]

子どものパーソナリティタイプによる運動の楽しさの違い

*水野 太智¹、中野 貴博¹、稲田 鎮¹、高橋 好波¹ (1. 中京大学)

9:15 ~ 9:29

[07発-口-02]

体育座りへの体操介入による身体的・精神的負荷の調査

*増田 一太^{1,2} (1. 国際医学技術専門学校、2. 京都工芸繊維大学)

9:30 ~ 9:44

[07発-口-03]

学校および教員の運動促進の取組が児童の運動嗜好・運動態度に及ぼす影響

*高橋 好波¹、水野 太智¹、稲田 鎮¹、中野 貴博¹ (1. 中京大学)

9:45 ~ 9:59

[07発-口-04]

児童の活動的な習慣と社会情動的スキル得点の関係
OECDの社会情動的スキル尺度を用いた検討

*中野 貴博¹、水野 太智¹、高橋 好波¹、稲田 鎮¹ (1. 中京大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 10:54 ■ 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1405-07] 発育発達／口頭発表②

座長:渡邊 将司(茨城大学)

10:10 ~ 10:24

[07発-口-05]

Role of Yoga on Growth and Development

*R ELANGO VAN¹ (1. Secretary, Indian Yoga Association, Tamil Nadu State Chapter Committee)

10:25 ~ 10:39

[07発-口-06]

子ども期発育途中データと両親身長を用いたKhamis-Roche法による日本人アスリート成人身長
の推計*國土 将平¹ (1. 中京大学)

10:40 ~ 10:54

[07発-口-07]

発育途中身長データを用いた発育局面推計精度の検証

*長野 崇¹、國土 将平² (1. 大阪国際大学、2. 中京大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1601-04] 体育科教育学／口頭発表①

座長:米村 耕平(香川大学)

9:00 ~ 9:14

[11教-口-01]

小学校体育における「バドミントンやテニスを基にしたゲーム」の実態に関する一考察
「テニピン」の可能性の検討を通して*今井 茂樹¹ (1. 山梨学院短期大学)

9:15 ~ 9:29

[11教-口-02]

バレーボールの授業におけるボール操作能力の指導方法の検討
使用するボールの種類を視点に*金森 晴香¹、高田 俊也¹ (1. 九州共立大学大学院 スポーツ学研究科)

9:30 ~ 9:44

[11教-口-03]

卓球初心者指導におけるフォアハンドドライブ技術要素の評価基準の信頼性の検討
感覚経験型指導法を卓球指導場面に導入するための事前研究*陳 仁溥¹、深見 英一郎¹ (1. 早稲田大学)

9:45 ~ 9:59

[11教-口-04]

小学校中学年のゴール型ゲームにおける「転換局面」を対象とした学習の可能性
児童の思考・判断と技能発揮の関係から*中西 紘士¹、谷山 響² (1. 広島修道大学、2. 広島市立井口小学校)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:10 ~ 10:24

[11教-口-05]

小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果①

投能力と跳能力、心理社会面の変容

*佐藤 善人¹、窪 康之²、佐々木 玲子³ (1. 相山女学園大学、2. 国立スポーツ科学センター、3. 慶応義塾大学)

10:25 ~ 10:39

[11教-口-06]

小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果②

投と跳の動きの質的变化に着目して

*窪 康之¹、佐藤 善人²、佐々木 玲子³ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 相山女学園大学、3. 慶応義塾大学)

10:40 ~ 10:54

[11教-口-07]

教師の準備運動の機能及び教師の意識に関する研究

効率性と儀礼性に着目して

*秋岡 志保¹、鈴木 聡² (1. 東京学芸大学教職大学院、2. 東京学芸大学)

10:55 ~ 11:09

[11教-口-08]

保健体育科教員の授業づくりに関する事例的検討

授業実践の経験の有無に着目して

*石井 郁¹、中川 麻衣子²、米谷 正造² (1. 川崎医療福祉大学大学院、2. 川崎医療福祉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:49 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1609-10] 体育科教育学／口頭発表③

座長:川戸 湧也(三重大学)

11:20 ~ 11:34

[11教-口-09]

小学生と成人を対象とした柔道の受身時の頭部衝撃値に関する研究

頭部損傷基準値：HIC（Head Injury Criterion）用いての評価

*廣田 音奏¹、成田 泰崇²、石川 芽生子⁴、小谷 恭子³、河鱈 一彦⁴ (1. 大阪産業大学、2. 国土舘大学、3. 帝塚山学院大学、4. 関西学院大学)

11:35 ~ 11:49

[11教-口-10]

社会構成主義における「知識の理論」と体育授業

具体的実践像の探究

*牧野 祥子¹ (1. 国際武道大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

📅 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1611-14] 体育科教育学／口頭発表④

座長:四方田 健二(名古屋学院大学)

13:30 ~ 13:44

[11教-口-11]

学習指導モデルを適用した大学ダンス授業の適用過程に関する研究

スポーツ教育モデルと協同学習モデルを用いて

*安達 詩穂¹、大西 祐司²、栗田 昇平³、和田 博史⁴ (1. 日本女子体育大学、2. びわこ成蹊スポーツ大学、3. 大阪体育大学、4. 育英大学)

13:45 ~ 13:59

[11教-口-12]

小学校体育における「表現運動」の展開の試み

体育授業から運動会、そして舞台上演へ

*和光 理奈¹、眞崎 雅子² (1. 中京大学、2. 華頂短期大学)

14:00 ~ 14:14

[11教-口-13]

教員養成大学におけるダンス授業に関する一考察

*仲間 若菜¹、安則 貴香²、津田 博子¹ (1. 日本体育大学、2. 東洋大学)

14:15 ~ 14:29

[11教-口-14]

「現代的なリズムのダンス」における創造的な学びを実現する指導の検討

*田巻 以津香¹、山崎 朱音²、梶 ちか子³ (1. 東海大学、2. 横浜国立大学、3. 鹿屋体育大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1701-04] 体育科教育学／口頭発表⑤

座長:佐藤 豊(桐蔭横浜大学)

9:00 ~ 9:14

[11教-口-15]

器械運動における学習者相互の関わりに関する研究
類似図式がある技を通して

*瀧澤 のぞみ¹、鈴木 聡²、仲宗根 森敦² (1. 東京学芸大学 教職大学院、2. 東京学芸大学)

9:15 ~ 9:29

[11教-口-16]

個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図った授業展開による技能と学習意欲の変容
ICTを活用した短距離走単元における中間走の学習に着目して

*山岡 竜太郎¹、関 伸夫² (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学)

9:30 ~ 9:44

[11教-口-17]

器械運動における個別最適な学習と協働的な学習

*福ヶ迫 善彦¹、田中 光¹、今関 豊一² (1. 流通経済大学、2. 東京国際大学)

9:45 ~ 9:59

[11教-口-18]

中学校における協同学習モデルを活用した体育授業の検討
社会的スキルの変容に着目して

*池田 航¹、荻原 朋子¹、村井 梨沙子² (1. 順天堂大学、2. 東海大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1705-08] 体育科教育学／口頭発表⑥

座長:宮尾 夏姫(奈良教育大学)

10:10 ~ 10:24

[11教-口-19]

演題取り下げ

10:25 ~ 10:39

[11教-口-20]

小学校体育授業の準備運動場面における1年間のACP導入が児童の基礎運動能力に与える影響
小学校低学年児童を対象に

*塚本 将太¹、寺内 秀一²、小椋 優作³、大坪 健太⁴、青野 博⁵、春日 晃章⁶ (1. 中部学院大学、2. 岐阜大学大学院、3. 中部学院大学短期大学部、4. 岐阜協立大学、5. 日本スポーツ協会、6. 岐阜大学)

10:40 ~ 10:54

[11教-口-21]

体育授業におけるACP導入が小学校高学年児童の心理的側面に及ぼす影響

*杉山 明日香¹、塚本 将太²、寺内 秀一¹、青野 博³、春日 晃章⁴ (1. 岐阜大学大学院、2. 中部学院大学、3. 日本スポーツ協会、4. 岐阜大学)

10:55 ~ 11:09

[11教-口-22]

高校体育授業におけるアクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）を取り入れた準備運動
が女子生徒の意識に及ぼす影響

運動有能感の違いに着目して

*大坪 健太¹ (1. 岐阜協立大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:49 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1709-10] 体育科教育学／口頭発表⑦

座長:山口 孝治(佛教大学)

11:20 ~ 11:34

[11教-口-23]

教員養成大学におけるパルクール授業の実践報告—第一報—

*長谷川 晃一¹、荒本 英世³、稲垣 良介² (1. 上越教育大学、2. 岐阜聖徳学園大学、3. 日本体操協会 パルクール委員会)

11:35 ~ 11:49

[11教-口-24]

静水での小児の落水に関する実験的研究

*栗栖 茜¹、藤田 恵理²、横澤 喜久子³、平工 志穂³、天野 勝弘⁴、中島 弘毅⁵ (1. 日本赤十字看護大学附属災害救護研究所、2. 帝京大学、3. 東京女子大学、4. スポーツパフォーマンスデザイン⁷、5. 松本大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1711-14] 体育科教育学／口頭発表⑧

座長:山本 理人(北海道教育大学)

13:30 ~ 13:44

[11教-口-25]

共同体感覚を醸成する小学校体育の実践報告

年齢差包摂プロジェクト学習によるコンヴィヴィアルな関係の構築・促進

*梅澤 秋久¹、村瀬 浩二²、石塚 諭³、平田 智也⁴、山内 朋也⁵、久保 賢太郎⁶、中村 有希⁷ (1. 横浜国立大学、2. 和歌山大学、3. 宇都宮大学、4. 海老名市教育委員会、5. 日本文化大学、6. 玉川大学、7. 九州共立大学)

13:45 ~ 13:59

[11教-口-26]

武道の一般理論に基礎付けられた剣道授業の学習指導試論*千葉 寛樹¹、鈴木 理¹ (1. 日本大学)

14:00 ~ 14:14

[11教-口-27]

性別にみた「知識及び技能体育授業評価尺度」得点の比較

小学校高学年から高等学校までの児童生徒を対象にして

*高橋 野人^{1,7}、大友 智²、藤井 一貴^{3,7}、西田 順一⁴、深田 直宏⁵、吉井 健人³、甲斐 義一^{6,7} (1. 桐生市立新里東小学校、2. 立命館大学、3. 育英大学、4. 近畿大学、5. びわこ学院大学、6. 大分県教育委員会、7. 立命館大学大学院)

14:15 ~ 14:29

[11教-口-28]

小学校低学年を対象とした形成的授業評価法の開発

同一項目に対する児童と教師の評価値の比較を元に

*七澤 朱音¹ (1. 学習院大学大学院・千葉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：測定評価

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1802-05] 測定評価／口頭発表①

座長:小椋 優作(中部学院大学短期大学部)

10:10 ~ 10:24

[08測-口-01]

BIA法によって測定された一般大学生の体組成の現状

*川端 悠¹、小笠原 佑衣¹、吉井 泉¹、三宅 孝昭¹ (1. 大阪公立大学 都市健康・スポーツ研究センター)

10:25 ~ 10:39

[08測-口-02]

片上肢前腕部位に障害のある男性に対するOne-arm push-up テストの信頼性・妥当性の検証

*瀬川 海¹、金田 和輝²、松田 繁樹³ (1. 立命館大学共通教育推進機構、2. 京都先端科学大学健康医療学部、3. 龍谷大学政策学部)

10:40 ~ 10:54

[08測-口-03]

ジュニア期の陸上競技100m走におけるスプリント能力とプライオメトリクスパフォーマンスとの関係

*渡邊 静空¹、小笠原 大智¹、安 妮¹、小林 秀紹¹ (1. 札幌国際大学)

10:55 ~ 11:09

[08測-口-04]

ニューラルネットワークによる幼児の遊びの性差

*青柳 領

専門領域別研究発表 | 専門領域別：測定評価

■ 2025年8月29日(金) 14:20 ~ 15:19 ■ 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1806-09] 測定評価／口頭発表②

座長:村山 敏夫(新潟大学)

14:20 ~ 14:34

[08測-口-05]

高齢者ドライバーにおける認知機能と運転自信度が主観的な運転自己評価に及ぼす影響

*山次 俊介¹、山田 孝禎¹、杉浦 宏季²、横谷 智久² (1. 福井大学、2. 福井工業大学)

14:35 ~ 14:49

[08測-口-06]

独りよりも友人とのテニスの方が実行機能は向上する

*高橋 信二¹ (1. 東北学院大学)

14:50 ~ 15:04

[08測-口-07]

努力度に基づく力発揮の個人差と現在の運動習慣との関係の検討

*菅谷 亮介¹、林 容市^{2,1} (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学文学部心理学科)

15:05 ~ 15:19

[08測-口-08]

ダンス作品鑑賞者の注視に関する研究

*池田 恵子¹ (1. 新潟医療福祉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：測定評価

■ 2025年8月29日(金) 15:30 ~ 16:14 ■ 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1810-12] 測定評価／口頭発表③

座長:青木 宏樹(福井工業高等専門学校)

15:30 ~ 15:44

[08測-口-09]

レジスタンストレーニングにおけるアームカール時の肘関節可動域の違いが筋力に及ぼす影響

*小笠原 大智¹、安 妮¹、小林 秀紹 (1. 札幌国際大学)

15:45 ~ 15:59

[08測-口-10]

一般中高年者及び中高年パワーリフターの身体的特性の比較

*藤瀬 武彦¹ (1. 新潟国際情報大学)

16:00 ~ 16:14

[08測-口-11]

立ち幅跳び能力・垂直跳び能力・リバウンドジャンプ能力の関係性に関する研究

*原 幸輝¹ (1. 広島文化学園大学大学院 人間健康学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 ■ 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a201-04] バイオメカニクス／口頭発表①

座長:貴嶋 孝太(大阪体育大学)

9:00 ~ 9:14

[05バ-口-01]

男性円盤投競技者におけるリリースパラメータと投擲体力と技術の関係

*中町 真澄¹ (1. 新潟医療福祉大学)

9:15 ~ 9:29

[05バ-口-02]

男性棒高跳競技者の重心高に影響するキネマティクスの探索

*風間 未来¹ (1. 新潟医療福祉大学大)

9:30 ~ 9:44

[05バ-口-03]

曲り特性の異なるポールは跳躍中のポールの挙動に影響するのか？

曲率半径を観点としたポールのセグメントの最大湾曲位置による評価

*武田 理¹、植松 倫理¹、鈴木 啓太³、藤井 範久² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学、3. 名古屋学院大学)

9:45 ~ 9:59

[05バ-口-04]

系の運動方程式を活用した陸上ハンマー投げにおける自励系加速メカニズム解明の試み

*小池 関也¹ (1. 筑波大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

■ 2025年8月29日(金) 10:05 ~ 10:49 ■ 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a205-07] バイオメカニクス／口頭発表②

座長:大高 千明(奈良女子大学)

10:05 ~ 10:19

[05バ-口-05]

自発的同調が高速度ランニングにおけるピッチに与える影響

*長谷 伸之助¹、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

10:20 ~ 10:34

[05バ-口-06]

高密度表面筋電図法を用いた外側広筋のMUNE算出における電極選択の影響

*井川 快斗¹、渡邊 航平¹ (1. 中京大学)

10:35 ~ 10:49

[05バ-口-07]

高齢者における運動神経の働きと骨格筋の量を反映する指標の関係

“神経筋チャート”を用いた個人が有するトレーナビリティの定量化・視覚化を目指して

*渡邊 航平¹、井川 快斗² (1. 中京大学、2. 中京大学大学院)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

📅 2025年8月29日(金) 11:00 ~ 11:44 🏢 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a208-10] バイオメカニクス／口頭発表③

座長:山下 大地(国立スポーツ科学センター)

11:00 ~ 11:14

[05バ-口-08]

柔道の背負投における体幹回旋運動の解析

骨盤・胸郭による回旋・側方傾斜・前方傾斜の順序性とその連動

*菅谷 友紀¹、射手矢 岬²、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

11:15 ~ 11:29

[05バ-口-09]

フィギュアスケートのにおける回転数の違いが鉛直速度生成に及ぼす踏切動作特性

*ガンスフ マラルエレデン¹、桜井 伸二² (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科、2. 中京大学 スポーツ科学部)

11:30 ~ 11:44

[05バ-口-10]

男子体操競技ゆかにおける後方伸身2回宙返り3回ひねり(Shirai3)の成功試技・失敗試技の動作比較

*白井 健三¹、畠田 好章¹、中瀬 卓也¹、有井 さやか¹、河鱒 真世¹、阿江 数通¹ (1. 日本体育大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:55 🏢 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a301-02] 体育社会学／口頭発表①

座長:渡辺 泰弘(広島経済大学)

9:00 ~ 9:25

[02社-口-01]

日本語版フィジカルリテラシー評価尺度とその関連項目の検討

*乾 順紀¹ (1. 奈良県立奈良商工高等学校)

9:30 ~ 9:55

[02社-口-02]

スタジアムの公共性をめぐるポリティクス

クリーブランド市のゲートウェイ・プロジェクト

*高部 巖輝¹、中田 健斗¹ (1. 明治大学大学院教養デザイン研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:05 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a303-04] 体育社会学／口頭発表②

座長:大勝 志津穂(椋山女学園大学)

10:10 ~ 10:35

[02社-口-03]

1970年代の性教育論とウーマン・リブ運動

純潔教育から性教育へ

*劉 曉宇¹ (1. 明治大学大学院)

10:40 ~ 11:05

[02社-口-04]

エリアス学派スポーツ社会学に関する批判的考察

方法論的課題としての「非西欧」の描き方

*村下 慣一¹ (1. 立命館大学大学院社会学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:15 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a305-06] 体育社会学／口頭発表③

座長:谷口 勇一(大分大学)

11:20 ~ 11:45

[02社-口-05]

アメリカの高校運動部活動の実態に関する調査研究 (3)

テキサス州でのフィールドワークをもとに

*中澤 篤史¹、束原 文郎²、小石川 聖¹ (1. 早稲田大学、2. 帝京大学)

11:50 ~ 12:15

[02社-口-06]

アメリカの高校運動部活動の実態に関する調査研究 (4)

ミシガン州公立校の事例分析

*束原 文郎¹、中澤 篤史²、小石川 聖² (1. 帝京大学、2. 早稲田大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

■ 2025年8月29日(金) 13:50 ~ 14:45 ■ 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a307-08] 体育社会学／口頭発表④

座長:下竹 亮志(筑波大学)

13:50 ~ 14:15

[02社-口-07]

中学校運動部における補欠部員のアンビバレンスに関する実証的研究
指導者の補欠部員への指導に着目して

*種谷 大輝¹、松尾 哲矢¹ (1. 立教大学)

14:20 ~ 14:45

[02社-口-08]

中学校における武道必修化がもたらす剣道の文化的変容に関する研究
授業における「気」の指導をめぐって

*沓掛 哲平¹、松尾 哲矢¹ (1. 立教大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

■ 2025年8月29日(金) 15:00 ~ 16:25 ■ 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a309-11] 体育社会学／口頭発表⑤

座長:白石 翔(富山大学)

15:00 ~ 15:25

[02社-口-09]

日本バスケットボール界へのアフリカ出身留学生の移住に関する研究
アフリカ出身留学生斡旋企業の事業内容に着目して

*千葉 直樹¹ (1. 中京大学)

15:30 ~ 15:55

[02社-口-10]

インターネット上におけるスポーツニュースにみたナショナリズムに関する検討
2024年パリオリンピックにおけるバスケットボール日本代表チームの記事を事例にして

*楊 橋宇¹、下窪 拓也¹、渡 正¹、鈴木 宏哉¹ (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科)

16:00 ~ 16:25

[02社-口-11]

現代におけるメディア・スポーツのリアリティ
原像と複製、体験と情報の反転

*佐藤 慈¹ (1. 明治大学大学院)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育心理学

■ 2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:29 ■ 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a403-05] 体育心理学／口頭発表①

座長:長谷川 弓子(岩手大学)

14:30 ~ 14:49

[03心-口-01]

柔道競技の組手の攻防における攻撃切替技能の熟練差*高野 綺海¹、奥村 基生² (1. 東京学芸大学大学院大学院連合学校教育学研究科、2. 東京学芸大学)

14:50 ~ 15:09

[03心-口-02]

大学生の運動能力観に関する研究*古田 久¹、鹿野 晶子²、田中 良²、野井 真吾² (1. 埼玉大学、2. 日本体育大学)

15:10 ~ 15:29

[03心-口-03]

縦断データを用いた心理的安全性とバーンアウトの相互関係の検討*甲谷 勇平¹、佐藤 優介¹、白坂 成功¹ (1. 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育心理学

■ 2025年8月29日(金) 15:40 ~ 16:39 ■ 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a406-08] 体育心理学／口頭発表②

座長:山本 浩二(関西福祉大学)

15:40 ~ 15:59

[03心-口-04]

チアリーディングにおけるスタントを原因とした腰痛の心理社会的状況についての質的検討*松岡 彩芽¹、中澤 史¹、岡野 かほる¹、時田 晃佑¹、鶴田 幸大¹、瀬戸 宏明¹ (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科)

16:00 ~ 16:19

[03心-口-05]

キリスト教を信仰するアスリートが競技生活を続けていくためのプロセス*山本 築¹、高井 秀明¹ (1. 日本体育大学)

16:20 ~ 16:39

[03心-口-06]

「奚般氏著心理学」と「倍因氏心理新説」の体育心理学からみた史的研究*楠本 恭久¹、高井 秀明¹、大久保 瞳¹、北橋 達朗¹、坂部 崇政²、藤本 太陽³ (1. 日本体育大学、2. 京都教育大学、3. 大阪産業大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

■

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:15

■

2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a501-02] 体育史／口頭発表①

座長:石立 克己(至誠館大学)、後藤 光将(明治大学)

9:00 ~ 9:35

[01史-口-01]

近代日本の体育・スポーツ史叙述における「奉納競技」の系譜

明治神宮外苑造営・明治神宮大会成立の内在的論理を繙く

*藤田 大誠¹ (1. 國學院大學)

9:40 ~ 10:15

[01史-口-02]

明治後期の関西地域における女子バスケットボール普及過程の再検討

*柿山 哲治¹ (1. 福岡大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

■

2025年8月29日(金) 10:30 ~ 12:25

■

2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a503-05] 体育史／口頭発表②

座長:中村 哲也(高知大学)、関口 雄飛(日本体育大学)、尾川 翔大(岐阜薬科大学)

10:30 ~ 11:05

[01史-口-03]

日本の卓球競技におけるカット打法の変化と採用過程に関する研究(1902-1942)

*木村 直登¹ (1. 神戸大学大学院)

11:10 ~ 11:45

[01史-口-04]

兵庫県における第1回国民体育大会（1946年）の開催準備に関する研究

*秋元 忍¹ (1. 神戸大学)

11:50 ~ 12:25

[01史-口-05]

戦後の少年柔道に関する史的研究

全日本柔道少年団を中心に

*桐生 習作¹ (1. 公益財団法人講道館)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

■ 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:15 ■ 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a506-07] 体育史／口頭発表③

座長:大林 太郎(筑波大学)、都筑 真(日本女子体育大学)

13:00 ~ 13:35

[01史-口-06]

オーストリアのトップストライカーに対するナチ党员疑惑の追究
ナチス期のプロフェッショナルアスリートに関する考察として

*鈴木 明哲¹ (1. 東京学芸大学)

13:40 ~ 14:15

[01史-口-07]

ライプチヒ学派「トレーニング論」の変遷 その5
「競技スポーツの理論と実践」 誌の分析

*綿引 勝美

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

■ 2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:45 ■ 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a508-09] 体育史／口頭発表④

座長:平塚 卓也(奈良女子大学)、池田 恵子(北海道大学)

14:30 ~ 15:05

[01史-口-08]

ドイツのスポーツ政策に関する研究
1980年代の連邦政府スポーツ報告書の分析を中心に

*實學 淳郎¹ (1. 大阪成蹊大学)

15:10 ~ 15:45

[01史-口-09]

カンタベリー入植黎明期に行われたスポーツに関する研究

*榎本 雅之¹ (1. 滋賀大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:45 ■ 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a602-02] 体育・スポーツ政策／口頭発表①

座長:張 寿山(明治大学)

11:20 ~ 11:45

[15政-口-01]

演題取り下げ

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

📅 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 13:55 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a603-04] 体育・スポーツ政策／口頭発表②

座長:関 允淑(東亜大学)

13:00 ~ 13:25

[15政-口-02]

A Paradigm Shift in Sports Policy

The National Sport Policy Committee and the First Basic Plan for the Promotion of Sport

*Suk-Kyu Kim¹, Dong-Hyun Lee² (1. Dongkuk University WISE, 2. Sangmyung University)

13:30 ~ 13:55

[15政-口-03]

アダプテッドスポーツを活用した教員養成における新たな資質能力の育成
教職履修者を対象として

*永島 昇太郎¹ (1. 帝京大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

📅 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 15:05 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a605-06] 体育・スポーツ政策／口頭発表③

座長:高峰 修(明治大学)

14:10 ~ 14:35

[15政-口-04]

トランスジェンダー女子選手の参加資格ルールと競技の公平性

*王 婧妍¹、森 浩寿² (1. 大東文化大学大学院、2. 大東文化大学)

14:40 ~ 15:05

[15政-口-05]

中学生バドミントン登録者数の男女差に関する研究

2014~2023年の都道府県別競技人口の変化率に基づくクラスター分析

*佐久間 浩平¹ (1. 筑波大学大学院)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

■ 2025年8月29日(金) 15:20 ~ 16:15 ■ 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a607-08] 体育・スポーツ政策／口頭発表④

座長:沖村 多賀典(名古屋学院大学)

15:20 ~ 15:45

[15政-口-06]

自治体のスポーツ鬼ごっこ導入による運動能力と意欲・対人関係の変容に関する実践報告
富里市における幼児期・学童期での鬼ごっこを通じた連携プログラムの成果と展望

*羽崎 貴雄¹ (1. 一般社団法人鬼ごっこ協会)

15:50 ~ 16:15

[15政-口-07]

競技者アイデンティティと実力発揮度の関連

大学生アスリートにおける競技レベル別の検討

*島津 頼夢¹、中村 美幸²、川田 裕次郎^{1,2,3}、高澤 祐治^{1,2,3}、室伏 由佳^{1,2} (1. 順天堂大学スポーツ科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部、3. 順天堂大学スポーツ健康医科学研究所)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

■ 2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

9:40 ~ 9:54

[13ア-口-01]

大学生のデフスポーツに対する意識変容 2

ろう・難聴者とのスポーツ経験の有無に着目して

*赤羽根 颯河¹、齊藤 まゆみ¹、中島 幸則² (1. 筑波大学、2. 筑波技術大学)

9:55 ~ 10:09

[13ア-口-02]

運動部活動経験が信念およびアダプテッドの考え方に及ぼす影響

体育教師を志望する学生を対象に

*平間 千晴¹、村上 祐介² (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学)

10:10 ~ 10:24

[13ア-口-03]

弱視者の動的バランス能力に影響を与える要因の検討

*朝海 仁美¹、齊藤 まゆみ² (1. 株式会社パソナグループ、2. 筑波大学)

10:25 ~ 10:39

[13ア-口-04]

国内ブラインドサッカー大会における頭部接触の実態と安全性に関する一考察

*相川 貴裕¹、河野 喬¹、原 幸輝²、加地 信幸¹ (1. 広島文化学園大学、2. 広島文化学園大学大学院人間健康学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

■ 2025年8月29日(金) 10:50 ~ 11:49 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a705-08] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表②

座長:曾根 裕二(大阪体育大学)

10:50 ~ 11:04

[13ア-口-05]

神戸市立中学校における「特別な配慮が必要な生徒」のスポーツ環境
通常学級の障害種別出現パターンによる類型別特徴

*金山 千広¹、瀬川 海¹ (1. 立命館大学)

11:05 ~ 11:19

[13ア-口-06]

KUNDE柔道が晴眼者の柔道の技術向上に与える影響

*瀬戸 勇次郎¹、齊藤 まゆみ² (1. 福岡県立糸島高等学校、2. 筑波大学)

11:20 ~ 11:34

[13ア-口-07]

障害児者を対象としたアダプテッド・スポーツ実践の検討

Standup paddleboard (SUP) のレース出場にむけた取り組み

*加地 信幸¹、河野 喬¹、小川 海希都²、相川 貴裕¹ (1. 広島文化学園大学、2. 広島市立広島特別支援学校)

11:35 ~ 11:49

[13ア-口-08]

我が国の障害者スポーツの施策の変遷

2020東京大会を中心に

*藤田 紀昭¹ (1. 日本福祉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：運動生理学

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:13 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a801-05] 運動生理学／口頭発表①

座長:須永 美歌子(日本体育大学)

9:00 ~ 9:13

[04生-口-01]

パワーリフティング選手におけるマウスガード使用が肩関節等速性筋力に及ぼす影響

*菅嶋 康浩¹、石田 直章²、大森 俊和¹ (1. 朝日大学、2. 愛知学院大学)

9:15 ~ 9:28

[04生-口-02]

性差が運動後低血圧に及ぼす影響

*土橋 康平¹、松田 知華² (1. 北海道教育大学、2. 名古屋大学)

9:30 ~ 9:43

[04生-口-03]

ワンサイドスカッシュを通した小学校3年生の心理尺度と唾液セロトニン濃度の変化

*時野谷 勝幸¹、梅澤 秋久¹、出越 拓磨² (1. 横浜国立大学、2. 附属鎌倉小学校)

9:45 ~ 9:58

[04生-口-04]

月経周期における腸内細菌叢由来代謝産物と運動パフォーマンスの関連

月経周期における腸内環境とパフォーマンス

*松生 香里¹、森山 進一郎²、須永 美歌子³ (1. 周南公立大学、2. 東京学芸大学、3. 日本体育大学)

10:00 ~ 10:13

[04生-口-05]

競泳におけるインターバルトレーニング中の深部体温とパフォーマンスについて

*島谷 康弘¹、杉田 正明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学体育学部)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：運動生理学

■ 2025年8月29日(金) 10:25 ~ 11:23 皿 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a806-09] 運動生理学／口頭発表②

座長:土橋 康平(北海道教育大学)

10:25 ~ 10:38

[04生-口-06]

カフェイン摂取が800m走パフォーマンスに及ぼす影響

*佐々木 健成¹、土橋 康平²、森田 憲輝² (1. 北海道教育大学大学院、2. 北海道教育大学)

10:40 ~ 10:53

[04生-口-07]

国内トップレベルのローイング選手における酸素摂取動態と運動パフォーマンスとの関連

*小泉 潤¹、波多野 慶¹、中村 真理子¹、松林 武生¹ (1. 国立スポーツ科学センター/ハイパフォーマンスセンター)

10:55 ~ 11:08

[04生-口-08]

大学男子柔道選手における減量が動脈スティフネスに及ぼす影響

*小芝 裕也¹、前島 悦子¹ (1. 大阪体育大学)

11:10 ~ 11:23

[04生-口-09]

早期 vs 遅延型時間制限食

運動なしでも体力は向上するのか？

*于 自富¹ (1. 広島大学人間社会科学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：保健

■ 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 14:54 皿 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[3a902-04] 保健／口頭発表①

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

14:10 ~ 14:24

[10保-口-01]

高等学校保健「健康を支える環境づくり」における実験を取り入れた実践
水道水の残留塩素濃度測定を通じた学習*中川 雅智¹、今城 遥¹、上田 敏子² (1. 聖カタリナ大学、2. 愛媛大学)

14:25 ~ 14:39

[10保-口-02]

球技を専門とする日韓の女子体育大学生におけるやせ志向と食習慣との関連

*白石 百音華¹、古泉 佳代² (1. 日本女子体育大学大学院、2. 日本女子体育大学)

14:40 ~ 14:54

[10保-口-03]

女子大学生における運動の目的とたんぱく質摂取の選択行動との関連

*菊川 理子¹、古泉 佳代²、中島 早苗³ (1. 東京経営短期大学、2. 日本女子体育大学、3. 共立女子短期大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

⌚ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 10:38 🏢 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

9:40 ~ 9:58

[12人-口-01]

身体の国民化

戦前の野外教育に着目して

*田中 安津子¹ (1. 九州大学大学院)

10:00 ~ 10:18

[12人-口-02]

台湾における武徳殿の活用についての一考察

「高雄市武徳殿」での剣道実践者を対象として

*三宅 智子¹ (1. 天理大学 大学院 体育学研究科)

10:20 ~ 10:38

[12人-口-03]

民俗芸能の衣裳・装備の変遷におけるスポーツ人類学的一考察

長野県南伊那地域の屋台獅子の活動を中心に

*松本 彰之¹ (1. 飯田短期大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 10:38 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

9:40 ~ 9:58

[12人-口-01] 身体の国民化

戦前の野外教育に着目して

*田中 安津子¹ (1. 九州大学大学院)

野外教育とは自然の中で組織的、計画的に一定の教育目標をもって行われる自然体験活動の総称である。自然体験活動とは、自然の中で、自然を活用して行われる各種活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽界といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動と言われている。現在行われる野外教育に影響を与えている活動の起源として、アメリカで1860年にThe Gunnery Camp、ドイツで1896年にワンダーフォーゲル、1909年にユースホステル、イギリスで1907年にボーイスカウトがある。野外教育の基礎となる活動が開始された時期は1900年前後にほぼ集中しており要因として、産業革命に伴い、都市に人口が集中した結果自然と隔絶されたばかりではなく都市住民の生活環境が悪化したことが挙げられる。また、19世紀末から20世紀にかけては帝国主義の時代であり、国民養成の手段として野外教育が普及したことも背景にあると考えられる。

野外教育が広まる背景となった明治時代から戦前にかけては、日本人の身体技法がおきく変容した時期である。近代国民国家の形成、資本主義の成立といった近代化の過程において、様々な視点から個人の身体はつくりかえられていった。「近代的な身体」を作るために国民の体力を向上させ国家が求める軍事力のみならず、市場が要求する労働力を担当させる必要もあった。このような時代背景の中発生し普及していった野外教育は、いかにして身体の国民化に寄与したのだろうか。

本研究では理論的背景としてミシェル・フーコーの規律訓練を取り上げ、野外教育における主体の形成と身体の国民化について考察を行う。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

📅 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 10:38 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

10:00 ~ 10:18

[12人-口-02] 台湾における武徳殿の活用についての一考察 「高雄市武徳殿」での剣道実践者を対象として

*三宅 智子¹(1. 天理大学 大学院 体育学研究科)

台湾には、約50年間の日本統治時代に武道の普及目的の為に、約200棟を超えるほどの多くの武徳殿が建設された。しかし、戦後を経て消失しているものが多く、今なお現存する建築物は12棟となっている。その中でも「高雄市武徳殿」は日常的に剣道を実践しているという点では台湾内において、唯一の歴史的建造物として注目に値する。高雄市武徳殿は、1999年に市の指定史跡となった。その後、台湾政府による「文化創意産業」政策が大きな引き金となって、日本統治時代の建物の修復保存が盛んに行われるようになった。現在でも、高雄市旧市街地には日本統治時代の建築物が多く残っており、高雄市武徳殿もその対象に含まれている。その武徳殿の活用・保存方法については、地元の名士が高雄市政府文化局と連携しながら、台日文化交流イベントとしての剣道大会、日本文化体験、さらには主として剣道実践での活用ができる場に創り上げていった。現在では、高雄市武徳殿は市の重要な文化資産として位置づけられていることがわかる。

本発表では、この高雄市武徳殿で日常的に剣道実践の場として活用している人達を対象とし、①剣道の指導的立場として活用している人々、②練習生の立場として活用している人々（初心者とその保護者及び経験者ら）がどのようなきっかけで武徳殿に関わり、剣道の指導及び練習に参加しているのか、又剣道に何を求めているのかを明らかにする。とりわけ高雄市武徳殿を活用する意味について明らかにしていきたい。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

📅 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 10:38 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

10:20 ~ 10:38

[12人-口-03] 民俗芸能の衣裳・装備の変遷におけるスポーツ人類学的一考察

長野県南伊那地域の屋台獅子の活動を中心に

*松本 彰之¹ (1. 飯田短期大学)

本研究は、長野県飯田市を中心にした「屋台獅子」という民俗芸能の活動を取り上げる。「屋台獅子」は大型バス程の獅子の体躯内部に囃子手が、外部の獅子頭から体躯につながる部分に舞手がつき、一台に総勢数十名が関わる江戸期から継続して行われている獅子舞である。「屋台獅子」の舞手や囃子手らは揃いの法被やタツツケ袴等の分担の活動別にそれぞれおそろいの衣裳を着用する。これらの衣裳や獅子頭、幌、ハナ等の獅子の装備が、この地域の地場産業と深く関連していることは、すでに報告した。ただ、この地域で誕生した「屋台獅子」の衣裳・装備の働き及びどのような変遷を経て現代に至ったのかについての経緯は、未だ具体的に示されていない。これらの衣裳・装備は、民俗芸能の身体活動に直接影響するものであり、これらの文化的価値の根幹に関わる重要な構成要素である。活動に伴う身体運動に適した素材や構造になっている可能性が大きいと推測された。そこで、本研究では各地域の「屋台獅子」の各団体が、それぞれの活動において、どのような衣裳・装備を準備してきたのかについて、その実態を調査しその変遷を明らかにすることを目的とした。フィールドワーク及びインタビュー等の人類学的方法により、屋台獅子を支える側の人びとへの調査を行ったところ、染色業及び織物業といった従来からの地場産業に加えて、呉服商や呉服問屋が業態転換し祭り物品卸業などの新たな業種の人びとが、飯田の民俗芸能である「屋台獅子」を育み支えてきた実態が明らかとなった。この地域の獅子は、生涯にわたって年齢階梯制に基づく各組織に所属する鼎地区の人びとの相互の関わりとつながりものである。人びとは、獅子舞を共通の宝としながら、関わりを続ける。この地域システムの支えにより鼎地区の人びとは守られ、生涯にわたる健康でいきいきとした生活は、この安定した地域システム支援の「継続性」によって現在も維持されている。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育経営管理

⌚ 2025年8月29日(金) 10:00 ~ 10:59 🏢 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[3a1001-03] 体育経営管理／口頭発表①

座長:石井 十郎(東海大学)

10:00 ~ 10:19

[06経-口-01]

総合型地域スポーツクラブにおけるクラブマネジャーの世代交代

*西村 貴之^{1,2}、作野 誠一² (1. 金沢星稜大学、2. 早稲田大学)

10:20 ~ 10:39

[06経-口-02]

地域子どもスポーツ振興におけるトータルマネジメントに関する初期評価

*小野里 真弓¹、江向 真理子²、水上 雅子³ (1. 尚美学園大学、2. 鶴ヶ島市スポーツ少年団、3. 杉野服飾大学)

10:40 ~ 10:59

[06経-口-03]

総合型地域スポーツクラブにおけるソーシャル・イノベーションプロセスと支援体制の関係性
特定非営利活動法人取得クラブのインタビュー調査に基づく考察

*祐末 ひとみ¹、長積 仁² (1. 神戸親和大学、2. 立命館大学)

■ 2025年8月29日(金) 10:00 ~ 10:59 ■ 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[3a1001-03] 体育経営管理／口頭発表①

座長:石井 十郎(東海大学)

10:00 ~ 10:19

[06経-口-01] 総合型地域スポーツクラブにおけるクラブマネジャーの世代交代*西村 貴之^{1,2}、作野 誠一² (1. 金沢星稜大学、2. 早稲田大学)

本研究では総合型地域スポーツクラブの持続可能なマネジメントにむけたクラブマネジャーの世代交代のプロセスを明らかにすることを目的とした。具体的には、個人や組織が出来事や状況に意味を見出し、理解し、それにもとづいて行動するための継続的なプロセスであるセンスメイキングの理論的枠組みを用いて、総合型クラブにおけるクラブマネジャーの世代交代が「なぜ」、「どのように」なされるのかというプロセスの可視化を試みた。

3つの総合型クラブを調査対象とし、各クラブの先代マネジャーと後継マネジャーに対するインタビュー調査で得たデータを分析した。その結果、各クラブの先代マネジャーと後継マネジャーのそれぞれのセンスメイキングを明らかにし、両者を対照させることでクラブマネジャーの世代交代のプロセスが可視化された。

センスメイキングの個人差に着目するという分析視座は、最終的に組織化される各種の行為が個人の意見の相違や不一致をどのように超克していくかをより明確に説明するものであった。また、①先代マネジャーが「経験学習リーダーシップ（職場メンバーの経験学習をうながす指導）」を発揮し、意識的・意図的に後継マネジャーの成長機会を創出すること、②クラブマネジャー単独でリーダーシップを発揮するのではなく、リーダーシップの影響力がメンバーに分散した創発的なマネジメントチームを構築していくこと、の2点がクラブマネジャーの世代交代の促進に貢献するという実践的示唆が得られた。そして、クラブマネジメントにおける経営と運営のリーダーシップが機能分化してきていることがクラブマネジメントに関わる人材の成長段階に「クラブ経営者（チーフエグゼクティブ）段階」を生じさせ、クラブマネジャーの世代交代と総合型クラブの事業承継が異なる次元で展開する構造が示唆された。

⌚ 2025年8月29日(金) 10:00 ~ 10:59 🏠 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[3a1001-03] 体育経営管理／口頭発表①

座長:石井 十郎(東海大学)

10:20 ~ 10:39

[06経-口-02] 地域子どもスポーツ振興におけるトータルマネジメントに関する初期評価

*小野里 真弓¹、江向 真理子²、水上 雅子³ (1. 尚美学園大学、2. 鶴ヶ島市スポーツ少年団、3. 杉野服飾大学)

わが国のスポーツ基本計画では、「子どものスポーツ機会の充実を目指し、学校や地域において、すべての子どもがスポーツを楽しむことができる環境の整備を図る」ことを政策目標として掲げている。学校と地域における子どものスポーツの機会の充実への取り組みは、地域スポーツ振興の重要な課題となっている。本研究は、具体的な事業モデルとして、埼玉県鶴ヶ島市教育委員会生涯学習スポーツ課が中心となって計画した「地域クラブ化支援モデル事業」に着目し、子どもたちの体力向上をはじめ、活動の体制づくり、支援づくり、指導体制づくりなど、総合的な視点からより円滑な活動となるマネジメントの構築を検討することを目的とした。

この「地域クラブ化支援モデル事業」は、令和6年4月から鶴ヶ島市教育委員会生涯学習スポーツ課が中心となり準備が進められているが、取り組みの初年度となった昨年は、市内中学校の全てに設置されているバスケットボール部を対象に12月に週末の部活動を合同で実施する事業を試みた。また、本モデル事業の取り組みをマネジメントするために実際の活動に参加した生徒およびその保護者を対象とした質問紙調査を行い、生徒の特性や活動内容への期待、活動を行った後の評価や成果について回答を求めた。その結果、モデル事業への取り組みの準備段階でコンセプトとしていた①子どもたちの心身の成長と可能性を伸ばすスポーツ活動、②活動を支える人たちの喜びや生きがいにつなげる、③鶴ヶ島市の新しいまちづくりに向けて、一部の評価が示された。特に、スポーツマネジメント研究の基本視点となる「活動を取り巻く要因」や関わりのある組織における「マネジメントの役割」、さらに継続的な活動への取り組みを視野に入れた「マネジメントサイクルの構築」など、今後の重要な課題が示唆された。

■ 2025年8月29日(金) 10:00 ~ 10:59 ■ 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[3a1001-03] 体育経営管理／口頭発表①

座長:石井 十郎(東海大学)

10:40 ~ 10:59

[06経-口-03] 総合型地域スポーツクラブにおけるソーシャル・イノベーションプロセスと支援体制の関係性

特定非営利活動法人取得クラブのインタビュー調査に基づく考察

*祐末 ひとみ¹、長積 仁² (1. 神戸親和大学、2. 立命館大学)

非営利組織（NPO）には、行政と協働し、政策を遂行する担い手としての役割が期待されている（山岡, 2011；Salamon, 1995）。その一方で、資金・人材不足や運営基盤の脆弱性などの課題が指摘され（木村, 2018；スポーツ庁, 2023）、それを補う公的支援は、組織の個別的ニーズや成長段階を考慮せず、共通課題への一律的な対応が主流であった。今田（1997）は、支援体制を設計する上で、支援者側が一方的な支援を提供するのではなく、支援を受ける側の状況変化やニーズを把握し、柔軟に対応する支援システムの構築が重要であると述べている。また公的サービスにかかわる事業には、国家や政府などの理解と協力が不可欠だというSalamon(1995)の指摘を踏まえ、本研究では、NPO法人格を有する総合型地域スポーツクラブ（総合型クラブ）が手掛ける社会課題の解決に資する活動に焦点を当てる。その上で、総合型クラブの活動を谷本ら（2013）が提唱するソーシャル・イノベーションプロセスの概念に当てはめ、総合型クラブの取り組みが結実するまでの所轄行政との関係や行政支援の内実を明らかにし、支援方策や支援体制について検討する。本研究では、大阪府内でNPO法人格を有し、活動実態・運営形態・ガバナンス等の基準を満たした日本スポーツ協会に登録する12の総合型クラブを対象に、半構造化インタビューによってデータを収集した。調査は、クラブ運営に精通する関係者に対し、2023年8月から2024年2月までの期間に実施した。その結果、対象クラブの多くは、「社会課題の認知」や「活動の開始」には容易に至っていたものの、事業の安定化を図る取り組みや行政から事業を請け負うまでに至る総合型クラブは限定的であった。事業化の推進を図るためには、行政との協働やクラブが手掛ける公益活動に対する行政の理解が重要であることが示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育経営管理

⌚ 2025年8月29日(金) 11:10 ~ 11:49 🏢 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[3a1004-05] 体育経営管理／口頭発表②

座長:山本 悦史(新潟医療福祉大学)

11:10 ~ 11:29

[06経-口-04]

官民協働によるボールパーク建設とスポーツまちづくり
北海道ボールパークFビレッジの事例研究

*松橋 崇史¹ (1. 拓殖大学)

11:30 ~ 11:49

[06経-口-05]

スタジアム・アリーナ改革とソーシャルイノベーション
地域・コミュニティの革新の視点から

*平山 友梨¹ (1. 立命館大学院経営学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育経営管理

2025年8月29日(金) 11:10 ~ 11:49 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[3a1004-05] 体育経営管理／口頭発表②

座長:山本 悦史(新潟医療福祉大学)

11:10 ~ 11:29

**[06経-口-04] 官民協働によるボールパーク建設とスポーツまちづくり
北海道ボールパークFビレッジの事例研究***松橋 崇史¹ (1. 拓殖大学)

2010年代以降、プロクラブの本拠地となるスタジアム・アリーナの新設・増改築が積極的に進められ、そこを本拠地とするプロクラブの収益増加と経営安定および、付随する社会的経済的効果の創出が期待されてきた。新たなスタジアム・アリーナの整備が、特定の主体の収益増加に結び付くことが期待される一方で、それが「スポーツまちづくり」（高岡・松橋、2025）に結びつくかどうか、また、それを促すための方法論は曖昧なままである。本研究では、2023年シーズンよりプロ野球球団の北海道日本ハムファイターズ（以下、ファイターズと略す）の本拠地として利用されているエスコンフィールドHOKKAIDOとそれを中央に有する北海道ボールパークFビレッジに着目し、Fビレッジの建設を可能としたファイターズと北海道北広島市の協働関係に焦点をあてる。ファイターズと北広島市の協働関係の中で、Fビレッジ建設を構想し、主導した主体が、それを取り巻く「制度」にどのように制約、促進され、同時に変更を迫りながらFビレッジの建設を推進し、そのことが完成後のFビレッジを介した「スポーツまちづくり」にいかなる影響を与えたのか把握する。本研究では、2018年以降のファイターズと北広島市の関係者に対するインタビュー調査と文献調査のデータを用いる。スポーツまちづくりには地域の自治体、企業、団体、市民等の多主体の関与とそれらの価値創造が求められる。北広島市がFビレッジ建設に当初から深く関与し、そのために必要な役割をファイターズとの対話の中で担っていったこと、および、スポーツまちづくりに係わるファイターズ側の制度設計が、Fビレッジを介した地域の多主体の関与とそれらの価値創造を促したのかどうかを検討する。＜参考＞高岡敦史・松橋崇史（2025）．スポーツまちづくりの定義．体育スポーツ経営学研究，38：1-18

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育経営管理

⌚ 2025年8月29日(金) 11:10 ~ 11:49 🏢 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[3a1004-05] 体育経営管理／口頭発表②

座長:山本 悦史(新潟医療福祉大学)

11:30 ~ 11:49

**[06経-口-05] スタジアム・アリーナ改革とソーシャルイノベーション
地域・コミュニティの革新の視点から***平山 友梨¹ (1. 立命館大学院経営学研究科)

今日の日本では、サービスビジネスが果たす役割も大きく、中でもスポーツ産業には、国民生活に潤いを与え、人々の健康の維持・向上や地域への一体化、コミュニティ意識の高揚等個々の意識を育み、地域社会ににぎわいや雇用をもたらすとともに、観光や建設、流通等地域経済及び他産業を活性化させる可能性がある。特に、プロスポーツビジネスのコアとなる試合が行われるスタジアム・アリーナを基盤としたビジネスは、大きな収益を生み出す場であるとともに、優れた経験価値提供の場でもある。多様なステークホルダーと関わるプロスポーツ組織は、効率的かつ効果的なマネジメントを発揮し、ステークホルダーと協働し、社会が円滑に機能するようスタジアム・アリーナに期待される有用性を発揮、実現していかなばならない。その状況にあって国は、地域活性化や地方創生の実現に資するスタジアム・アリーナの潜在力を最大限発揮すべく、関係省庁と連携し、スタジアム・アリーナ改革ガイドブックの公表や、整備構想・計画の策定支援等に取り組んでいる。例えば、スポーツ庁の支援事業として、サガン鳥栖（男子サッカー）と株式会社共同通信デジタルとのVR技術を活用したスポーツ体験による子供の運動習慣を育む事業等がみられる。そこで、本研究では、わが国のスポーツ政策の変遷、とりわけ2010年スポーツ立国戦略に沿って論を進め、海外の事例も参考にしつつ、今日における地域・コミュニティの重要性とそこでプロスポーツが果たすべき役割について検討する。プロスポーツ組織の地域・コミュニティ創造への貢献実態、地域の社会経済的特性とスポーツ組織の関係性、スタジアム・アリーナを核とした都市・地域の動態的な変化について、経済的・社会的影響を可視化することを目指す。また、複数の事例を比較対象とし、共通する構造と地域固有の要因を抽出することで、広く一般に活用可能な知見を検討する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

📅 2025年8月29日(金) 9:15 ~ 9:59 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1101-03] 介護予防・健康づくり／口頭発表①

座長:木村 駿介(静岡産業大学)

9:15 ~ 9:29

[14介-口-01]

動作改善トレーニング時の対話の有無が血圧に及ぼす影響について

*早川 公康¹ (1. 仙台大学)

9:30 ~ 9:44

[14介-口-02]

日中の眠気に対する二酸化炭素曝露の影響：睡眠潜時反復検査による証拠

二酸化炭素曝露と日中の眠気

*金 瑞年^{1,2} (1. 仙台大学 体育学部、2. 東北大学大学院医学系研究科運動学分野)

9:45 ~ 9:59

[14介-口-03]

HADOにおける活動強度の定量化と心理的影響の検討

*松元 隆秀¹、山本 憲英² (1. 常葉大学教育学部生涯学習学科、2. 株式会社KUL SC事業部 eスポーツ事業推進室)

■ 2025年8月29日(金) 9:15～9:59 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1101-03] 介護予防・健康づくり／口頭発表①

座長:木村 駿介(静岡産業大学)

9:15～9:29

[14介-口-01] 動作改善トレーニング時の対話の有無が血圧に及ぼす影響について*早川 公康¹ (1. 仙台大学)

これまでに高血圧を予防・改善するための様々な試みがなされてきている。一般的な有酸素運動等が推奨されてきたものの、より安全で即時的効果が期待できる運動方法についての成果は少なく、さらにはトレーニング時の対話の影響に関する研究は存在していない。

今回は対話によるトレーニング効果の可能性について着想した。本研究では、歩行動作の改善のために開発された動作改善トレーニングマシン SPK（開発者：小林〈東京大学名誉教授〉）を用いて、トレーニング時の対話の有無による血圧の変動を比較することを目的とした。

2024年10月より半年間、医師により運動を禁止されていない高齢者9名（男性5名、女性4名）を被験者とした。初期の最高血圧は男性 131.4 ± 5.4 mmHg・女性 134.3 ± 16.1 mmHg、最低血圧は男性 84.4 ± 5.0 mmHg・女性 77.0 ± 5.8 mmHgであった。

「トレーニング時の対話」は、トレーニング直後30分間、健康に関する懇談を少人数で行った。「対話有り日」と「対話無し日」は隔週で設定した。

「対話有り日」の血圧変化率（ $\text{Tr後}/\text{Tr前} \times 100$ ）は男性で最高血圧 $95.9 \pm 2.1\%$ ・最低血圧 $98.8 \pm 1.4\%$ 、女性で最高血圧 $97.6 \pm 2.9\%$ ・最低血圧 $102.8 \pm 5.0\%$ であった。「対話無し日」の血圧変化率は男性で最高血圧 $91.7 \pm 3.8\%$ ・最低血圧 $94.8 \pm 2.8\%$ 、女性で最高血圧 $91.4 \pm 4.1\%$ ・最低血圧 $99.2 \pm 3.5\%$ であった。

最高血圧・最低血圧ともに男女各々、「対話無し日」のほうがトレーニング後の低下が大きい傾向がみられた。検定を行ったところ、「対話無し日」の男性最低血圧が「対話有り日」と比較して有意に低下（ $p < 0.05$ ）したことが認められた。今回の結果から、高齢者の血圧コントロールにおいて、同じトレーニング種目であっても対話の有無により、その影響が異なる可能性が示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

2025年8月29日(金) 9:15 ~ 9:59 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1101-03] 介護予防・健康づくり／口頭発表①

座長:木村 駿介(静岡産業大学)

9:30 ~ 9:44

[14介-口-02] 日中の眠気に対する二酸化炭素曝露の影響：睡眠潜時反復検査による証拠

二酸化炭素曝露と日中の眠気

*金 瑞年^{1,2} (1. 仙台大学 体育学部、2. 東北大学大学院医学系研究科運動学分野)

【背景・目的】このペアード・クロスオーバー研究では、二酸化炭素（CO₂）曝露が睡眠潜時反復検査（MSLT）で測定される日中の眠気を誘発するかどうかを調べることを目的とした。【方法】11人の健康な参加者について、環境制御されたチャンバー内において、CO₂曝露条件下（4851±229 ppm CO₂）とコントロール条件下（1102±204 ppm CO₂）で、睡眠潜時を4回測定した。また、各測定後に、スタンフォード眠気尺度質問票、精神運動覚醒度テスト、ストループテストを用いて、主観的眠気と認知パフォーマンスを評価した。【結果】CO₂曝露群では、睡眠潜時の有意な短縮が観察された（コントロール vs. CO₂ = 13.1 ± 3.3分 vs. 9.7 ± 3.2分）。主観的な眠気スコアも、CO₂曝露群がコントロール群より有意に高かった（コントロール vs. CO₂ = 2.7 ± 0.5 vs. 4.7 ± 0.8）。セッション後の認知反応には、条件間で有意差は見られなかった。【考察・結論】作業現場での環境安全上限濃度と同程度のCO₂曝露は、曝露後の認知反応に影響を与えることなく、MSLTにおける睡眠潜時を有意に短縮し、主観的な眠気を増強した。この結果から、環境中の高濃度CO₂への曝露は日中の眠気を誘発し、作業効率と安全性を損なう可能性があることが示された。

2025年8月29日(金) 9:15 ~ 9:59 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1101-03] 介護予防・健康づくり／口頭発表①

座長:木村 駿介(静岡産業大学)

9:45 ~ 9:59

[14介-口-03] HADOにおける活動強度の定量化と心理的影響の検討

*松元 隆秀¹、山本 憲英² (1. 常葉大学教育学部生涯学習学科、2. 株式会社KUL SC事業部 eスポーツ事業推進室)

AR技術を応用したHADOに関する活動強度や心理的效果の学術的研究はまだ限られている。厚生労働省は、週150分以上の中等強度の身体活動を推奨しており、これを実現するために多様な運動手段の選択が求められている。本研究では、HADOが心身両面から健康づくりに与える影響を検討するため、HADO1試合あたりの活動強度とプレー前後の気分変化を明らかにすることを目的とした。成人男女49名（男性38名、32.0 ± 12.0歳；女性11名、30.0 ± 10.0歳）を対象に、のべ130試合のデータを収集した。活動量計を用いて、1試合（80秒）あたりの活動強度を算出した。統計解析には被験者IDをランダム効果とする線形混合モデルを用い、固定効果には運動習慣、HADO経験、試合中の役割、性別、年齢を含めた。また、HADO実施前後の心理的变化は一時的気分尺度を用いて測定し、実施前後の得点を対応のあるt検定で比較した。HADO1試合あたりの活動強度は3.9 ± 1.1 METs（男性4.1 ± 1.2、女性3.5 ± 0.9）であり、中等強度に相当した。日頃から運動習慣のある群およびHADOのプレー経験がある群は、それぞれ該当しない群と比較して、有意に高い活動強度を示した。また、試合中の役割の主効果は有意ではなく、性別や年齢など他の要因を統制したモデルでも、活動強度に対する影響は確認されなかった。さらに、心理的变化として、「混乱」の得点が有意に低下し、「活気」の得点が有意に上昇した。HADOは短時間で中等強度以上の運動が可能であり、運動習慣や経験を有する者は、より高い活動強度を示した。一方で、試合中の役割や性別による影響は小さく、運動習慣がない場合でも一定の運動強度が得られる傾向が見られた。さらに、混乱の低下や活気の上昇といったポジティブな心理的变化も確認された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

📅 2025年8月29日(金) 10:05 ~ 10:49 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1104-06] 介護予防・健康づくり／口頭発表②

座長:久保田 晃生(東海大学)

10:05 ~ 10:19

[14介-口-04]

Application of Obesity Indicators in Identifying Hypertension Risk: Evidence from Adults in Macao

An Analysis Based on the 2020 Physical Fitness Surveillance Data of Macao

*Jiang Lupei^{1,2}, Koya Suzuki², Xiang Pan^{1,2}, Yibo Gao^{1,2}, Donghai Xu² (1. Kokumin Tairyouku Monitoring Kagaku Kenshin Kenkyu Center, 2. Supotsu Kenko Kagaku Kenkyuka)

10:20 ~ 10:34

[14介-口-05]

赤外線深度センサーによる高齢者のステッピングテスト評価の性差

*藤田 英二¹、竹島 伸生²、小濱 剛³、楠 正暢³、大庭 有希也⁴、高磯 諒大² (1. 鹿屋体育大学、2. 朝日大学、3. 近畿大学、4. ハワイ大学マノア校)

10:35 ~ 10:49

[14介-口-06]

高齢者の日常生活・社会活動と嚥下機能との関連

*藤田 恵理¹、平工 志穂²、横澤 喜久子² (1. 帝京大学、2. 東京女子大学)

■ 2025年8月29日(金) 10:05 ~ 10:49 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1104-06] 介護予防・健康づくり／口頭発表②

座長:久保田 晃生(東海大学)

10:05 ~ 10:19

[14介-□-04] Application of Obesity Indicators in Identifying Hypertension Risk: Evidence from Adults in Macao

An Analysis Based on the 2020 Physical Fitness Surveillance Data of Macao

*Jiang Lupei^{1,2}, Koya Suzuki², Xiang Pan^{1,2}, Yibo Gao^{1,2}, Donghai Xu² (1. Kokumin Tairyoku Monitoring Kagaku Kenshin Kenkyu Center, 2. Supotsu Kenko Kagaku Kenkyuka)

Objective

This study aimed to compare the predictive ability of four obesity indicators (waist circumference [WC], waist-to-height ratio [WHtR], body mass index [BMI], and a body shape index [ABSI]) for hypertension among adults in Macao, and to examine their performance across sex and age groups.

Methods

Data were obtained from the 2020 Physical Fitness Surveillance of Macao. A total of 3,891 adults aged 20-59 years (1,500 males and 2,391 females) were randomly selected from seven districts. Anthropometric measures included height, weight, WC, and body fat percentage. Blood pressure was measured twice, and hypertension was defined as SBP $\geq$ 140 mmHg, DBP $\geq$ 90 mmHg, or recent use of antihypertensive drugs. All obesity indices were standardized using Z-scores. Logistic regression was used to assess associations between each index and hypertension. Indicators were also divided into quartiles (Q1-Q4) to evaluate trend risks. Subgroup analyses were conducted by sex and four age groups. ROC curves, AUC, and Youden index were used to evaluate predictive performance.

Results

WHtR, WC, and BMI were significantly associated with hypertension ($P < 0.001$). Z-score regression showed ORs of 1.81 (WHtR), 1.88 (WC), 1.79 (BMI), and 1.24 (ABSI). Quartile analysis revealed increasing risk from Q1 to Q4. Females aged 20-39 were more sensitive to obesity-related hypertension, especially those aged 20-29 (WC OR=2.40, WHtR OR=1.93). In males, peak risk was found in the 40-49 age group (WHtR OR=2.24). WHtR had the highest AUC (0.767 for females, 0.684 for males) and Youden index (0.4519 and 0.3124, respectively).

Conclusion

WHtR was the most effective predictor of hypertension among adults in Macao and is recommended for early screening. Interventions should target young females and middle-aged males. ABSI showed poor performance and is not suitable for hypertension screening. WHtR-based, age- and sex-specific strategies may improve early risk identification and prevention.

■ 2025年8月29日(金) 10:05 ~ 10:49 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1104-06] 介護予防・健康づくり／口頭発表②

座長:久保田 晃生(東海大学)

10:20 ~ 10:34

[14介-口-05] 赤外線深度センサーによる高齢者のステッピングテスト評価の性差

*藤田 英二¹、竹島 伸生²、小濱 剛³、楠 正暢³、大庭 有希也⁴、高磯 諒大² (1. 鹿屋体育大学、2. 朝日大学、3. 近畿大学、4. ハワイ大学マノア校)

【背景】 これまでに高齢男女を対象に赤外線深度センサー（KINECT）を用いた20秒間のステッピングテスト（ST）時における頭部総移動距離（TMD）、膝関節総移動距離（KMD）とそれらの比（TMD/KMD）や膝関節高（MKH）などのKINECT指標が、高齢女性の機能的自立度またはADL評価尺度として判別できることを示した（Takeshima et al., 2019）。一般的に筋力や下肢関節可動域には性差が生じている可能性があるが、本KINECT指標に関する性差の影響はいまだ検討していない。【目的】 地域で自立している人から介護保険利用者に至るまでの幅広い高齢男女を対象に、ST時のKINECT指標の性差を比較した。【方法】 対象は地域居住の高齢の男性73名と女性77名の計150人（76.2 ± 6.3歳）で、うち介護保険利用者が87名であった。STは20秒間の開眼によるその場足踏みを、テンポや足のあげ方などは自由にさせて行わせた。得られたKINECTデータの追加変数として、それぞれの身長比、体重比、BMI比も求めた。これらの性差の検討には、ノンパラメトリック法を用いて中央値検定とMann-Whitney U testで分布の相違を比較した。【結果】 TMDは身長比、体重比、BMI比も含めて男女間で有意差が認められたが、KMDには有意差がいずれも認められなかった。TMD/KMDはBMI比を除き、いずれも男女間では有意差が認められなかった。MKHは体重比以外の指標で男女間の有意差が認められた。【まとめ】 TMDおよびMKHの多くの指標では、形態で補正をしても男女間での相違は明らかであった。一方でBMI比を除くTMD/KMDと、すべてのKMDの指標には男女で有意差が認められなかったことから、これらのKINECT指標は、高齢男女において同じ評価基準での使用が可能かもしれない。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

■ 2025年8月29日(金) 10:05～10:49 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1104-06] 介護予防・健康づくり／口頭発表②

座長:久保田 晃生(東海大学)

10:35～10:49

[14介-口-06] 高齢者の日常生活・社会活動と嚥下機能との関連*藤田 恵理¹、平工 志穂²、横澤 喜久子² (1. 帝京大学、2. 東京女子大学)

人生100年時代を迎え、高齢者の生活の質向上に向けた健康維持・障害予防の実践的手法の開発が求められている。本研究の目的は、高齢者の日常生活や社会活動が嚥下機能に与える影響を明らかにすることである。嚥下機能低下は食事の困難、意欲低下、疾病、生活の質の低下を引き起こす要因であり、予防的介入の必要性が高まっている。しかしながら、嚥下機能と社会活動、特に会話・運動・趣味活動などの関係を検討した研究は少ない。本研究では、東京都内の高齢者140名を対象に質問紙調査を行い、有効回答135名（平均年齢77.3±6.1歳、男性49名、女性85名）を分析した。嚥下障害リスク評価尺度（深田ら）を用いて評価した結果、嚥下障害リスクありと判断された高齢者は50名（37.0%）であった。嚥下障害リスクと健康状態・生活習慣・社会活動との関係について χ^2 検定で分析した結果、嚥下に影響する疾患の有無に加え、「食事を楽しいと感じている」「外出の頻度」「楽器の演奏」の3項目で有意差が認められた（ $p<0.05$ または $p<0.01$ ）。特に、楽器を演奏する者では嚥下障害リスクが有意に低く、ピアノやギターなどの演奏が神経－筋協調性を高め、嚥下機能の維持に寄与している可能性が示唆された。楽器演奏は、複雑な随意運動を必要とし、運動神経と感覚神経のフィードフォワード・フィードバック作用が求められることから、嚥下運動に共通する神経－筋の調整能力が向上すると考えられる。本研究は、日常生活や社会的活動が嚥下機能に与える影響を実証的に示したものであり、楽器演奏や外出机会の確保、食事の楽しさなど、生活の質向上を通じた嚥下機能低下の予防が今後の介入において重要であることを示唆している。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

📅 2025年8月29日(金) 10:55 ~ 11:54 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1107-10] 介護予防・健康づくり／口頭発表③

座長:根本 みゆき(筑波大学)

10:55 ~ 11:09

[14介-口-07]

オリジナル体操を含む地域密着型運動プログラムの実施と評価
高齢者の身体機能と心理的变化に着目した実践報告

*丸山 裕司¹、田中 亨²、福富 彩子³ (1. 東海学園大学、2. 仙台大学、3. 愛媛大学)

11:10 ~ 11:24

[14介-口-08]

高齢者における自覚的な発声評価と身体的・心理的健康状態との縦断的研究
かさまスタディによる2年間の追跡研究

*西村 生¹、角田 憲治¹、大藏 倫博¹ (1. 筑波大学)

11:25 ~ 11:39

[14介-口-09]

地方高齢者の歩行・活動量の実態と健康維持の課題

*花岡 美智子¹ (1. 東海大学)

11:40 ~ 11:54

[14介-口-10]

週1回の集団エクササイズトレーニングを行っている高齢者の体力の変化

*松井 健¹、林 勇樹¹、巽 樹理¹ (1. 追手門学院大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

■ 2025年8月29日(金) 10:55 ~ 11:54 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1107-10] 介護予防・健康づくり／口頭発表③

座長:根本 みゆき(筑波大学)

10:55 ~ 11:09

**[14介-口-07] オリジナル体操を含む地域密着型運動プログラムの実施と評価
高齢者の身体機能と心理的变化に着目した実践報告***丸山 裕司¹、田中 亨²、福富 彩子³ (1. 東海学園大学、2. 仙台大学、3. 愛媛大学)

本研究は、青森県田子町において、地域の伝承文化や風土を活かした高齢者向け運動プログラム「タプコプさわやか運動プログラム」を開発・実施し、その有効性を検証したものである。田子町は運動習慣者が少なく、健康寿命の延伸が重要課題となっている。健康日本21（第三次）に掲げられた「すべての国民が健やかで心豊かに生活できる持続可能な社会の実現」の理念をふまえ、本プログラムでは、筋力トレーニング（約7分）と地域に馴染みのある音楽・動作を取り入れたオリジナル体操（約5分）で構成された映像を制作し、田子町ケーブルテレビにて日々放映した。研究対象は、田子町在住の高齢者20名（男性2名、女性18名）であり、体力測定、質問紙調査、インタビュー調査を通じて多角的な評価を行った。

1日あたりの平均歩数は5,907歩、運動実践率は96日間中平均66日であった。介入前後の体力測定では、全項目において有意な向上が見られ、特に下肢筋力やバランス能力の改善が顕著であった。SF-8によるQOL調査では「活力」の向上が統計的に有意であり、日常生活における「体力に対する自信」にも肯定的な変化が確認された。インタビュー調査では、「立ち上がりが楽になった」「毎日の楽しみになっている」といった身体的・心理的効果が多数挙げられ、プログラムの継続性と地域との親和性が示された。また、田子町出身で東京都在住の高齢者にも同プログラムを紹介し、ふるさととのつながりを意識した普及活動を行ったが、実施頻度は町内より低かった。参加者からの継続希望も多く、現在もケーブルテレビでの放映が継続されている。本研究は、地域文化を活用した運動支援が高齢者の健康づくりに貢献していることを示唆している。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

📅 2025年8月29日(金) 10:55 ~ 11:54 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1107-10] 介護予防・健康づくり／口頭発表③

座長:根本 みゆき(筑波大学)

11:10 ~ 11:24

[14介-口-08] 高齢者における自覚的な発声評価と身体的・心理的健康状態との縦断的研究

かさまスタディによる2年間の追跡研究

*西村 生¹、角田 憲治¹、大藏 倫博¹ (1. 筑波大学)

【背景】加齢により音声の問題は増加し、その生涯有病率は3割に達する。音声問題の一種である発声障害と抑うつとの関連は複数報告され、一部の横断研究では、同障害と身体活動制限の関連性を認めている。だが、これらの関連性を検証した研究は乏しく、効果的な支援策の構築のため、追跡研究に基づく知見の蓄積が求められる。そこで本研究では、2年間の追跡研究により高齢者の発声評価と身体的・心理的健康状態との関連性を検証した。【方法】2022年に実施された体力測定会の参加者252名のうちデータ欠損がなく、2023年と2024年の追跡調査に1回以上参加した172名を対象とした（76.4±5.3歳、女性103人）。自覚的な発声評価にVoice Handicap Index 10（VHI-10）を用いた。先行研究を参考に、VHI-10が0点を「発声障害なし」（PVHなし）群、1点～4点を「軽微な発声障害あり」（軽微PVH）群、5点以上を「発声障害あり」（PVH）群とした。身体機能評価に握力、開眼片足立ちテスト、椅子立ち上がりテスト、5m通常歩行時間、長座体前屈を用いた。心理的健康はGDS、身体活動量はPASEにより評価した。統計解析には線形混合モデルを用い、従属変数に身体的・心理的指標、説明変数に自覚的な発声評価を投入し、各種共変量で調整した。【結果】2年間の追跡調査の結果、交互作用が認められた項目はなかったが、長座体前屈と5m通常歩行時間に群および時間の固定効果が認められた。全体として加齢に伴い両パフォーマンスは低下するが、追跡期間を通して軽微PVH群やPVH群は、PVHなし群に比べて低値を示した。また、GDSでも群の固定効果が認められ、追跡期間を通してPVH群は他の群と比較して抑うつ度が高かった。【結論】追跡期間を通して自覚的な発声障害がある高齢者は、柔軟性および歩行能力が低く、抑うつ度が高いことがわかった。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

2025年8月29日(金) 10:55 ~ 11:54 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1107-10] 介護予防・健康づくり／口頭発表③

座長:根本 みゆき(筑波大学)

11:25 ~ 11:39

[14介-口-09] 地方高齢者の歩行・活動量の実態と健康維持の課題*花岡 美智子¹ (1. 東海大学)

目的：高齢者にとって、生活をしていく上での交移動手段の確保は重要な問題である。特に地方では自家用車の免許返納後、代替交通手段が不十分なため、生活圏が縮小し活動量が低下する恐れがある。本研究は、地方に住む後期高齢者の1日の歩数と身体活動量を測定し、健康づくりの現状と課題を明らかにすることを目的とした。方法：地方在住の後期高齢者1名（81歳女性）を対象に1日平均歩数、消費カロリー、運動時間の計測を実施した。測定期間は2025年1月～5月の計117日間である。得られたデータを全国平均と比較、また季節や時間帯による影響についても検討していく。結果：1日平均歩数の平均値は 2589.2 ± 1192.95 歩、1日歩数時間は平均 61.5 ± 24.62 分、運動強度別では、3METs未満が平均 236.3 ± 138.99 分、やや強度のある運動（3METs以上）は平均 7.1 ± 13.69 分であった。考察：厚生労働省は、75歳以上の女性の平均歩数が $3,584 \pm 2,737$ 歩、65歳以上の女性の1日の歩数目標値は約6000歩と示している。対象者の歩数は目標の43.2%に留まり、やや強度のある運動は1%未満と非常に少ない結果であった。これは81歳という高齢から通常の歩行速度が遅かったことが影響していると考えられる。国土交通省は80歳代女性の歩数中央値は、15万人以上の市で2373歩、人口5万人未満の市では1607歩であり、都市部高齢者は地方に比べ歩数が多い傾向があることを報告している。対象者の歩数はそれを上回っていたが、免許返納に伴い自転車移動が中心となり、活動範囲が縮小、天候や時間帯に活動が制約されている現状が明らかとなった。結論：高齢者が活動量を確保する為には、本人の意欲に加えて、移動のモチベーションを高めるコミュニティの形成や、天候に左右されない公共交通サービスの充実が必要である。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：介護予防・健康づくり

📅 2025年8月29日(金) 10:55 ~ 11:54 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[3a1107-10] 介護予防・健康づくり／口頭発表③

座長:根本 みゆき(筑波大学)

11:40 ~ 11:54

[14介-口-10] 週1回の集団エクササイズトレーニングを行っている高齢者の体力の変化*松井 健¹、林 勇樹¹、巽 樹理¹ (1. 追手門学院大学)

【背景】地域高齢者の健康運動教室は、運営負担や利用者の参加しやすさ、長期の継続性を考慮し、集団で行うエクササイズセッションを週1回で実施することが多い。このような週1回のセッションが長期的に体力等に及ぼす影響は不明な点も多い。【目的】本研究は、週1回の頻度で継続する高齢者の集団エクササイズが、長期的な体力変化にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とした。【方法】週1回、45分間の有酸素運動を主とした集団エクササイズのセッションを、4月から13回、および10月から13回、計2期、年間26回行った。様式は、陸上運動もしくは水中運動のいずれかとした。2022年度から3年間、継続的に参加し、測定会に参加した高齢者を分析対象とした。対象者は、32名（うち男性5名）で、2022年当初の平均年齢は75歳であった。文部科学省の「新体力テスト」、Timed Up & Go (TUG)テスト等の体力指標、ならびに身体組成および動脈スティフネスの計測も行った。【結果】各年度の平均値を求め、2022年度と2024年度を比較し、経年変化をみた。開眼片足立ち時間は、経年変化での個人間変動が大きく、その変化量と3年間（計6回）の測定における個人の平均記録間に有意な負の相関関係がみられた。TUGと6分間歩行の経年変化の間にも有意な負の相関関係がみられ、TUGのタイムが遅くなった者は、6分間歩行能力も低下する傾向がみられた。また、6分間歩行の平均値は、2022年度に比べ2024年度で有意に低下した。【考察・結論】週1回の持久系集団エクササイズでは、後期高齢者のバランス能力の低下ならびに持久力（移動能力）の低下を抑制することは難しいことが示唆された。後期高齢者の運動プログラムにおいてはこれらの能力を包括的に鍛え、運動頻度を増やすといった方策が重要であると考えられる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:18 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1201-04] スポーツ人類学／口頭発表②

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:00 ~ 9:18

[12人-口-04]

イギリススポーツ団体における子どもの意見表明権実現のための試みとセーフガーディングにおける意義について

*森 克己¹、山田 理恵² (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿児島大学稲盛アカデミー)

9:20 ~ 9:38

[12人-口-05]

独立後のカンボジアにおける体育制度の再建
体育に関する国際支援の動向に着目して*山口 拓¹ (1. 筑波大学)

9:40 ~ 9:58

[12人-口-06]

日本の武道を通じた国際開発における子どもへの虐待防止制度の意義と課題に関する研究

*町田 直大¹、森 克己¹ (1. 鹿屋体育大学)

10:00 ~ 10:18

[12人-口-07]

ドイツの柔道教育における形の位置付け
ドイツ柔道連盟の取り組みの分析を中心に*ソリドーワル マーヤ¹ (1. 津田塾大学)

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:18 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1201-04] スポーツ人類学／口頭発表②

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:00 ~ 9:18

[12人-口-04] イギリススポーツ団体における子どもの意見表明権実現のための試みとセーフガーディングにおける意義について*森 克己¹、山田 理恵² (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿児島大学稲盛アカデミー)

イングランドサッカー協会（FA）では、協会内のクラブで指導者等が子どもの意見を聞く取組をしてきたが、2024年4月に子どもの意見を聞くためのガイドライン（Listening to Child-ren）を策定した。その中で、クラブが子どもに影響を与えるどんなことでも子どもと会話すべきであること、その根拠として、子どもの権利条約で、子どもは自分たちに影響のある問題について発言する権利があり、意思決定では、子どもの意見が正当に考慮される権利があることが挙げられている。また、大人は若者の意見が意思決定の中心となるようにすること、意見が定期的かつ積極的に求められ、子どもが安心して意見を述べる環境をつくることは、クラブ内に子ども中心の文化を築くのに役立ち、子どもの権利が実現されるとしている。

さらに、スポーツにおける子ども保護局（Child Protection in Sport Unit）は、子どもと若者の活動への関りのガイドライン（Involving Children and Young People）を2023年に策定した。その中で、自らの問題や懸念を提起できること等が子どもと若者がクラブや活動に参加するメリットとして挙げられ、また、組織にとっても、若者が大切にされ意見を聞かれていると感じれば、懸念を報告し、スポーツを長く続ける可能性が高まること等が指摘されている。上記FAのガイドラインでも、虐待の被害者たちが、自分の意見や見解を責任者と共有するよう奨励されないクラブ文化があったと語ったように、子どもの意見が表明できる環境は虐待防止にも繋がることが示されている。

本研究では、イギリススポーツ団体における子どもの意見表明権実現のための上記の取組を中心に考察し、子どもの意見表明権の保障がセーフガーディングの環境の醸成に繋がることなど、日本の子どものスポーツ活動の在り方の見直しにも資する提言をする。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:18 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1201-04] スポーツ人類学／口頭発表②

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:20 ~ 9:38

[12人-口-05] 独立後のカンボジアにおける体育制度の再建

体育に関する国際支援の動向に着目して

*山口 拓¹ (1. 筑波大学)

第2次世界大戦以降の国際社会では、それまで宗主国の支配下にあった多くの植民地が国政を自律的に運営した経験のないままに新たな近代国家を樹立し、未経験の政府が創意工夫によって、その構造を改変しながら国家を運営する過程で、動乱の時代を歩んだ国も少なくない。本研究の対象国であるカンボジアも例外なく、戦後に若き国王の下で完全独立を成し遂げたが、国際イデオロギーの影響を受けながら、国内の政治問題に翻弄されたことで動乱の時代を経験し、国家運営の主義主張や社会構造を二転三転させて現代に至っている。

以上を踏まえて本研究では、文献資料およびインタビュー調査の結果を用いて、国家体制や外交的な特徴を有する時代に区分して分析し、国家的な体制変動を伴いながら形成された独立後のカンボジアにおける体育制度の再建過程を考察した。具体的には、戦後から現在に至るカンボジアの国家体制と体育およびスポーツに関する国際支援の動向を踏まえて体育制度の形成過程を示した上で、その分析結果を「意図した教育体制」の視点から考察した。

考察の結果、独立後のカンボジアにおける体育制度は、各時代の政治的・社会的状況や国家方針に応じた支援が展開されたことで、独立期の愛国心育成、復興期の社会主義教育、開発期の道徳的な体育を重視する多面的価値を求める体育へと変容させ、最終的に国際的な体育の潮流を意識する段階へ移行していたことが判明した。

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:18 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1201-04] スポーツ人類学／口頭発表②

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:40 ~ 9:58

[12人-口-06] 日本の武道を通じた国際開発における子どもへの虐待防止制度の意義と課題に関する研究*町田 直大¹、森 克己¹ (1. 鹿屋体育大学)

1990年代以降、国際開発や人道支援の現場において、国際機関やNGO職員による子どもや若者への性的搾取や虐待の問題が世界的に注目されてきた。これを受け、国連や各国政府、国際NGOは、PSEAHとして、性的搾取や虐待の被害防止と加害予防のガイドライン整備や職員研修を強化するなど、包括的な取組を進めてきた。例えば2018年、英国の国際開発省（DFID）が開催したセーフガーディング・サミットでは、日本を含む22か国がPSEAH対策の合同コミットメントに署名し、2019年にはOECD開発援助委員会（DAC）が「開発協力と人道支援における性的搾取・虐待に関する勧告」を発表するなど、制度化が進められている。

以上のとおり、国際開発におけるPSEAHや子ども保護（以下CPと略）の重要性が国際的にも認知され、様々な取組がなされてきたが、人道開発支援現場における支援者による性的搾取・虐待の課題の考察から、被援助国の女性たちが主体的に関与できる構造へと変革される必要があるとの指摘もされている（尾立、2023）。

そのため、日本においてもPSEAHやCPの研修を受けた人材が国際開発に取り組む体制を整備することが求められている。こうした背景を踏まえ、本研究では、日本の武道を通じた国際開発活動におけるCPの意義と課題について明らかにすることを目的とする。具体的には、JICA海外協力隊等として柔道や剣道の指導経験を持つ実践者及びOJP先でのインタビューおよびアンケート調査を通じて、国際開発の現場での子どもとの関わり方、安全確保の取り組み等を多角的に分析する。また、これらの調査結果に基づき、日本の武道を通じたCPの重要性や課題及び日本の武道を通じた国際開発において、今後どのようにしてCPの体制を整備していけばよいか等について考察する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:18 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1201-04] スポーツ人類学／口頭発表②

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

10:00 ~ 10:18

[12人-口-07] ドイツの柔道教育における形の位置付け

ドイツ柔道連盟の取り組みの分析を中心に

*ソリドーワル マーヤ¹ (1. 津田塾大学)

本研究は科学研究費助成基金事業「ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の捉え方：対象者別の指導法を中心に」（若手研究2020～2024年）の一環としてドイツの柔道教育における形の位置付けを生涯スポーツの観点から考察してみた。研究方法としては級段位規定及び指導者養成に関するドイツ柔道連盟のガイドラインを分析し、同連盟の教育普及委員会の委員を対象にした聞き取り調査も行った。ドイツの柔道教育において、形は相手と相対して決めた順序と方法で攻防を行う予測可能な環境下で行われる「クローズド・スキル」として捉えている。それに対して、相手と自由に攻防技術を試し合う乱取や試合は「オープン・スキル」とされている。ドイツ柔道連盟は日本の「講道館昇段資格に関する内規」（講道館2015）において形審査の対象となる「投の形」、「固の形」、「柔の形」、「極の形」、「講道館護身術」、「五の形」、「古式の形」の七種類を講道館の正式な形として捉えており、上級者、有段者及び指導者の柔道教育の対象とする。また、「精力善用国民体育」は柔道体操の内容として取り入れている。ドイツの柔道教育において形の習得過程は初心者（8～5級）、上級者（4～1級）、有段者（1～5段）、高段者（6～8段）の四段階に応じて位置付けられている。初心者の段階は形にも入っている技をいくつか自由に選択して約束稽古として学んでから上級者の段階において講道館の形の一部を習得へと進む。有段者は5段まで講道館の形七種類を習得し、高段者になると、形の指導者や形競技の審査員として形の評価ができる専門家を目指すことになる。指導員養成においてB指導員の資格一つとして形の指導者資格もある。以上のように、ドイツにおいて形が級段位の柔道教育に位置付けられており、対象者の年齢やレベルに応じた生涯スポーツとしての柔道の指導普及につながるのではないかと考えられる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 🏠 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

10:30 ~ 10:48

[12人-口-08]

修行文化としての武術

現代中国における道教と武当山武術の接点

*張 卿¹、張 逸軒¹ (1. 日本体育大学)

10:50 ~ 11:08

[12人-口-09]

天真体道にみる統合的身体運動文化の構造

トランスモダン視座による青木宏之の体技思想の分析

*関口 遵¹ (1. 日本体育大学)

11:10 ~ 11:28

[12人-口-10]

応援団コスモロジー

女性リーダーの誕生とその文化継承

*瀬戸 邦弘¹ (1. 鳥取大学 高等教育開発センター)

11:30 ~ 11:48

[12人-口-11]

大阪市大正区における沖縄空手の流入と実践の現在

*豊島 誠也¹、田邊 元²、小木曾 航平³ (1. 広島大学、2. 富山大学、3. 九州大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

10:30 ~ 10:48

[12人-口-08] 修行文化としての武術

現代中国における道教と武当山武術の接点

*張 卿¹、張 逸軒¹ (1. 日本体育大学)

道教における修行体系は、古来より坐禅、吐納、導引術といった内的修行法が重視されてきたが、武術もまた精神的修養の一環として位置づけられ、長年にわたり実践されてきた。なかでも武当山においては、道教思想と武術が密接に結びつき、独自の修行体系が構築されてきた。しかし、武術が宗教的修行の中でどのように位置づけられ、いかなる形で実践されているのか、その思想的背景および身体的実践に関する包括的な考察は、これまで十分には行われてこなかった。

現代中国において、武当山は国家的文化遺産や観光資源として広く認知されているだけでなく、武術が現代的なスポーツ文化の一部として制度化・普及される動きの中でも注目を集めている。その一方で、武当山は依然として道教修行の聖地としての機能を保持しており、宗教的实践と観光・スポーツ的利用とが交錯する場となっている。このような現代的文脈において、武術が修行の媒介としてどのように継承・展開されているのかを検討することは、伝統文化の再解釈および宗教実践の現代的変容を理解するうえで重要な意義を持つといえる。

本研究では、スポーツ人類学的な視座に立ち、フィールドワークを主要な調査・分析手法として位置づける。調査拠点としては、武当山道教協会、武術協会、武当山国際武術学院、太和宮、紫霄宮などを設定し、武術を修行の一環として実践している道士や修行者に対するインタビューを通じて、彼らの思想的認識および実践的知見の収集を試みる。また、道観や武館における日常的な稽古の観察を通じて、身体実践の具体的な様態を記録・分析する。さらに、研究者自身が武術修行に実際に参加し、身体的・精神的変容を内在的に体験することで、参与者の視点を取り入れた多角的な理解を目指す。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 皿 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

10:50 ~ 11:08

[12人-口-09] 天真体道にみる統合的身体運動文化の構造

トランスモダン視座による青木宏之の体技思想の分析

*関口 遵¹ (1. 日本体育大学)

本研究は、青木宏之が創始した身体実践体系「天真体道」の理論的分析を通して、近代および後近代の枠組みを超える統合的身体運動文化の可能性を明らかにするものである。天真体道は、型・組手・瞑想などの稽古を通じて、身体・霊性・関係性の一体化を志向する独自の実践体系であり、競技スポーツや伝統武道の制度的文脈から距離を取りながら、青木自身が「体技」と称する統合的営為として展開されてきた。

本研究ではまず、1990年代中盤以降に「ニュースポーツ」論や「ヴィジョナリースポーツ」論を提起した稲垣正浩の理論を批判的に検討する。稲垣は霊的身体経験の意義を評価しつつも、バタイユの「非知」概念などポストモダン理論に依拠したことにより、宗教や霊性の積極的統合には至らず、理論的抽象性と脱構築的批判にとどまった。これに対して本稿では、ケン・ウィルバーの「含んで超える」原理に基づくトランスモダンの視座を導入し、青木の思想と実践を分析する。

分析の結果、天真体道における型の創作実践、「天地人々ワレ一体」概念、「天真」思想は、前近代的霊性・近代的合理性・後近代的多元性を包含的に統合しており、稲垣理論が抱えていた宗教・霊性の排除、前後誤謬、理論的抽象性といった限界を乗り越えていることが明らかとなった。とりわけ天真体道は、霊性と身体性、個別性と普遍性を結び直す「統合的身体運動文化」を体現し、「体技」の実践哲学を具体化している。

本研究は、近代・後近代を超えるトランスモダン身体運動文化のモデルを提示し、現代スポーツ人類学に新たな理論的地平を拓くことを目的とする。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

11:10 ~ 11:28

[12人-口-10] 応援団コスモロジー

女性リーダーの誕生とその文化継承

*瀬戸 邦弘¹ (1. 鳥取大学 高等教育開発センター)

本発表では、応援団文化を近代に構築された日本文化のひとつとして注目する。応援団では継承される伝統を重んじ、護る事を中心的関心事とするため、時に時代錯誤と揶揄される事にもなるが、それは学校空間が育んだ「集合的記憶」とも考えられ興味深い。本発表では応援団が如何なる文化的価値を醸成してきたのか、特に器としての身体に注目するものである。

現在、応援団はリーダー部、チアリーディング部、吹奏楽部という3部で構成されるがリーダー部はその中心的な存在となる。ところで、これまでリーダー部には「男性しか所属できない」という“しきたり”が全国的に認められ“聖域”として理解されてきたが近年その様子に変化が見られ多くの女性リーダー部員が誕生する事になるのだが、実はリーダー部という“聖域”には人類学でいうところの王権観に似た、もしくはそれに通じる世界観による安定と忌避があったように考えられ興味深い。

たとえば応援団長とは役職を超えて団全体を象徴する存在と理解される。彼らは歌舞伎役者のように「名跡」を継ぐものでありそこで受け継がれてきた「歴史」と「誇り」、「魂」を継承する存在なのである。団長という存在を文化人類学的視点から視ればそれは応援団と言うミクロコスモスと团组织というマクロコスモスの紐帯として存在し「応援団コスモロジー」とも言うべき世界観の中心に位置する“王”なのである。

ところで、“王”たる「器」になるためには、この国で育まれてきた歴史や文化の枠組みが求める枠組みに沿う事が求められそこには男女に求められる文化的役割も含まれ、女性がリーダーを行うべきか否かという議論の中心はいつもここにある。一方で日本社会も時代の流れとともに緩やかに変化し女性リーダーが誕生し応援風景も変化した、女性リーダーの誕生とは社会の変化に伴い「器」としての身体への眼差しの基準が変化した結果なのである。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 11:48 🏠 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1205-08] スポーツ人類学／口頭発表③

座長:鄭 稼棋(東京理科大学)

11:30 ~ 11:48

[12人-口-11] 大阪市大正区における沖縄空手の流入と実践の現在*豊島 誠也¹、田邊 元²、小木曾 航平³ (1. 広島大学、2. 富山大学、3. 九州大学)

本発表の目的は、大阪市大正区における沖縄空手の流入に関する歴史的背景を明らかにするとともに、過去から現在に至るまでの沖縄本島との交流の中で、空手がどのように実践されてきたのかを分析することである。

大正区は「リトル沖縄」とも称され、第一次世界大戦後の経済的困窮を背景に、多くの沖縄県出身者が移住した地域である。特に1920年代の深刻な食糧難の時期には、沖縄本島北部および南部から多くの人々が大阪へと移り住んだ。当時、大正区周辺では紡績産業が発展しており、労働力を必要としていたことから、沖縄出身者は大正区を中心に定住するようになった。現在においても、大正区の人口のおよそ4分の1が沖縄にルーツを持つとされている。確かに、街の通りには沖縄由来の名前の表札や沖縄物産店、飲食店が並び、シーサーの置物なども見られるなど、街自体に沖縄文化が色濃く根付いている。

そういった背景の中で、大正区には沖縄空手の道場も根付き、沖縄本島と同様の様式で空手が実践されている。発表者が現地調査を行った道場では、剛柔流国際空手古武道連盟を基盤としており、稽古においては沖縄本島の本部道場の指導方針に基づき、基本動作や型に加えて、棒術やトンファーなどの沖縄由来の古武道も積極的に指導されていた。これらの稽古内容は、本部道場との継続的な交流によって確認・共有されており、空手は常に沖縄本土とのつながりを意識した中で実践されている。また、毎年開催される大正区のエイサー祭りでは、空手道場による演武が披露されており、沖縄空手はエイサーや食文化と並んで、大正区という沖縄移民社会における重要な文化表現の一端を担っている。

本研究では、第一次世界大戦後に沖縄空手が大正区に流入した歴史的背景から現在の実践に至るまでの過程を、文献調査および関係者への聞き取りを通じて整理し、沖縄本島と大正区との「つながり」に関する考察を行うものである。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

📅 2025年8月29日(金) 12:00 ~ 12:58 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1209-11] スポーツ人類学／口頭発表④

座長:田蓑 健太郎(流通経済大学)

12:00 ~ 12:18

[12人-口-12]

eスポーツとしてのイーベースボールの社会的意義

第一回eプレミア12を通じて

*鄭 稼棋¹ (1. 東京理科大学)

12:20 ~ 12:38

[12人-口-13]

障害者の身体活動機会を創出するNPOの運営戦略

須磨ユニバーサルビーチプロジェクトの事例から

*栗原 直也¹、森 克己¹、山田 理恵² (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿児島大学稲盛アカデミー)

12:40 ~ 12:58

[12人-口-14]

ヘリテージ概念を用いたスポーツ空間文化についての考察

台湾・台北の圓山公園の歴史的重層性と集団的記憶

*田里 千代¹ (1. 天理大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

📅 2025年8月29日(金) 12:00 ~ 12:58 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1209-11] スポーツ人類学／口頭発表④

座長:田蓑 健太郎(流通経済大学)

12:00 ~ 12:18

[12人-口-12] eスポーツとしてのイーベースボールの社会的意義

第一回eプレミア12を通じて

*鄭 稼棋¹ (1. 東京理科大学)

eスポーツの人气が急速に高まり、国際大会や教育現場にも導入が進み、単なる娯楽にとどまらず、感情の発散や仲間との交流など、社会的機能としての可能性が注目されている（Cranmer et al., 2021）。

WBSC（世界野球ソフトボール連盟）は1994年より「WBSCイーベースボール」を開始し、新たな世代に野球の魅力を伝える取り組みを進めてきた。

本研究では、2024年11月に開催された第1回「eプレミア12」を事例とし、WBSCイーベースボールの推進目的と社会的意義を明らかにすることを目的とした。WBSC関係者3名へのインタビューと、プレミア12観戦者390名へのアンケート調査によりデータを収集した。

その結果、WBSCはイーベースボールを通じて、大衆参加型スポーツイベントの可能性とグローバルブランドの認知向上を重視していることが明らかとなった。観客の42%がXR（拡張現実）技術の導入を希望し、身体性や没入感を伴う体験への期待が示された。89%が「ストレスや感情の発散に役立つ」、80%以上が「コミュニケーション力」「リーダーシップ」「情報探索力」「挑戦力」「交渉力」などの社会的スキル向上に役立つと評価し、教育的可能性も示された。

以上より、イーベースボールは社会的機能を備え、教育・地域連携・国際交流など多様な分野での応用が期待される。

今後の展望として、XR技術やAI実況の導入によって、よりリアルで臨場感ある競技体験が可能となり、若年層や非野球ファンへの新たなアプローチが見込まれる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

📅 2025年8月29日(金) 12:00 ~ 12:58 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1209-11] スポーツ人類学／口頭発表④

座長:田養 健太郎(流通経済大学)

12:20 ~ 12:38

[12人-口-13] 障害者の身体活動機会を創出するNPOの運営戦略

須磨ユニバーサルビーチプロジェクトの事例から

*栗原 直也¹、森 克己¹、山田 理恵² (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿児島大学稲盛アカデミー)

障害者のスポーツ参加に関して、スポーツ庁が発表した第3期スポーツ基本計画によると、障害者のスポーツ実施率は増加傾向にあるが相対的に低いことが示されている。また、障害者スポーツの普及に関連して、地域において障害者にスポーツへの参加をどのように促すかが課題であることが指摘されている(藤田, 2015)。

兵庫県にある須磨ユニバーサルビーチプロジェクト(以下SUBPと略)は、障害者がスポーツに親しむ機会を醸成するためのプロジェクトとして注目を集めている。SUBPは、障害や年齢、性別を問わず、安全・安心に海を楽しむことができるように整備されたユニバーサルビーチを提供するNPO法人であり、そのノウハウを使った姉妹プログラムの全国展開に取り組んでいる。

ビーチを訪れることによって、人は運動の動機付けが高まり、ライフスパン全体に及ぶ身体活動への参加促進が起こると考えられている(Finlay et al., 2015)。しかし、障害者がビーチを訪れるためには重大な障壁が存在し、障害や高齢が原因となり、ビーチでしたいアクティビティができていないということが明らかにされている(Job et al., 2023)。また、障害者のスポーツ参加を促す機会を提供するために、持続可能な組織を構築する必要性が高まっているなかで、運営戦略やボランティアの不足などの課題が指摘されている(Weerawardena et al., 2010)。

そこで本研究では、SUBPに着目し、その正規スタッフおよびボランティアスタッフ、参加者を対象に、対面またはオンラインによる半構造化インタビューを実施し、SUBPのインクルーシブな活動が持続的に展開されている背景には、どのような要因や仕組みが働いているのかについて言及する。さらに、ユニバーサルビーチの全国的な普及に向けた課題と展望について考察する。

■ 2025年8月29日(金) 12:00 ~ 12:58 ■ 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[3a1209-11] スポーツ人類学／口頭発表④

座長:田養 健太郎(流通経済大学)

12:40 ~ 12:58

**[12人-口-14] ヘリテージ概念を用いたスポーツ空間文化についての考察
台湾・台北の圓山公園の歴史的重層性と集団的記憶***田里 千代¹ (1. 天理大学)

台湾・台北市の中心地から北側に位置する「花博公園圓山園區」は、かつてサッカー場として使われたスタジアムが今も残され、その外側の回廊に飲食店が建ち並び、その周りには緑地化された広場が広がっている。週末になると、交通の便も良いことも手伝って市民や観光客らにとっての憩いの場となっている。ここは、かつて台湾が日本に統治されていた時代に「圓山公園」として、日本本土に先駆けて初めて日本人が手掛けた近代公園として造成された。当時の近代都市を象徴するように、公園内には動物園、運動場、遊園地などの施設が続々と加わった。戦後の中華民国統治の時代になると、野球場として復活するもアメリカ軍の倉庫として活用されるなどの経緯を経て、1979年に中山サッカー場としてスタジアムが建てられた。2008年にはスポーツ施設としての用途を終え、後に開催された2010台北国際花博覧会の会場として改修が加えられて現在に至っている。

この圓山公園の空間的特徴は、台湾の歴史的変遷の遺構や遺跡、歴史的建造物を随所に残している点にある。周知のとおり台湾の歴史は先史時代から原住民が暮らし、17世紀以降は異なる支配者による統治が繰り返されてきた。圓山公園内には今もなお、それぞれの時代が残してきた史跡やかつて人々が眺めたであろう景観、戦後に建てられたスタジアムの建造物が残されている。本研究では「ヘリテージ」という概念で圓山公園を考察することを目的としている。ここでいうヘリテージとは、英語での“heritage”の意味合いである「文化的な遺産や伝統」を指している。本発表では、ヘリテージ概念を用いた圓山公園の考察から、台湾が辿ってきた歴史の重層性ととともに、今を生きる人々の集団的記憶を呼び起こすスポーツ空間文化がいかに形成されているかを示していきたい。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:58 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1301-02] 体育哲学／口頭発表①

座長:田井 健太郎(群馬大学)

9:00 ~ 9:28

[00哲-口-01]

伝統か現代か

伝統的な武術訓練場における意味の生成

*李 恩熙¹ (1. 日本体育大学大学院)

9:30 ~ 9:58

[00哲-口-02]

遊尽（ゆじん/Play and Exercise）の文化哲学

クリケットあるいは「真理・価値・形式」

*林 洋輔¹ (1. 大阪教育大学)

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:58 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1301-02] 体育哲学／口頭発表①

座長:田井 健太郎(群馬大学)

9:00 ~ 9:28

[00哲-口-01] 伝統か現代か

伝統的な武術訓練場における意味の生成

*李 恩熙¹ (1. 日本体育大学大学院)

資本主義が浸透する現代において、武術訓練場の空間は大きく変容しつつある。鉄骨構造やガラス張りのファサードをもつ武術訓練空間は、資本の要求に応じて複製可能なものへと変質している。こうした空間の均質化は、武術文化の歴史的な文脈を断絶させ、実践者を身体感覚の鈍化と文化的アイデンティティの危機に陥らせている。一方で、中庭住宅に点在する伝統的な訓練場は、独自の空間を通して武術の精神を伝えている。

本研究の目的は、現代の武術訓練場と比較して、伝統的な武術訓練場がいかにして建築空間と身体的実践の相互作用を通じて、物理的次元を超えた意味を構築しているのかを明らかにすることである。

まず、現代の武術訓練場における「空間の断絶」である。資本主義に基づき、現代の武術訓練空間は商品化され、精神性を喪失した空虚な場所と化している。ボードリヤールが指摘したように、現代空間は複製物とシミュラクルに満ちた意味の喪失を伴う空間となっている。

次に、伝統的な武術訓練場の空間的存在である。ハイデッガーの「住居」という概念は、伝統的建築空間が「天地神人」によって意味世界を開示する機能を担うことを強調する。この観点から見ると、中国の「家」思想の影響を受けた伝統的訓練場では、方位の配置、中庭の構造、象徴的要素が実践者に親密感を与え、空間形式と精神的価値が融合し分かち難く結びついている。

最後に、実践者の身体的経験と空間的意味の生成である。メルロー＝ポンティの身体と世界との一体性によれば、身体は空間を理解する媒介であると同時に、意味を生み出す主体でもある。武術実践者は、歩法、姿勢、呼吸といった身体的動作を通じて訓練場の空間と関わり合い、場所の意味を自己の経験として内面化していく。

したがって、現代の訓練場に対し、伝統的な武術訓練場は単なる物理的な場所にとどまらず、実践者に強い帰属感、アイデンティティ、存在の意味を提供している。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:58 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1301-02] 体育哲学／口頭発表①

座長:田井 健太郎(群馬大学)

9:30 ~ 9:58

[00哲-口-02] 遊尽（ゆじん/Play and Exercise）の文化哲学
クリケットあるいは「真理・価値・形式」*林 洋輔¹ (1. 大阪教育大学)

本発表は文化哲学の観点からクリケットのより良き理解に向けた哲学理論の視座を明らかにする。ところで標題の「遊尽（ゆじん）」とは、体育学で往時から議論されてきた遊戯論ならびに「心身の尽力Exercices Spirituels」と名指される哲学の視点を組み合わせた新規の概念装置を指す。発表ではこの「遊尽」の設定経緯から説き起こし、「真理・価値・形式」の三視座から以後にクリケットを考究する妥当性が明らかとなる。

クリケットの研究は、わが国で未踏の地平である。これまで学術の対象としてクリケットに着眼した研究は国内に僅少であり未発展である。また海外では主に歴史学と社会学、さらに本報告でも言及する文学分野において検討の跡を確認できる。他方でスポーツ哲学やスポーツ倫理学では試合中に生じた非違行為の是非やスポーツ概念の境界をめぐる議論が主に論じられており、本報告に類する議論は向後の発展を期する位置にある。

上記の「遊尽」にも包摂される文学領域でクリケットの言及が行われてきた事実に着眼する。すなわち、文学においてクリケットは重要な言及対象であったとわかる。他方、わが国の哲学界で殆ど議論のない「文学の哲学Literature and Philosophy」領域から進捗の可能であることを確認したい。というのも上記の如く「文学からクリケットを観る」ことが可能であり、また「文学の哲学」が文学の視座を鍛えるのなら、「文学の哲学」の視点を基盤にクリケットを捉え直すことが可能だからである。さらにこの「文学の哲学」は、哲学の問題としてクリケットを論ずる際の主要難点——時空間の制約——を乗り越える。本発表では以上の議論に基づき、「文学の哲学」の研究史から導きだされた「真理・価値・形式」の視座から哲学の観点よりクリケットを以後に議論する妥当性と論拠を示していく。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:08 🏢 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1303-04] 体育哲学／口頭発表②

座長:竹村 瑞穂(東洋大学)

10:10 ~ 10:38

[00哲-口-03]

コーチングの共同行為における「主体性・自律性」の位置づけ
行為理論的検討を通して

*井手上 新¹ (1. 日本体育大学大学院)

10:40 ~ 11:08

[00哲-口-04]

実践からのコーチング哲学
スポーツ・インテグリティのインテグリティについて

*高尾 尚平¹ (1. 日本福祉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:08 🏢 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1303-04] 体育哲学／口頭発表②

座長:竹村 瑞穂(東洋大学)

10:10 ~ 10:38

**[00哲-口-03] コーチングの共同行為における「主体性・自律性」の位置づけ
行為理論的検討を通して***井手上 新¹ (1. 日本体育大学大学院)

コーチングはスポーツ指導に関する活動の総体として考えられることからコーチングには様々なアプローチが含まれる。その中の1つにアスリートの主体性や自律性といった人間的成長を促す人間的アプローチがある。このアプローチはコーチングを行うために重要なアプローチと主張される一方で、コーチング実践において適用する困難さも主張されている（Cross & Lyle, 2008）。適用を困難にする要因の1つとして、人間的成長のゴールが曖昧だということが挙げられる。というのも、コーチは人間的アプローチによってアスリートの「主体性」や「自律性」などを成熟させようとするだろうが、目指すべき、成熟したアスリート像が十分に示されないからである。そしてこの問題は、「主体性・自律性」をどのように考えるかという問題に依存する。本発表はこの「主体性・自律性」についての検討を中心に行うものである。一般的に「主体性・自律性」といった際に、個人の選択、決定から行動するように、行為が個人の意図に還元されている状態が想像されるだろう。つまり、自己完結的なものを想像する(早川, 2010)。しかし、このような自己完結的な「主体性・自律性」からでは自己と他者の交流のもとで生じる関係性や制約を反映することはできず(早川, 2010)、我々の行為や行為者としてあり方を適切描き出しているとは言い難い(筒井, 2014)。そして、これらの自己完結的な「主体性・自律性」に対する指摘は、選手とコーチの相互関係を前提とするコーチングの活動においては一層、重要な指摘になると考えられる。そこで本発表では、まず、意図する行為とはどのような行為なのかを行為論の枠組みから整理し、その後、他者との関わりの中での、意図する行為とはどのような行為なのか共同行為論の枠組みを用いて整理することで、自己と他者との関係が考慮された「主体性・自律性」を示すことを目指す。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

📅 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:08 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1303-04] 体育哲学／口頭発表②

座長:竹村 瑞穂(東洋大学)

10:40 ~ 11:08

[00哲-口-04] 実践からのコーチング哲学

スポーツ・インテグリティのインテグリティについて

*高尾 尚平¹ (1. 日本福祉大学)

本研究の目的は、スポーツ・インテグリティの概念について批判的に検討し、この概念のもとでなにが語られ、なにが語られえないのかを示すことにある。本研究の出発点は、私自身のコーチング実践にある。私は、バスケットボールのコーチのライセンスを取得すべく、コーチ養成講習会に参加した。講習会では、理論・演習科目において「スポーツ・インテグリティ」に関する説明がなされた。しかしながら、講習会におけるスポーツ・インテグリティに関する説明は、具体的な内実を欠くものであり、極めて拡散的な内容であった。一人のコーチとしての私はその説明に戸惑いを禁じえなかった一方で、研究者としての私にはスポーツ・インテグリティという語が学問的に鍛えられた(disciplined)概念なのかという疑問が生じた。本研究の問題意識は、コーチであり研究者である私の実存にもとづいている。本発表のねらいは、現場から生じた問いを学問的議論の俎上に載せ、スポーツ・インテグリティに関する諸言説を編みなおすことにある。本発表では、まず、スポーツ組織や公的な機関が発するスポーツ・インテグリティの定義を参照する。次に、先行研究の成果をもとに、スポーツ界でインテグリティという語が用いられるようになった経緯を確認する。そのうえで、学問におけるスポーツ・インテグリティの定義やこの語が使用される文脈を精査する。最終的に本発表では、現状のスポーツ・インテグリティの概念の空洞性とそのことにより生じうる問題を指摘する予定である。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

■ 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 13:58 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1305-06] 体育哲学／口頭発表③

座長:根本 想(育英大学)

13:00 ~ 13:28

[00哲-口-05]

組み合わせ最適化問題の観点でスポーツ科学研究を視る

*齋藤 健治¹ (1. 名古屋学院大学)

13:30 ~ 13:58

[00哲-口-06]

eスポーツのオリンピック導入に関する研究の動向

哲学的研究を中心に

*伊藤 洸太郎¹、竹村 瑞穂² (1. 東洋大学大学院、2. 東洋大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 13:58 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1305-06] 体育哲学／口頭発表③

座長:根本 想(育英大学)

13:00 ~ 13:28

[00哲-口-05] 組み合わせ最適化問題の観点でスポーツ科学研究を視る*齋藤 健治¹ (1. 名古屋学院大学)

現在のスポーツ科学研究においても、大きな目標の一つは「競技力の向上」に資することにあるといえる。科学技術の進展に合わせて、スポーツ科学研究も進展し様々な知見が積み上げられてきたが、世界的に科学研究は停滞していると指摘があるのと同様に、スポーツ科学研究も広がりを見せている一方で、その進展は漸近状態にあるといえるのではないだろうか。ヒトを対象とするスポーツ科学研究では、帰納を繰り返すことが多く、その結論は常に蓋然性にとどまる傾向にあることが、結果として、本質的には同じような研究を繰り返すことになる原因の一つではないだろうか。スポーツ科学研究においては、要因と水準を決定し、できるだけ少ないケース数で効率よく実験・分析を行う実験計画法のデザインが採用されることが多い。しかしながら、ヒトの現象を対象にした場合、このような「ケース」を縮小する方法は、帰納により結果の「蓋然性」を強化することはできても、演繹的推論の前提となる定理のようなものを見つけることには近づかないのではないだろうか。一方で、ヒトを対象としたスポーツ科学研究を、組み合わせ最適化問題として見直してみると、実験計画法でいうところの「要因」「水準」の組み合わせが、本質的に組み合わせ爆発を起こすことになり、そのままでは現実的に解けない問題になるのではないかと思われる。つまり、効率性を考慮した実験計画法を採用することは、解が求まるように「緩和」する手段であり、これは組み合わせ最適化問題の探索区間、探索ルートを縮小して現実的な何らかの解を求めるという図式と同等と見ることもできる。結果として、時と場所を変え、別の緩和法により本質的には同じような実験が繰り返されるという事につながるのではないかと考えられる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

📅 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 13:58 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1305-06] 体育哲学／口頭発表③

座長:根本 想(育英大学)

13:30 ~ 13:58

[00哲-口-06] eスポーツのオリンピック導入に関する研究の動向
哲学的研究を中心に*伊藤 洸太郎¹、竹村 瑞穂² (1. 東洋大学大学院、2. 東洋大学)

本研究は、国内外におけるeスポーツのオリンピック導入に関する先行研究を精査し、その研究の動向及び今後の課題について明らかにすることを目的とする。

近年、国際オリンピック委員会（以下IOCと略す）は、eスポーツと呼ばれる活動の導入に積極的である。このようなIOCの動向は、経済的、社会的、政治的のみならず、学術的、教育的にもeスポーツの関わり方に大きく影響している。

先行研究を概観すると、eスポーツのオリンピック導入に関する研究については、①我が国では研究蓄積が少ないこと。②諸外国では、eスポーツがオリンピックの価値にどの程度当てはまるのかを検討するような研究が近年盛んであること。③eスポーツがオリンピック・プログラムに採用され得るのかスポーツ概念論を含めた哲学的研究がされていること、の3点が研究動向として見て取れる。以上の結果から、我が国ではまず諸外国で取り組まれてきた②③の研究内容について批判的に検討し、学術的な見解を提示する必要がある。また、このような基礎研究に取り組むことにより、IOC主導のeスポーツをめぐる動向から取り残されないようにするべきである。

とりわけ本研究においては、スポーツ哲学分野における先行研究に焦点を当てる。当該分野においては、eスポーツのオリンピック導入に関する研究では中心的な論稿とされるJ.パリーの主張の批判的考察は避けて通れない。したがって、J.パリーがどのようにスポーツを定義し、どのような方法論を採用しながら考察をしているのかまで遡り、彼のスポーツ概念や各主張の妥当性を検討することを主たる具体的課題とする。そのうえで、新たな研究課題の提示を試みることにする。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

■ 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 15:08 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1307-08] 体育哲学／口頭発表④

座長:石垣 健二(東海学園大学)

14:10 ~ 14:38

[00哲-口-07]

プラグマティズムの立場から捉える体育の教育的意義

リチャード・ローティの「啓発」概念を手がかりに

*浅田 風太¹ (1. 東海大学大学院)

14:40 ~ 15:08

[00哲-口-08]

ヘザリントン (Hetherington, C. W.) の体育理論にみる新体育の特徴

*高橋 徹¹ (1. 岡山大学学術研究院教育学域)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

📅 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 15:08 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1307-08] 体育哲学／口頭発表④

座長:石垣 健二(東海学園大学)

14:10 ~ 14:38

[00哲-口-07] プラグマティズムの立場から捉える体育の教育的意義

リチャード・ローティの「啓発」概念を手がかりに

*浅田 風太¹ (1. 東海大学大学院)

本研究の目的は、プラグマティズム的視座から体育の新たな可能性を探究することである。具体的には、デューイ以後のネオ・プラグマティストとして位置付けられるリチャード・ローティの「啓発」概念に基づいて検討していく。というのも、これまで体育学領域におけるプラグマティズムの取り扱いはジョン・デューイが中心的であり、プレ・デューイあるいはポスト・デューイについての取り扱いはほぼ確認できない。そこで、プラグマティズムにおけるデューイからローティへの思想的展開に着目し、ローティの「啓発」概念を手がかりとしながら新たな体育の可能性の一端について検討していく。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

📅 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 15:08 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1307-08] 体育哲学／口頭発表④

座長:石垣 健二(東海学園大学)

14:40 ~ 15:08

[00哲-口-08] ヘザリントン (Hetherington, C. W.) の体育理論にみる新体育の特徴*高橋 徹¹ (1. 岡山大学学術研究院教育学域)

本発表の目的は、20世紀初頭のアメリカにおいて「新体育 (New Physical Education)」を提唱した人物の一人であるヘザリントン (Hetherington, C. W.) の体育理論を読解することである。特に、彼と同じアメリカで同時代を生きたデューイの教育理論との対比を通してその特徴を明らかにしたい。なお、本発表ではヘザリントンの主著である『School program in Physical Education』(1923)を中心的な文献として分析対象とする。

戦後の日本における体育改革の理論的基盤となったのが、アメリカにおける進歩主義教育運動の一つである「新体育」の理念とされる。ヘザリントンはその「新体育」の提唱者の一人であり、そもそも彼こそが「新体育」という用語を初めて使用した人物であるという指摘すらある。しかし、漆原 (1984) が彼の理論を原理的にとらえ考察を加えた文献は、米国においてさえほとんど見いだす事ができないと指摘する通り、その理論構造や根本概念等に関しては十分な検討が行われてきたとは言い難い状況である。また日本においても、ヘザリントンを対象にした論考は上記の指摘を発表した漆原 (1984;1985) を除くと、管見の限りでは小田切 (1978) が確認できるのみである。なお、ヘザリントンとデューイとの関係について言及した先行研究として、ワズワースによる『A comparison of the writings of Clark W. Hetherington and John Dewey』(1975) が存在するが、漆原によればこの論文においてもヘザリントンの体育理論は断片的に捉えられているに過ぎないと指摘される。

このような背景を踏まえ、ヘザリントンの体育理論の内実を明らかにすることにより、現在の体育を考える上での一つの起点とされている戦後体育への理解を広げることが本発表のねらいである。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

⌚ 2025年8月29日(金) 15:20 ~ 16:18 🏢 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1309-10] 体育哲学／口頭発表⑤

座長:松宮 智生(東洋大学)

15:20 ~ 15:48

[00哲-口-09]

ドイツサッカーにおける「男らしさ」のポリティクス
ウルトラスの男性学

*大槻 茂久¹、釜崎 太² (1. 日本女子体育大学、2. 明治大学)

15:50 ~ 16:18

[00哲-口-10]

現象形態としての「ポスト・スポーツ」
始原としてのシンボル化能力

*河野 清司¹ (1. 至学館大学)

⌚ 2025年8月29日(金) 15:20 ~ 16:18 🏠 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1309-10] 体育哲学／口頭発表⑤

座長:松宮 智生(東洋大学)

15:20 ~ 15:48

**[00哲-口-09] ドイツサッカーにおける「男らしさ」のポリティクス
ウルTRASの男性学***大槻 茂久¹、釜崎 太² (1. 日本女子体育大学、2. 明治大学)

ドイツの哲学者グンター・ゲバウアーは、自著『サッカーの詩学』において、「ピッチ上での容赦ない戦い」、「傷つけようとする意図の実行」、ルール違反の容認、相手を「殴った」り「地面に押し倒すこと」を意図した卑劣な行為は、男子サッカーにおいては良い試合の一部になっている、と指摘している。この誤解を招きかねない表現の真意を理解するには、ドイツにおいてサッカーという文化がいか「男性化」されているか、すなわち「男らしさ」をめぐるゲームとなっているか、についての理解が必要だ。

例えば、ドイツにおける男子と女子のサッカーの試合では、「デュエル（決闘）」と呼ばれる1対1のプレー場面で、まったく異なるファールの基準が適用されている。女子サッカーの場合、タックルによって引き起こされる怪我は全体のわずか25.5%であるのに対して、男子サッカーではタックルによる怪我が約二倍もの頻度で起こっている。ドイツの雑誌や書籍を一瞥しても、男らしさをめぐる競技としてサッカーを捉える表現は数多い。「男らしさのアリーナ」、「男らしさの世界観」、「男らしさの実践」、「男らしい儀礼」、「男らしさの真骨頂」、「男らしさの砦」、「男らしさを訓練する機会」などである。それゆえ、1970年代まで女子によるサッカーの試合が一「美的な理由と原理的な考慮」のためにドイツサッカー連盟によって「禁止」されていたことも、驚くにはあたらない。

現在ではしかし、ドイツのサッカーが伝統的に表象してきた男らしさを、グローバル資本主義の浸透と並行するかたちで促された女子サッカーの普及が大きく変容させつつある。「男らしさ」の主戦場がフィールドからスタンドへ、プレーからマネージメントへと移行しようとしているのである。本報告において明らかにしようとするのは、そうした男らしさのアリーナに変容をもたらしているドイツサッカー界のポリティクスである。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

📅 2025年8月29日(金) 15:20 ~ 16:18 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1309-10] 体育哲学／口頭発表⑤

座長:松宮 智生(東洋大学)

15:50 ~ 16:18

**[00哲-口-10] 現象形態としての「ポスト・スポーツ」
始原としてのシンボル化能力***河野 清司¹(1. 至学館大学)

現代のスポーツにおいては、テクノロジーやAIと密接に結びついた身体運動のデータ化、優れた競技者の運動解析によるマラソンシューズの開発などが進められている。これらを含む新たな形態は「ポスト・スポーツ」と呼ばれている(山本敦久、ポスト・スポーツ論の射程、「思想」2024年第10号所収)。本発表の目的は、この「ポスト・スポーツ」の始原を文化論の視点から明らかにすることである。その方法として、エルンスト・カッシーラーの文化哲学を援用していく。その鍵は「シンボル化能力」である。彼の著作『人間』によれば、人間は「シンボリック・システム(象徴系)」の世界に住んでいる。言語形式や芸術的形象は「人為的な媒介物」であり、言語、芸術の世界は、これらのシンボル形式によって構成されている。さらに、このシンボルの材料(素材)については、「人間文化の特殊の性格ならびにその知的および道德的価値は、それを構成している材料に由来せず、その形式すなわち、その建築的構造に由来する。そして、この形式は、どんな感覚的材料によって表現されてもよい」としている。カッシーラーの思想は、現在のスポーツについて考える場合の導きの糸となる。スポーツにおいては、「運動形式(技)」が独自のシンボルとして機能している。例えば、「フォスベリー・フロップ」は、走り高跳びの世界の構成契機であり、まさに独自のシンボル形式として機能している。さらに、この形式も含め、シンボル形式の産出を可能にしているのが、トラックのサーフェスや専用のシューズなどである。例えば、短距離走者のカール・ルイスの流れるような運動フォームを可能にしたのは、スペースシャトルのパラシュート素材をスポーツ化したスパイクであった。

以上のように、「ポスト・スポーツ」の始原はまさに人間のシンボル化能力にあると同時に、あらゆる素材がスポーツ化(シンボル化)される可能性を示していく。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：発育発達

 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59  3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1401-04] 発育発達／口頭発表①

座長:野井 真吾(日本体育大学)

9:00 ~ 9:14

[07発-口-01]

子どものパーソナリティタイプによる運動の楽しさの違い

*水野 太智¹、中野 貴博¹、稲田 鎮¹、高橋 好波¹ (1. 中京大学)

9:15 ~ 9:29

[07発-口-02]

体育座りへの体操介入による身体的・精神的負荷の調査

*増田 一太^{1,2} (1. 国際医学技術専門学校 、2. 京都工芸繊維大学)

9:30 ~ 9:44

[07発-口-03]

学校および教員の運動促進の取組が児童の運動嗜好・運動態度に及ぼす影響

*高橋 好波¹、水野 太智¹、稲田 鎮¹、中野 貴博¹ (1. 中京大学)

9:45 ~ 9:59

[07発-口-04]

児童の活動的な習慣と社会情動的スキル得点の関係

OECDの社会情動的スキル尺度を用いた検討

*中野 貴博¹、水野 太智¹、高橋 好波¹、稲田 鎮¹ (1. 中京大学)

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1401-04] 発育発達／口頭発表①

座長:野井 真吾(日本体育大学)

9:00 ~ 9:14

[07発-口-01] 子どものパーソナリティタイプによる運動の楽しさの違い*水野 太智¹、中野 貴博¹、稲田 鎮¹、高橋 好波¹ (1. 中京大学)

[背景・目的]子どもの運動を促進するためには、運動の楽しさを伝え、好きになってもらうことが最重要である。しかし、子ども一人ひとりによって運動を楽しいと思う要因は異なることが考えられる。そのため、パーソナリティタイプによって異なるアプローチを行うことが必要であると考えられる。個別最適なアプローチにより、子どもの運動が促進され、結果的に体力向上につながることを期待される。そこで本研究では、パーソナリティタイプによる運動の楽しさの違いを検討することを目的とした。

[方法]2015名の高学年児童を対象に質問紙調査を実施し、子どものパーソナリティに関する45項目、運動の楽しさに関する26項目を分析対象とした。パーソナリティについては15の下位因子から各3因子で構成されるBig5理論の仮説構造に基づいた設問を設定した。そこで、因子分析により15因子構造を確認した後、各3因子の因子得点の合計値により「外向性」「開放性」「誠実性」「協調性」「情緒安定性」のパーソナリティ得点とした。運動の楽しさについては、探索的な因子分析により因子構造を検討し、各因子得点を分析に用いた。各パーソナリティ得点を4群に等分割し、群間における運動の楽しさ得点の違いを一元配置分散分析により検討した。

[結果・考察]運動の楽しさに関しては「見る・支える」「達成感」「運動への没入」「他者からの承認」「自己裁量の行使」「運動の本質の体感」「仲間との協力」の計7つの因子が抽出された。いずれのパーソナリティ得点においても群間で運動の楽しさの7因子得点に有意な差が確認された。しかし、「誠実性」に関しては、多重比較の結果、一部で有意差が見られずパーソナリティによる影響が少なかった。パーソナリティと運動の楽しさには関連があるが、「誠実性」に関しては関連が小さくなることが示唆された。

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1401-04] 発育発達／口頭発表①

座長:野井 真吾(日本体育大学)

9:15 ~ 9:29

[07発-口-02] 体育座りへの体操介入による身体的・精神的負荷の調査*増田 一太^{1,2} (1. 国際医学技術専門学校 、2. 京都工芸繊維大学)

学校生活において、座位活動は学習の基本となる姿勢である。近年、子どもが行う体育座りは腰痛の危険性が指摘され、各学校や自治体単位で対応が迫られている。しかし、体育座りは今後多くの学校で用いられる姿勢であるため、長時間の実施でも安全な運用が求められる。そこで、本研究の目的は、体育座り中に体操を取り入れた際の身体及び精神的負荷に対する効果とリタイア率を検討することとした。対象は、側弯症や脊椎分離症の既往がなく、また現在においても腰痛のない18歳から20歳の医療系専門学生96名（男性61名、女性35名）（平均年齢 18.5 ± 0.5 歳）とした。調査は、椅座位（ $n=95$ ），胡坐（ $n=93$ ），体育座り（ $n=92$ ），5分毎に体操介入した体育座り（ $n=95$ ）（以下、5分毎体育座り），10分毎に体操介入した体育座り（ $n=93$ ）（以下、10分毎体育座り）の4種類の座位法を20分間行った後の自覚的な身体及び精神的な負荷とリタイア率を調査した。なお、体操は5秒間体幹を曲げたり伸ばす運動を行わせた。負荷の調査は、調査終了時に最大の苦痛を10とした際の数値を口頭で示させた。身体及び精神的な負荷指数の順に結果を記載する。椅座位は1.6と1.8、胡坐は2.7と2.9、体育座りは3.0と4.0、5分毎体育座りは2.3と2.6、10分毎体育座りは3.0と3.1であった。リタイア率は、椅座位5.3%、胡坐9.7%、体育座り20.7%、5分毎体育座り9.7%、10分毎体育座り10.1%であった。体育座りの身体及び精神的な負荷指数は計測姿勢の中で最も高かったが、体操の介入で胡坐並みの負荷指数及びリタイア率に低減できることが分かった。これらより、体育座りの導入が長時間に及ぶ際は、体操の介入により、より安全に運用できる可能性が示唆された。

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1401-04] 発育発達／口頭発表①

座長:野井 真吾(日本体育大学)

9:30 ~ 9:44

[07発-口-03] 学校および教員の運動促進の取組が児童の運動嗜好・運動態度に及ぼす影響*高橋 好波¹、水野 太智¹、稲田 鎮¹、中野 貴博¹ (1. 中京大学)

〔背景・目的〕子どもの運動促進は、現代における社会課題の1つである。教育現場においても様々な取り組みが行われているが、その効果検証は十分とは言えず、学校における運動促進計画や教員の取組が子どもの運動嗜好や運動態度を改善させられているかを検討することで今後の取組を充実していくことが求められる。そこで本研究では、学校・教員の運動促進への取組状況が、子どもの運動嗜好と運動態度に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

〔方法〕185小学校の体育主任教員および同小学校の高学年児童13321名を調査対象とした。教員調査は「学校の取組（3項目）」、「教員の意欲（4項目）」を分析項目とした。児童に関しては、スポーツ庁の全国体力・運動能力、運動習慣等調査のデータを提供いただき、その内「児童の運動嗜好（4項目）」、「児童の運動態度（3項目）」を二次利用した。最初に教員および児童調査データの各2因子構造を因子分析により確認した。学校の取組⇒教員の意欲⇒児童の運動嗜好および運動態度の仮説構造モデルを作成し、共分散構造分析にてモデルの適合とパス係数の比較を行った。

〔結果・考察〕教員および児童調査データの2因子構造が確認された。仮説構造モデルの適合度指標は、いずれも良好な値であった。「学校の取組」から「教員の意欲」へのパス係数は0.62であり、有意な値であった。一方、「教員の意欲」から「児童の運動嗜好」および「児童の運動態度」へのパス係数は、0.28と0.14であり、運動嗜好へのパス係数のみが有意であった。この結果から、学校が運動促進に取り組むことで教員の意欲は高まり、児童の運動態度改善は見られるが、運動嗜好への影響は十分ではなく、運動嗜好を改善する効果的な取組の検討が必要であることが示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1401-04] 発育発達／口頭発表①

座長:野井 真吾(日本体育大学)

9:45 ~ 9:59

**[07発-口-04] 児童の活動的な習慣と社会情動的スキル得点の関係
OECDの社会情動的スキル尺度を用いた検討***中野 貴博¹、水野 太智¹、高橋 好波¹、稲田 鎮¹ (1. 中京大学)

〔目的〕子どもの運動には体力向上や健康増進に加え、様々な教育的効果が期待される。近年、教育的効果は認知能力に加えて非認知能力（社会情動的スキル：SES）も重視されており、OECDは国際調査の結果を公表している。しかし、運動とSESの関係を示す研究はわずかである。そこで本研究では、OECDのSES scaleの短縮版を構成し、SESと活動的習慣との関係の検討を目的とした。〔方法〕4～6年生の児童2223名を対象とし、活動的習慣に関する10項目とSES scale短縮版を分析対象とした。OECDのSES Scaleは120項目で構成されるが本研究では各因子を構成する上位3項目を抜粋した45項目を用いた。分析手続きは、1) SES scaleの短縮版がオリジナル同様の因子構造となることを確認（因子分析）、2) 活動的習慣の10項目を用いた対象者の分類（クラスター分析）、3) クラスター間でのSES Totalおよび15因子の得点差の検討（ANOVA）、であった。〔結果・考察〕SES Scaleの短縮版が15因子の単純構造になることが確認された。1:運動時間も長く活発、2:平均的だがゲーム時間が長い、3:文化系よりで屋内遊びが多い、の3つのクラスターが生成された。SES Totalおよび全15因子でクラスター間に有意な得点差が確認された。多重比較の結果、SES Total、積極性、活発さ、好奇心、社交性、協同、共感、楽観主義の因子では、全クラスター間に有意差が確認された。自制心、寛容、忍耐力、感情コントロールの因子では、クラスター1のみが有意に高く、信頼、ストレス耐性の因子では、クラスター3のみが有意に低かった。創造性ではクラスター1と3、責任感ではクラスター1と2の間に有意差が確認された。活動的な習慣はSESに良い効果をもたらす可能性が高いが、因子ごとに影響の大きさに違いがあることが示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：発育発達

📅 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 10:54 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1405-07] 発育発達／口頭発表②

座長:渡邊 將司(茨城大学)

10:10 ~ 10:24

[07発-口-05]

Role of Yoga on Growth and Development

*R ELANGO VAN¹ (1. Secretary, Indian Yoga Association, Tamil Nadu State Chapter Committee)

10:25 ~ 10:39

[07発-口-06]

子ども期発育途中データと両親身長を用いたKhamis-Roche法による日本人アスリート成人身長の推計

*國土 将平¹ (1. 中京大学)

10:40 ~ 10:54

[07発-口-07]

発育途中身長データを用いた発育局面推計精度の検証

*長野 崇¹、國土 将平² (1. 大阪国際大学、2. 中京大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：発育発達

📅 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 10:54 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1405-07] 発育発達／口頭発表②

座長:渡邊 將司(茨城大学)

10:10 ~ 10:24

[07発-口-05] Role of Yoga on Growth and Development

*R ELANGO VAN¹ (1. Secretary, Indian Yoga Association, Tamil Nadu State Chapter Committee)

Yogic Practices for Different Stages of Life

Yogic Practices for first two years: Observing parents' activities in yoga is good for a child of two to learn yoga. , The child of two will imbibe all practices because she / he is like a photo camera, They are influenced by Personalities and Environment.

Yogic techniques for Children (up to 7 years): Learning from Yogic pictures, Learning from Stick figures, Doing physical postures like animals, vegetations etc., Basic breathing practices (Bhramari Pranayama, Abdominal breathing), Antar Mouna, Mantra Chanting, Yoga Nidra (creative attention).

Yogic practices for 8 – 13 years: Loosening the joints (Pawanamuktasana Series), Surya Namaskar, Chandra Namaskar, Dynamic basic Asanas, Warrior poses, Yoga games, Pranayama (Abdominal breathing, Bhramari, Nadi Shodhana), Chanting Mantras, Yoga Nidra (Feeling different parts of the body, visualizing pleasant pictures etc.,)

For Adolescents (between 14 & 20 years): Loosening the joints, Suryanamaskar, Asanas, Pranayama, Kriyas, Bandhas, Mudras, Relaxation techniques

For Adults (21 to 35 years) and middle aged people (36 to 60 years): all yogic practices including Meditation, Good regular yogic practices for Men and Women: Loosening the joints, Surya Namaskar, asanas, Pranayama, Mahamudra, Meditation.

Yogic practices for Aged people (above 60 years): Loosening the joints, Basic asanas, Pranayama except Kapalabhati and Bastrika without Kumbhaka, Maha Mudra, Meditation (Modifications can be adopted as per the need of the practitioner).

“If you must be mad, be it not for the materialistic things of the world, be mad with the love of Yoga”.

Keywords: Growth, development, stages of human beings, yogic practices, yogic for professional people.

専門領域別研究発表 | 専門領域別：発育発達

📅 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 10:54 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1405-07] 発育発達／口頭発表②

座長:渡邊 将司(茨城大学)

10:25 ~ 10:39

[07発-口-06] 子ども期発育途中データと両親身長を用いたKhamis-Roche法による日本人アスリート成人身長の推計*國土 将平¹(1. 中京大学)

【目的】子どもの頃の体格情報より成人身長の予想をすることは難しい。Khamis & Roshe (1994) は両親の身長と子ども期の身長や多重を用いて、成人身長を予測する方法を作成した。本研究では、Khamis-Roche法（以下KR法）によりどの程度正確に日本人の成人身長を推計出来るかを検討する事を目的とする。

【方法】1980年から1990年の11年間に大学アスリート男性1137名、女性1102名を対象に、6-18歳まで学校定期健康診断の身長、体重ならびに両親の身長を収集した。これらの資料に対して、成人身長を従属変数、 y 歳時の身長、体重、両親の平均身長を独立変数として重回帰法を適用し、適合度を検証した。また、学校保健統計の年次推移データを用いて両親の身長の経時変化より、その変化を加味した分析も行った。

【結果及び考察】KR法オリジナルの数式では男性では平均5cm、女性では平均10cm以上身長が高く推計された。重回帰分析の結果、成人身長の推計の標準誤差（以降SE）は男性では10歳まで3.8cm、11-12歳では4.0cm、女性では11歳まで3.6cm程度であり、それ以降は急激に小さくなった。重相関係数は男性では10歳まで0.78程度、11-12歳では0.74、女性では11歳までは0.76程度であり、それ以降は男女とも高くなった。両親の身長の補正を行った場合でも、SEや重相関係数はほとんど変化しなかった。BTTモデルを用いた長野ら（2022）の研究では、10歳までの推計では男性 $r=0.716$ 、 $SE=4.36$ 、女性 $r=0.680$ 、 $SE=4.07$ であり、本研究の方法では10歳以下の発育データを用いて高い精度で推計出来ることが明らかとなった。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：発育発達

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 10:54 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[3a1405-07] 発育発達／口頭発表②

座長:渡邊 将司(茨城大学)

10:40 ~ 10:54

[07発-口-07] 発育途中身長データを用いた発育局面推計精度の検証*長野 崇¹、国土 将平² (1. 大阪国際大学、2. 中京大学)

【緒言】発育局面の予測に関する研究は発育の事後的研究に過ぎず、統一の見解は示されていない。アスリート養成や運動教育現場では、発育途中身長データを用いた傷害発生時期やパフォーマンス低下時期の事前予測が期待される。本研究ではBTTモデル(Bock, 1994)を用い、思春期の始まりから終焉までの発育局面を同定し、発育途中身長データを用いた際の推計精度を検証することを目的とした。【方法】体育系学部に所属する大学生男子1125名、女子1100名を対象に、6～17歳までの12年間の身長データを用いて、長野(2022)の初期パラメータを用いたBTTモデルによって、最大身長加速度の30%値を発育急進期開始年齢(ATO)、最大身長発育加速度年齢(APHA)、最大身長発育速度年齢(APHV)、最小身長発育加速度年齢(AFHA)を算出し、基準値とした。その後、17歳データから1年ずつデータ数を減らすことにより各発育局面を推計し、基準値との標準誤差を求めた。【結果および考察】基準値と推計との標準誤差は、10歳までのデータを用いた場合、男女それぞれでATO 0.67年、0.43年(男女の順、以下同様)、APHA 0.70年、0.47年、APHV 0.74年、0.44年、AFHA 0.76年、0.62年となった。資料が増加すると徐々に標準誤差が小さくなり、男子では13歳以上で全ての発育局面で、女子では12歳でAFHAを除く発育局面で0.4年未満となった。BTTモデルを用いた発育局面の推計は、95%の信頼区間としては、10歳までのデータでは男子では1.5年未満、女子では1年未満、女子では12歳までのデータで0.6年程度、男子では13歳までのデータでは0.7年程度の範囲で発育局面が推計できることが明らかとなった。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1601-04] 体育科教育学／口頭発表①

座長:米村 耕平(香川大学)

9:00 ~ 9:14

[11教-口-01]

小学校体育における「バドミントンやテニスを基にしたゲーム」の実態に関する一考察
「テニピン」の可能性の検討を通して*今井 茂樹¹ (1. 山梨学院短期大学)

9:15 ~ 9:29

[11教-口-02]

バレーボールの授業におけるボール操作能力の指導方法の検討
使用するボールの種類を視点に*金森 晴香¹、高田 俊也¹ (1. 九州共立大学大学院 スポーツ学研究科)

9:30 ~ 9:44

[11教-口-03]

卓球初心者指導におけるフォアハンドドライブ技術要素の評価基準の信頼性の検討
感覚経験型指導法を卓球指導場面に導入するための事前研究*陳 仁溥¹、深見 英一郎¹ (1. 早稲田大学)

9:45 ~ 9:59

[11教-口-04]

小学校中学年のゴール型ゲームにおける「転換局面」を対象とした学習の可能性
児童の思考・判断と技能発揮の関係から*中西 紘士¹、谷山 響² (1. 広島修道大学、2. 広島市立井口小学校)

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1601-04] 体育科教育学／口頭発表①

座長:米村 耕平(香川大学)

9:00 ~ 9:14

[11教-口-01] 小学校体育における「バドミントンやテニスを基にしたゲーム」の実態に関する一考察

「テニピン」の可能性の検討を通して

*今井 茂樹¹ (1. 山梨学院短期大学)

2017年に小学校学習指導要領解説体育編（文部科学省、2018）が告示され、中学年に「バドミントンやテニスを基にした易しいゲーム」が、高学年に「バドミントンやテニスを基にした簡易化されたゲーム」が新たに例示された。しかしながら、小学校教員からは、「バドミントンやテニスを基にした易しい（簡易化された）ゲーム」（以下、「バドミントンやテニスを基にしたゲーム」）という例示が曖昧で何を行ったらよいのかわからないため、実施の検討すらできなかったという声が多いことが指摘されている（今井、2024）。

本研究では、「バドミントンやテニスを基にしたゲーム」に関して、小学校教員がどのようなことに問題を感じているのかについて実態を調査した。そのうえで、全国で実践されている「テニピン」を小学校教員実技研修の場で実施し、「バドミントンやテニスを基にしたゲーム」の例示種目としての可能性について、小学校教員の意識調査を通して検討することを目的とした。

「バドミントンやテニスを基にしたゲーム」に関する実態調査の結果から、小学校現場のなかで十分に認知がされていない実態が明らかとなった。また、実践されていない要因について、テキストマイニング分析により、7つに整理された。

「テニピン」実技研修前後における「実践可能」に係る意識の変容については、高まりがみられた。小学校体育において「テニピン」であれば「バドミントンやテニスを基にしたゲーム」として、実践の可能性を検討できることが示唆された。

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1601-04] 体育科教育学／口頭発表①

座長:米村 耕平(香川大学)

9:15 ~ 9:29

**[11教-口-02] バレーボールの授業におけるボール操作能力の指導方法の検討
使用するボールの種類を視点到***金森 晴香¹、高田 俊也¹ (1. 九州共立大学大学院 スポーツ学研究科)

バレーボールは、学習指導要領上、「役割に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること」と「状況に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空間を作りだすなどの攻防を展開すること」をねらいとし、学習内容が展開されている。

そこで、仲間と連携して「拾う、つなぐ、打つ」などの一連の流れで攻撃を組み立て、相手の陣形や返球によって生じるコート上の空間を攻める内容が行われる。また、味方や相手の状況に応じてボールに変化をつけたり、ねらった場所に打ち分けたりして、得点しやすい空間を作り攻撃し、それに対して仲間と連携して守るなどと攻防のゲーム様相が展開される。

したがって、状況に応じたボールのコントロールとその対応のための動きに着目させ、学習に取り組ませることが大切である。しかし、苦手や嫌いな人は、ボールの落下位置を予測し、指や手首、腕等の身体操作により、攻撃を有効に行うことができていないと考えられる。

これらを阻害するものが用具に対する恐怖心等の否定的感情である。

そこで本研究では、ビーチボールやソフトバレーボールのような軽量でかつ柔らかなボールを使用させることで、ボール操作技能の獲得や楽しさを味わわせることが可能となるかについて明らかにすることを目的とした。

その結果、授業前の学習態度や運動有能感の調査では、バレーボールに対して自信のない学生や、楽しさを味わえていない学生が多かったが、授業後には、積極的に取り組む学生、自信を持った学生が増えた。

したがって、素材や重さ、大きさが異なる様々なボールを使用することは、学生が好意的にバレーボールに取り組み、本来の楽しさを味わうことができる指導法の1つとして有効であると考えられた。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1601-04] 体育科教育学／口頭発表①

座長:米村 耕平(香川大学)

9:30 ~ 9:44

[11教-口-03] 卓球初心者指導におけるフォアハンドドライブ技術要素の評価基準の信頼性の検討

感覚経験型指導法を卓球指導場面に導入するための事前研究

*陳 仁溥¹、深見 英一郎¹ (1. 早稲田大学)

卓球指導における「感覚経験型指導法」の導入を目指し、初心者のフォアハンドドライブの技術要素（ツボ）とその評価基準の信頼性を検討した。ツボは筆者（中国国家一級運動員）と日本卓球協会公認コーチIV級が先行研究を参考に、「準備段階（構え動作・予測的移動）」「バックスイング段階（体重移動・ラケットの位置）」「スイング段階（前腕の回転・体幹の回転）」に分類した。評価基準の表現はスポーツ教育学を専門とする大学教員の助言を受け修正した。卓球学習者20名を対象に一点打ちと二点打ちの映像を撮影し、予測的移動は二点打ち、それ以外のツボは一点打ちで三段階評価した。各ツボは20球中、特定基準を満たす打球が10球以上であればその評点とした（例：構え動作で膝を適度に曲げ前傾姿勢をとったフォームでの打球が10球以上なら「3」）。評価は日中4名のコーチ（日本卓球協会公認コーチII・III級各1名、中国国家一級資格のコーチ2名）が担当し、事前に共通理解を図った。信頼性分析には、ICC（級内相関係数）のうち、評価者間の一致度を示すICC（2,1）を用いて分析した。その結果、構え動作(0.842)、予測的移動(0.898)、体重移動(0.850)、体幹の回転(0.811)は「良好」、ラケットの位置(0.698)と前腕の回転(0.690)は「可能」だった。ラケット位置のICC低下は、後方撮影によりラケットの振り幅が視認しづらかった点が要因とされる。前腕回転では、評価者の指導対象のレベル（初心者／熟練者）の違いにより、加速動作の基準に差が生じたと考えられる。今後は側面撮影の導入や、前腕加速の数値化による基準の客観化が課題である。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1601-04] 体育科教育学／口頭発表①

座長:米村 耕平(香川大学)

9:45 ~ 9:59

[11教-口-04] 小学校中学年のゴール型ゲームにおける「転換局面」を対象とした学習の可能性

児童の思考・判断と技能発揮の関係から

*中西 紘士¹、谷山 響² (1. 広島修道大学、2. 広島市立井口小学校)

本研究は、小学校中学年のボール運動領域におけるゴール型ゲームにおいて、攻防の「転換局面」を対象とした学習の可能性について検討した。筆者らが開発をおこなった「ボウリングボール」を対象に、「転換局面」での思考・判断と技能発揮の関係についてGPAIを援用し求めた指標の分析に加え、それぞれの指標の相関関係を分析した結果以下の3点が明らかになった。

1点目は、第7時から第11時にかけて学級全体としてGP全体の学習成果が向上しており、特に「転換局面」に関する学習成果が向上した。2点目は、本教材についても宗野（2015）の述べている、「攻撃課題・守備課題は相互作用によって発展し、授業過程の中では揺らぎながら発展していく」可能性が示唆され、第9時から第10時にかけてパスとシュートなどの攻撃に関する学習成果が数値としては低下したが、これは守備に関する学習成果が向上したと推察された。3点目は、GPが低い児童は単に技能発揮ができていないのではなく、意思決定にも課題を抱えていると示唆された。また、GPの上昇のためにまずは、適切な意思決定ができる状況判断能力を高めていくことの必要性が挙げられた。

これらのことから、本研究で取り扱った教材において、中学年の児童が攻撃から防御、防御から攻撃の両方の「転換局面」において思考と技能発揮の関係には相関関係が認められ、適切な思考・判断の向上に有効な教材であることが示唆された。そのため、小学校中学年においても「転換局面」を学習の対象として取り扱う事が可能であることが示された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:10 ~ 10:24

[11教-口-05]

小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果①

投能力と跳能力、心理社会面の変容

*佐藤 善人¹、窪 康之²、佐々木 玲子³ (1. 椋山女学園大学、2. 国立スポーツ科学センター、3. 慶応義塾大学)

10:25 ~ 10:39

[11教-口-06]

小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果②

投と跳の動きの質的变化に着目して

*窪 康之¹、佐藤 善人²、佐々木 玲子³ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 椋山女学園大学、3. 慶応義塾大学)

10:40 ~ 10:54

[11教-口-07]

教師の準備運動の機能及び教師の意識に関する研究

効率性と儀礼性に着目して

*秋岡 志保¹、鈴木 聡² (1. 東京学芸大学教職大学院、2. 東京学芸大学)

10:55 ~ 11:09

[11教-口-08]

保健体育科教員の授業づくりに関する事例的検討

授業実践の経験の有無に着目して

*石井 郁¹、中川 麻衣子²、米谷 正造² (1. 川崎医療福祉大学大学院、2. 川崎医療福祉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:10 ~ 10:24

**[11教-口-05] 小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果①
投能力と跳能力、心理社会面の変容**

*佐藤 善人¹、窪 康之²、佐々木 玲子³ (1. 椙山女学園大学、2. 国立スポーツ科学センター、3. 慶応義塾大学)

体力・運動能力の低下、二極化が問題となって久しい。小学校における体育授業はこの状況の改善に貢献することが期待されているが、児童の現状を鑑みるに、十分には役割を果たしていないと思われる。限られた時数の中では、学習指導要領に示された領域の学習内容を実施することが中心となり、体力・運動能力向上に向けた取り組みまでは手が回らないのが現場の実状であろう。本研究では、体育授業における準備運動に焦点を当てる。これまでの準備運動では、いわゆる徒手体操や、ストレッチ効果が期待される運動を実施することが多かった。ここでは、準備運動に運動遊びを取り入れ、児童の投能力と跳能力および心理社会面に変化がみられるかどうかを調査する。なお実施した運動遊びは、(公財)日本スポーツ協会がその普及を推進する「JSPO-ACP」のガイドブックで紹介されている内容から選定した。研究対象は東京都内H小学校4年生102名であった。2024年10月から11月にかけて、計9回の体育授業の準備運動時に、投能力と跳能力に関連する運動遊びを実施した。指導者は、教員免許状を持つ大学院生を中心とした学生であったが、事前に実施する内容を検討し、担任教師に報告して進めた。なお指導の際、特別に投げ方や跳び方の指導は実施していない。運動遊び実施の効果を測定するために、事前事後にソフトボール投げと立ち幅跳びを測定し、変容を分析した。また、運動遊びが児童の心理社会面にどのように影響したのかを明らかにするために、竹中(2016)が作成したプレイフルネス評価尺度を用いて、こちらも事前事後の変容を分析した。その結果、ソフトボール投げの投距離は初回の測定記録下位群の児童が、立ち幅跳びの跳距離は全体、下位群、女子児童で向上した。また、心理社会面にも変容が見られた。これらのことから、準備運動時に運動遊びを実施することの効果を示唆された。

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:25 ~ 10:39

**[11教-口-06] 小学校の体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れた効果②
投と跳の動きの質的变化に着目して**

*窪 康之¹、佐藤 善人²、佐々木 玲子³ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 相山女学園大学、3. 慶応義塾大学)

本研究では、体育授業における準備運動に運動遊びを取り入れることで児童の投能力と跳能力に変化がみられるかどうかを調査した。

研究対象は東京都内H小学校4年生102名であった。2024年10月から11月にかけて、計9回の体育授業の準備運動時に、投と跳に関連する運動遊びを実施した。実施した運動遊びは、(公財)日本スポーツ協会がその普及を推進する「JSPO-ACP」のガイドブックで紹介されている内容から選定した。指導者は、教員免許状を持つ大学院生を中心とした学生であったが、事前に実施する内容を検討し、担任教師に報告して進めた。なお指導の際、特別に投げ方や跳び方の指導は実施しなかった。運動遊びの効果を検討するため、実践期間の前後にソフトボール投げと立ち幅跳びを測定し、それぞれの成果（投距離と跳距離）と動きの質について比較した。動きの質は、前掲のガイドブックに示された評価観点に基づき、ソフトボール投げについては、動き全体の力強さのほか、①ステップ脚の踏み出し、②体幹のひねり、③体重移動、④投げ腕のムチ動作を評価した。立ち幅跳びについては、動き全体の力強さのほか、①準備局面における下肢の屈曲、②腕振り、③離地時の前傾、④着地時の足の姿勢を評価した。

実践前後を比較した結果、ソフトボール投げでは、投距離は実践前における下位群の児童で向上する傾向にあり、動きの質は、体幹のひねりと投球腕のムチ動作が不十分であった児童ほど実践後に向上する傾向にあった。立ち幅跳びでは、跳距離は全体、実践前の下位群、女子児童で向上する傾向にあり、動きの質は、腕振りと離地時の前傾が不十分であった児童ほど実践後に向上する傾向にあった。

これらのことから、体育授業における準備運動時の運動遊びが児童の投能力と跳能力に影響を与えることが示された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 🏢 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:40 ~ 10:54

**[11教-口-07] 教師の準備運動の機能及び教師の意識に関する研究
効率性と儀礼性に着目して***秋岡 志保¹、鈴木 聡² (1. 東京学芸大学教職大学院、2. 東京学芸大学)

体育授業で行う準備運動は「儀式と思われるほど形式的(遠山、1974)」などと評され、批判の対象となることがある。「形式」は、屈伸に始まる決められた体操を体育系の号令で全員が秩序正しく行う(中村ら、2016)などの状況を指す。この状況に対し、主運動に即した効果的なもの(遠山、1974)や、主体的な学びとしての導入(中村ら、2016)、楽しさと多様な動きを含む運動遊びを準備運動で行うことも提案されてきた(春日ら、2020)。しかし、「形式を捨て去らない限り、準備運動のねらいや効果をいかに論じても、理論と運動の実際とは結びつかず、準備運動の効果をより高めることはむずかしい(松延、1974、p.363)」とされたように、現在に至るまで議論が継続している。元来、学校は非合理的側面を含む様々な儀礼によって、秩序の維持と効率よい集団運営をしており、儀礼構造は特定の個人や地位によって維持・強制されるものではない(稲垣、2007)。さらに、学校で共通理解する身体的規律を学習させるという任務は、体育教師の「集団行動」指導による実現が期待されている(沢田、2001、p.214-215)。また、教師の効果的なマネジメントは、体育授業の成果にプラスの影響がある(高橋、1992)ことや、定型化された授業行動は、授業の複雑さを軽減し、秩序と安定をもたらす(香川ら、1990)と考えられている。このことから、準備運動の行われ方には潜在的な儀礼の機能や社会的な期待が反映されているとも考えられる。これまでの研究では、運動効果の合理性から形式的な準備運動の否定的側面は捉えられてきたが、教師が捉える準備運動の機能に言及した研究は管見の限り多くない。そこで本研究では、体育授業を行う教師を対象に、準備運動を行う意味に関する質問紙調査を行い、その多様な側面の検討を目的とする。詳細については当日報告する。

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1605-08] 体育科教育学／口頭発表②

座長:深見 英一郎(早稲田大学)

10:55 ~ 11:09

[11教-口-08] 保健体育科教員の授業づくりに関する事例的検討

授業実践の経験の有無に着目して

*石井 郁¹、中川 麻衣子²、米谷 正造² (1. 川崎医療福祉大学大学院、2. 川崎医療福祉大学)

本研究の目的は、中学校・高等学校の保健体育科教員を対象とした調査により、保健体育科教員の授業づくりの実態と課題を整理することである。学校教育における保健体育科は、実生活で必要とされる知識や技能の習得と、自他の課題に立ち向かう力を養うことが求められている（三浦，2021）。しかし、小島（2020）は、取り扱う運動領域によって授業実践に難しさを感じている教員がいることを報告している。また、石川・村上（2021）は、バスケットボールの授業を初めて取り扱う教員が個人技能の指導に悩みを感じていることを報告している。これらより、本研究では、授業実践の経験がない運動種目を取り扱う際の授業づくりに関する課題を整理する。

本研究では、中学校・高等学校に勤務する保健体育科教員4名を対象とした半構造化インタビュー調査を行う。インタビュー内容は、授業実践の経験がない運動種目を取り扱う際の授業づくりの方法や難しさに関する内容であり、具体的には、(1)回答者に関する内容(2)授業づくりに関する内容(3)授業実践に関する内容である。得られたインタビューデータは質的帰納的に分析した。

4名を対象としたインタビュー調査の分析より、教員歴3年目の教師Aの「初めて取り扱う運動種目では、同僚教員に相談する内容が分からない」という語りから、同僚教員の授業検討の場においても、自身の授業実践の経験が影響することが窺えた。また、教員歴2年の教師Bは、「初めて取り扱う運動種目では、生徒のつまずきが予測できない」と語っており、授業経験がないことで、生徒への指導場面において課題を感じている実態が明らかとなった。さらに、[授業実践の経験がない運動種目]について、教師Aの「発展技や珍しい運動種目では、技能面でも授業づくりに難しさを感じる」という語りから、中学校・高等学校での体育授業の特徴が窺えた。結果の詳細ならびに分析結果については当日説明する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:49 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1609-10] 体育科教育学／口頭発表③

座長:川戸 湧也(三重大学)

11:20 ~ 11:34

[11教-口-09]

小学生と成人を対象とした柔道の受身時の頭部衝撃値に関する研究

頭部損傷基準値：HIC（Head Injury Criterion）用いての評価

*廣田 音奏¹、成田 泰崇²、石川 芽生子⁴、小谷 恭子³、河鱒 一彦⁴ (1. 大阪産業大学、2. 国士舘大学、3. 帝塚山学院大学、4. 関西学院大学)

11:35 ~ 11:49

[11教-口-10]

社会構成主義における「知識の理論」と体育授業

具体的実践像の探究

*牧野 祥子¹ (1. 国際武道大学)

2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:49 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1609-10] 体育科教育学／口頭発表③

座長:川戸 湧也(三重大学)

11:20 ~ 11:34

**[11教-口-09] 小学生と成人を対象とした柔道の受身時の頭部衝撃値に関する研究
頭部損傷基準値：HIC（Head Injury Criterion）を用いた評価**

*廣田 音奏¹、成田 泰崇²、石川 芽生子⁴、小谷 恭子³、河鱒 一彦⁴ (1. 大阪産業大学、2. 国土館大学、3. 帝塚山学院大学、4. 関西学院大学)

背景と目的

子どもは転倒の発生率が高く、頭部や顔面の負傷も多く見られる。特に頭部外傷の予防は重要な課題である。柔道にはこうした頭部損傷のリスクを軽減する技法として「受身」がある。本研究では、頭頸部筋力が成人より弱いと考えられる小学生柔道修行者を対象に、受身動作中の頭部損傷基準（Head Injury Criterion：HIC）を測定した。また、比較対象として成人の柔道経験者においても同様の測定を行い、“小学生の柔道の受身時”の頭部衝撃値を検討することを目的とした。

方法

対象は柔道教室に通う小学生1～6年生と柔道経験のある成人とした。対象者には柔道衣を着用させた。小学生には「前回り受身」、「横受身」、「後ろ受身」の3種類の受身動作を各2回行わせ、成人には「前方への模擬転倒」、「前受身」の2種類を各2回行わせた。それぞれの受身時の頭部衝撃値の測定のために加速度センサを対象者の前額面に装着した。得られた加速度データから最大HICを算出し小学生と成人でt検定を施し比較、検討を行った。

結果と考察

小学生の受身動作3種類間の最大HICと成人の受身動作2種類間の最大HICでは有意な差は認められなかった。成人と小学生の各受身の比較では成人の「前方への模擬転倒」よりも小学生の「横受身」の最大HICの方が有意に小さかった（ $p < 0.05$ ）。また、成人の「前受身」よりも小学生の「横受身」の最大HICの方が有意に小さかった（ $p < 0.01$ ）。小学生の「横受身」の最大HICが有意に小さかったことに関して、柔道では受身時の衝撃を緩衝させるために身体の接床面積を広げ、更に身体の接床順位をうまく配分して時間的に長くして緩衝しているとされている（児島、1978）。「前受身」は腕しか接地しないため接床面積も小さく接床順位の配分もないが「横受身」はその逆であることから最大HICが有意に小さかったと考えられる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:49 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1609-10] 体育科教育学／口頭発表③

座長:川戸 湧也(三重大学)

11:35 ~ 11:49

**[11教-口-10] 社会構成主義における「知識の理論」と体育授業
具体的実践像の探究***牧野 祥子¹ (1. 国際武道大学)

社会構成主義は、学習者に知識を一方的に教え込む授業から、学習者と教師、学習者相互の間で知識を構成する授業へと転換する可能性をもっている。社会構成主義とは、人々が現実とみなしているものは、社会的に構成されたものであると捉える立場である。社会構成主義では、知識も歴史や文化、社会によって構成され、支えられたものであると考える。このような見方は、世界や人々を形成している内部には何かしらの不変的な「本質」が存在すると捉える本質主義の問題点を浮き彫りにする。本質主義に立つ授業では、教師がもつ知識を「唯一絶対の正解」とみなし、知識を確実に獲得することが求められる。それに対し、社会構成主義に立つ授業では、不変的な「本質」や「唯一絶対の正解」とされる知識に批判的・懐疑的な立場をとる。そのような授業では、知識の獲得ではなく、教師や学習者、学びに関わる人々によって知識を共同で探究し、再構成することが求められるのである。では、このような社会構成主義における知識の再構成の理論は、体育授業においてどのようなかたちで応用しえるのであろうか。体育ならば、その教科特性である技能に関しても、構成されるものとして扱う可能性を検討しなければならないだろう。本報告ではこのような問題意識のもと、社会構成主義における知識の再構成の理論の体育授業への応用可能性と具体像を提示しようとする。本発表では、日本の体育授業研究における社会構成主義の視点に立つ授業実践を取り上げ、その応用可能性について検討したうえで、社会構成主義における知識の再構成がより顕著に実現された授業の具体例を提示したい。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1611-14] 体育科教育学／口頭発表④

座長:四方田 健二(名古屋学院大学)

13:30 ~ 13:44

[11教-口-11]

学習指導モデルを適用した大学ダンス授業の適用過程に関する研究
スポーツ教育モデルと協同学習モデルを用いて*安達 詩穂¹、大西 祐司²、栗田 昇平³、和田 博史⁴ (1. 日本女子体育大学、2. びわこ成蹊スポーツ大学、
3. 大阪体育大学、4. 育英大学)

13:45 ~ 13:59

[11教-口-12]

小学校体育における「表現運動」の展開の試み
体育授業から運動会、そして舞台上演へ*和光 理奈¹、眞崎 雅子² (1. 中京大学、2. 華頂短期大学)

14:00 ~ 14:14

[11教-口-13]

教員養成大学におけるダンス授業に関する一考察

*仲間 若菜¹、安則 貴香²、津田 博子¹ (1. 日本体育大学、2. 東洋大学)

14:15 ~ 14:29

[11教-口-14]

「現代的なリズムのダンス」における創造的な学びを実現する指導の検討

*田巻 以津香¹、山崎 朱音²、梶 ちか子³ (1. 東海大学、2. 横浜国立大学、3. 鹿屋体育大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

📅 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1611-14] 体育科教育学／口頭発表④

座長:四方田 健二(名古屋学院大学)

13:30 ~ 13:44

**[11教-口-11] 学習指導モデルを適用した大学ダンス授業の適用過程に関する研究
スポーツ教育モデルと協同学習モデルを用いて**

*安達 詩穂¹、大西 祐司²、栗田 昇平³、和田 博史⁴ (1. 日本女子体育大学、2. びわこ成蹊スポーツ大学、3. 大阪体育大学、4. 育英大学)

本研究では、ダンス授業に協同学習モデルを併用したスポーツ教育モデルを適用する試みを行った。それが受講者にどのように受け止められ、各モデルの要素とどのように関連していたのかを6名の学習者へのライフライン・インタビューから明らかにすることを研究目的とした。学習者はスポーツ系学科所属の大学3年生26名であった。スポーツ教育モデルの特性であるクライマックスイベント、祭典性、チームの所属、公式試合、記録の保持に即したダンス授業の単元計画を行った。また、Graves&Townsend(1991)のダンス授業にスポーツ教育モデルを適用した報告を参考に、スモールティーチャー、映像ディレクター、インタビュー、アナリストという役割を設定した。初回から最終回まで固定の異種混同の4グループそれぞれに4役を配置し、活動を行った。授業内容としては、前半にフォークダンス、現代的なリズムのダンス、創作ダンスの技術の習得を行い、毎時間創作した「ひと流れの動き」を記録・蓄積し、後半はそれを組み合わせて創作ダンスを仕上げ、観客を招いた発表会を実施するという計画であった。インタビュー調査では、異なる刺激から創作した動きを組み合わせるという創作方法に対する驚きや戸惑いの反応が見られた。他には、個人のパーソナリティによる自身への気づきや、モチベーションの変化とそのきっかけ、役割学習・グループ学習・授業運営・教材・パフォーマンス・発表に対する様々な態度、そして達成感、ダンスイメージの広がり、ダンスの多様性への気づき等の学習効果が観測された。Michael A.graves, J.Scott Townsend(1991)Applying the Sport Education Curriculum Model to Dance. JOPERD, 71 (8) :50-54.

■ 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1611-14] 体育科教育学／口頭発表④

座長:四方田 健二(名古屋学院大学)

13:45 ~ 13:59

[11教-口-12] 小学校体育における「表現運動」の展開の試み
体育授業から運動会、そして舞台上演へ*和光 理奈¹、眞崎 雅子² (1. 中京大学、2. 華頂短期大学)

小学校の体育授業において「表現運動」の指導は難易度が高く、創作に時間がかかるため敬遠されがちである。現状では表現運動に関する授業内容が、運動会に向けた集団演技の練習に置き換えられるケースも少なくない。

本研究では、担任教諭とダンス専門の大学教員が協同し、小学4年生を対象に「表現運動」の授業を構築し、成果発表の場を授業内に留めず、運動会、さらには舞台公演にまで広げる実践を試みた。研究計画として、111名を対象に全12回の授業を計画し、最初の11回で表現運動の指導と創作活動を行い、12回目を運動会での発表と位置づけた。その約1か月後には大学主催のダンス発表会において、同一テーマの作品を26名の編成で照明付きの舞台上で上演した。舞台上演後、児童20名による感想文をKHコーダーで共起ネットワーク分析した結果、「先生たちとの出会いの喜び」「仲間とともに創作したダンス」「観客に伝わるよう工夫した表現」「初めての舞台による緊張感」「拍手を受けた喜び」など、主要語を核とした意味的グループが抽出された。これらの記述からは、初めての大規模な舞台上演を、仲間と協力しながら緊張を乗り越え、達成感や自信を得る姿が浮かび上がった。佐藤学は協同的な学びの基盤として、対話的コミュニケーションの重要性を指摘し、感覚の共有を土台とする表現運動を体育における実践の一例と位置付けている。さらに仲間や教師の支援を得ながら、一人では到達できない課題に挑戦する「ジャンプの学び」が学習の質を高めると述べている。本実践は、体育授業から運動会、さらに舞台発表へと展開する中で、児童が新たな挑戦を重ね「ジャンプの学び」を体現した取り組みであったと評価できる。

以上より、体育授業の学びを発展的に展開し、多様な環境において発表の機会を設けることは、児童の創造性・協同性・自己効力感といった教育的価値の高い成果を生み出す可能性が示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

📅 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 🏢 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1611-14] 体育科教育学／口頭発表④

座長:四方田 健二(名古屋学院大学)

14:00 ~ 14:14

[11教-口-13] 教員養成大学におけるダンス授業に関する一考察*仲間 若菜¹、安則 貴香²、津田 博子¹ (1. 日本体育大学、2. 東洋大学)

文部科学省は、平成20年に中学校学習指導要領の改訂を告示し、中学校保健体育において「ダンス」は男女ともに必修と定めた。それに伴い、日本体育大学では、ダンスの授業は長年女子学生のみが必修科目として受けていたが（男子学生は選択科目）、学習指導要領に合わせるように2008年度から男子学生も必修と義務付けた。現在ダンスの授業には、年間4学部8学科の学生約1600名が男女共修で受けている。ダンス授業では中学校・高等学校の学習指導要領に即して「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」は基より、基本技術として「エレメンタリーダンス」を取り入れている。エレメンタリーダンスは、歩く・走る・跳ぶ・弾む・回転などの基本的な動きを、リズムに合わせて習得しそれらの動きを音楽のリズムや強弱の流れの変化、空間形成、即興・創作まで行うダンス教育である。これはドイツのギュンター学校（Günter Schule 1924年-1944年）で実施されていた「動きと音楽」の教育方法で、そこでの教育を継承したケルン体育大学（Deutsche Sporthochschule Köln）の動きと音楽を主題とした授業内容である。本学の名誉教授、三宅香がケルン体育大学で学び、その後ダンスの基礎的な運動として授業に活かしていった。ダンス授業の教育的価値は、動く楽しさや喜びを味わい、基礎的な運動技術・技能を身につけ、運動課題を解決するなど、運動学習をバランスよく行うだけでなく、想像力を養うことで個性を引き出し、他者とのコミュニケーション能力を育てるところにある。卒業後に教員を目指す学生が多い中で、ダンス授業を受けた学生達が本授業を振り返り、何を感じ学ぶことができたのかを把握することは、教員が授業内容を改善するために必要不可欠である。そこで今後の授業改善に向け、学期末にアンケート調査を行った。その詳細を明らかにする。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

📅 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[3a1611-14] 体育科教育学／口頭発表④

座長:四方田 健二(名古屋学院大学)

14:15 ~ 14:29

[11教-口-14] 「現代的なリズムのダンス」における創造的な学びを実現する指導の検討*田巻 以津香¹、山崎 朱音²、梶 ちか子³ (1. 東海大学、2. 横浜国立大学、3. 鹿屋体育大学)

「現代的なリズムのダンス」においては、その種目特性の不明瞭さから、学習内容や指導方法、評価方法が不明確であり、そのことが影響して現場教員の間でも様々な困りを引き起こしている現状がある。報告者らはその解決を目指すべく、種目特性の明確化に取り組んできた。これまでの調査で「リズムに乗る」ことで音楽と協調し没入的に踊る楽しさを味わうことが種目特性であることが明らかになったため、それらの種目特性に触れることができる学習指導案を作成し、実際に大学における授業での実践と研究者間での議論を往還しながらブラッシュアップしてきた。作成した学習指導案では①生徒が種目特性を十分に理解し、体験できる内容であること、②生徒の創造的な活動を担保すること、③仲間と関わって活動することを目指し、振付を指導する一斉指導型ではない指導方法を展開した。指導内容として振付がない場合に何を指導したら良いか分からないという困りに対して提案可能な、10分程度の複数の活動を学習指導案に含めることで、現場の状況に応じて教員が活動を選択できるような工夫も施すことができた。そこで本報告では、中学校体育授業での実践を前に、作成した学習指導案に基づいて大学生を対象に実践を行い、振り返りシートの記述から①～③の内容を身につけることができたかについて検証した。詳細は当日報告する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1701-04] 体育科教育学／口頭発表⑤

座長:佐藤 豊(桐蔭横浜大学)

9:00 ~ 9:14

[11教-口-15]

器械運動における学習者相互の関わりに関する研究

類似図式がある技を通して

*瀧澤 のぞみ¹、鈴木 聡²、仲宗根 森敦² (1. 東京学芸大学 教職大学院、2. 東京学芸大学)

9:15 ~ 9:29

[11教-口-16]

個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図った授業展開による技能と学習意欲の変容

ICTを活用した短距離走単元における中間走の学習に着目して

*山岡 竜太郎¹、関 伸夫² (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学)

9:30 ~ 9:44

[11教-口-17]

器械運動における個別最適な学習と協働的な学習

*福ヶ迫 善彦¹、田中 光¹、今関 豊一² (1. 流通経済大学、2. 東京国際大学)

9:45 ~ 9:59

[11教-口-18]

中学校における協同学習モデルを活用した体育授業の検討

社会的スキルの変容に着目して

*池田 航¹、荻原 朋子¹、村井 梨沙子² (1. 順天堂大学、2. 東海大学)

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1701-04] 体育科教育学／口頭発表⑤

座長:佐藤 豊(桐蔭横浜大学)

9:00 ~ 9:14

**[11教-口-15] 器械運動における学習者相互の関わりに関する研究
類似図式がある技を通して***瀧澤 のぞみ¹、鈴木 聡²、仲宗根 森敦² (1. 東京学芸大学 教職大学院、2. 東京学芸大学)

器械運動の技は「非日常性と驚異性、簡潔性」を特徴とし、器械運動は動感形態を発生させる運動学習として特性をもつ(三木、2015)。体育授業においては「指導者—学習者」という関係系だけでなく、「学習者—学習者」という関係系もあり、学習者間の動感形態を発生させる運動学習についても検討する必要がある。深見ら(2015)は、「運動技能の高い生徒とそうでない生徒との間で、自然発生的に教え合いや関わり合いは生まれなかった」ことから「先生が積極的に粘り強く働きかけることが重要である(p.70)」ことを示唆している。教師が働きかけをした上で、技能向上に向けた学習者同士の関わりの実質を捉える必要があるだろう。市村・中村(2018)は、運動に苦手意識があった児童が技の類似動感があることで、「できない」運動でも他の学習者に感覚を伝えようとしていたと考察している。さらに、鈴木(2023)は「言語的・視覚的情報が方法知・身体知として自己の動きをもって理解することによって(p.170)」具体的な動きの修正に直接的に関わる助言活動がなされることを示唆している。取り組む技のアナログン、すなわち類似図式が学習者にあることによって、他の学習者に「動きかた」を伝えたり、動きの修正に直接関わったりすることができる可能性がある。これまで、学習者に類似図式がある技における他の学習者との関わりについて検討した研究は管見の限りではあるが多くはない。技能と関係性は関わることを通して相互に影響し合っていると考えられる(市村・中村、2018)ことから、技能と関係性の変容に着目して考察する必要がある。

そこで本研究では、小学校高学年のマット運動を対象に、学習者に類似図式がある技における学習者相互の関わりを、学習者の技能や関係性の変容に着目しながら明らかにすることを目的とする。詳細は当日発表する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 9:00～9:59 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1701-04] 体育科教育学／口頭発表⑤

座長:佐藤 豊(桐蔭横浜大学)

9:15～9:29

[11教-口-16] 個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図った授業展開による技能と学習意欲の変容

ICTを活用した短距離走単元における中間走の学習に着目して

*山岡 竜太郎¹、関 伸夫² (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学)

【緒言】中央教育審議会答申（2021年）では、個別最適な学びと協働的な学びの実現が必要とされている。これまで体育の授業を対象とする、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する実証研究は、管見の限りほとんど見られず、今後、体育の授業における実践例や実証研究の蓄積がますます重要になると考えられる。また、体育の授業に関する研究について陸上競技領域では、個別の課題解決に焦点を当てた研究（長野ら,2011：深見ら,2017）が主なものとなっているとともに、短距離走について伊藤ら（2011）は、疾走タイムが評価の対象となってしまうことで、生徒によっては走運動への学習意欲が低下傾向になることを指摘している。これらのことを改善し、生徒が興味・関心をもち、意欲的に体育における短距離走を学ぶためには、個人での課題解決学習に止まらず、その個別最適な学びが孤立した学びに陥らないよう、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出していく協働的な学びとの往還を図る（中央教育審議会答申2021）授業展開を実施することが重要ではないかと考えられる。

【目的】中学校体育の陸上競技短距離・リレーにおける短距離走単元において、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図った単元計画に基づく授業を展開することによる、生徒の技能と学習意欲の変容を明らかにすること。

【方法】千葉県のあるS中学校3年生（4クラス女子60人程度）とし、陸上競技領域短距離走単元において、個人での課題解決学習とペアやグループ活動を通して仲間の意見を取り入れて課題を確認する学習を往還させる単元を6時間で設定した。収集したデータは、毎時間の形成的授業評価及び、体育における学習意欲検査（AMPET）によって生徒の意欲の変容等を図った。その詳細については、当日発表する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1701-04] 体育科教育学／口頭発表⑤

座長:佐藤 豊(桐蔭横浜大学)

9:30 ~ 9:44

[11教-口-17] 器械運動における個別最適な学習と協働的な学習

*福ヶ迫 善彦¹、田中 光¹、今関 豊一² (1. 流通経済大学、2. 東京国際大学)

情報社会を中心に急激な変化が見込まれる現代の児童には、新たな資質・能力が求められる。学習指導要領の趣旨を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが重要と考えられる。そこで本研究は、小学校高学年で、器械運動（マット運動）における個別最適な学習と協働的な学びの観点から単元を計画し、実施することで、教師や抽出児の発言にどのような変化が見られるか検討することを目的とした。

その結果、学習時間量は単元を通じて高い値を示し、教師行動は漸増した。また、KHコーダーの分析から教師行動は独立した集団となり、子供の発言は、「手」を中心に発言されていた。

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1701-04] 体育科教育学／口頭発表⑤

座長:佐藤 豊(桐蔭横浜大学)

9:45 ~ 9:59

**[11教-口-18] 中学校における協同学習モデルを活用した体育授業の検討
社会的スキルの変容に着目して***池田 航¹、荻原 朋子¹、村井 梨沙子² (1. 順天堂大学、2. 東海大学)

日本とOECD(経済協力開発機構)間の政策対話では、2030年に向けた教育のあり方として学校の新たなカリキュラム中に社会的スキルを重視する必要があることなどの意見が出された(教育課程企画特別部会,2015)。社会的スキルを非認知能力としてOECD(2018)では、個人の内面や他者との関係性に深くかかわる力として定義されている。また、現行の中学校学習指導要領に指導内容の一つとして「学びに向かう力、人間性等」が示され、保健体育科では社会的な行動に関わる事項が学習内容として取り上げられている(文部科学省,2017)。そのような中で、体育においては生徒の社会的スキルを高めるための学習指導モデルである協同学習モデル(cooperative Learning)が提案されている。近年では、協同学習モデルを活用した体育授業の実証的研究が、蓄積されている(東海林ら,2017;栗田,2015;松本・近藤,2021)。しかし、江村(2003)によると社会的スキルは1つの単元内で完結するものでなく、その後の学習や生活場面につながる重要なスキルであるため、その変容を長期的に検証する必要がある。

そこで、本研究では、中学校体育授業において、協同学習モデルを取り入れた際の生徒の社会的スキルの変容を明らかにすることを目的とする。

対象は千葉県内のN中学校2年生(4クラス126人)とし、協同学習モデルにおけるジグソー法(Jigsaw,1975)を取り入れたネット型バレーボール単元で授業を14時間程度実施した。収集したデータは、毎時間の形成的授業評価及び、単元前後及び単元後の一定期間後に実施した中学生用社会的スキル尺度(戸ヶ崎ら,1997)である。加えて、授業中の人間関係行動と情意行動を測定するために集団的時間標本観察法(GTS)法により生徒の行動について観察集計を行った。その詳細については、当日発表する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1705-08] 体育科教育学／口頭発表⑥

座長:宮尾 夏姫(奈良教育大学)

10:10 ~ 10:24

[11教-口-19]

演題取り下げ

10:25 ~ 10:39

[11教-口-20]

小学校体育授業の準備運動場面における1年間のACP導入が児童の基礎運動能力に与える影響
小学校低学年児童を対象に

*塚本 将太¹、寺内 秀一²、小椋 優作³、大坪 健太⁴、青野 博⁵、春日 晃章⁶ (1. 中部学院大学、2. 岐阜大学大学院、3. 中部学院大学短期大学部、4. 岐阜協立大学、5. 日本スポーツ協会、6. 岐阜大学)

10:40 ~ 10:54

[11教-口-21]

体育授業におけるACP導入が小学校高学年児童の心理的側面に及ぼす影響

*杉山 明日香¹、塚本 将太²、寺内 秀一¹、青野 博³、春日 晃章⁴ (1. 岐阜大学大学院、2. 中部学院大学、3. 日本スポーツ協会、4. 岐阜大学)

10:55 ~ 11:09

[11教-口-22]

高校体育授業におけるアクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）を取り入れた準備運動が
女子生徒の意識に及ぼす影響
運動有能感の違いに着目して

*大坪 健太¹ (1. 岐阜協立大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1705-08] 体育科教育学／口頭発表⑥

座長:宮尾 夏姫(奈良教育大学)

10:25 ~ 10:39

[11教-口-20] 小学校体育授業の準備運動場面における1年間のACP導入が児童の基礎運動能力に与える影響

小学校低学年児童を対象に

*塚本 将太¹、寺内 秀一²、小椋 優作³、大坪 健太⁴、青野 博⁵、春日 晃章⁶ (1. 中部学院大学、2. 岐阜大学大学院、3. 中部学院大学短期大学部、4. 岐阜協立大学、5. 日本スポーツ協会、6. 岐阜大学)

目的) 本研究は、体育授業の準備運動場面におけるアクティブ・チャイルド・プログラム（以降ACP）の1年間の実施（以降ACP準備運動）が小学校低学年児童の基礎運動能力特性に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。方法) 対象は、G県の小学1年生94名（男子47名、女子47名）であった。ACP準備運動の効果を明らかにするため、ACP準備運動の実施前と実施1年後で性別および種目別（50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ）で基礎運動能力の変容を分析した。基礎統計量から1年間の伸び量を算出し、全国平均の1年間の伸び量と比較した。また、性別および種目別での各能力（走能力・跳能力・投能力）の高低とACP準備運動の効果を検討するため、全国平均と標準偏差から各能力のPre-testの結果を上位群、中位群、下位群の3群に群分けし、一要因のみ対応のある二元配置分散分析を適用した。有意な主効果が認められた場合、多重比較検定を行うとともに効果量を算出した。結果) 男女とも全ての項目において、ACP実施群の方が伸び量が大きく、ACPの実施は小学校低学年児童の体力向上に効果があることが示唆された。分析の結果、男女とも全ての項目において有意な主効果が認められた。効果量に着目すると、男子のソフトボール投げを除く5項目において下位群が最も高い効果量を示し、特に下位群の児童に対して効果的であることが示唆された。ACPは子どもが楽しみながら多様な動きを経験し、積極的にからだを動かすことができるプログラムであり、運動能力の優劣に関わらず、全ての児童がACP準備運動の中で運動の質と量を一定に獲得できたため、運動能力の向上に繋がったと考えられる。結論) 体育授業にACP準備運動を導入することは、小学校低学年児童の基礎運動能力向上に効果があり、体力の二極化、低下という社会問題改善の一助になると考えられる。

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1705-08] 体育科教育学／口頭発表⑥

座長:宮尾 夏姫(奈良教育大学)

10:40 ~ 10:54

[11教-口-21] 体育授業におけるACP導入が小学校高学年児童の心理的側面に及ぼす影響

*杉山 明日香¹、塚本 将太²、寺内 秀一¹、青野 博³、春日 晃章⁴ (1. 岐阜大学大学院、2. 中部学院大学、3. 日本スポーツ協会、4. 岐阜大学)

本研究は、体育授業の準備運動場面におけるアクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）の導入が、高学年児童の心理的側面に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

対象は、G県の小学校に通う高学年児童の179名（男子90名、女子89名）であった。ACP準備運動は、日本スポーツ協会が発行するガイドブックを参考に、アレンジを加え授業開始時5分-7分程度3種類の運動あそびを実施した。質問紙は、ACP準備運動と通常準備運動の比較および今後の体育授業に対する意識の2要素からなる5問と自由記述から構成され、ACP準備運動導入1ヶ月後に回答を得た。今後の体育授業に対する項目は5件法、ACP準備運動と通常準備運動の比較に対する項目は3件法で回答を得た。分析に際して、今後の体育授業に対する項目を3群に再区分した。体力は、体力総合評価に基づき、3群（体力上位群：A・B、体力中位群：C、体力下位群：D・E）に分類し分析に用いた。体力の高低によってACP準備運動の導入が児童の心理的側面に与える影響を検討するため、クロス集計表を作成した後に χ^2 検定を実施した。また、性別に基づく同様の分析も行った。加えて、児童がACP準備運動に抱く感情を明らかにするため、自由記述で得た回答にテキストマイニングを実施した。

分析の結果、有意な関連は認められなかったことから、誰にでもACP準備運動が心理的側面で良い効果を与えていることが示唆された。また、体力の高低に関わらずACP準備運動の項目はおおよそポジティブな回答であり、体力が低い児童においても前向きに実施できることが示唆された。テキストマイニングの結果、「関わる」「友達」「動く」などのACPの概念に関連する語群や「楽しい」「できる」などのポジティブな語群が多く抽出され、楽しく授業に参加していることが考えられる。

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1705-08] 体育科教育学／口頭発表⑥

座長:宮尾 夏姫(奈良教育大学)

10:55 ~ 11:09

**[11教-口-22] 高校体育授業におけるアクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）を取り入れた準備運動が女子生徒の意識に及ぼす影響
運動有能感の違いに着目して**

*大坪 健太¹ (1. 岐阜協立大学)

本研究は、高校体育授業における準備運動にACPを取り入れた授業実践に対する生徒の意識を、運動有能感の観点から検討することを目的とした。対象はG県の県立高校に在籍する1年生の女子生徒78名であり、単元は長距離走であった。順序効果を統制するために、A組では単元の前半4時間で対象校において従来実施されてきた準備運動（通常準備運動）を、単元後半4時間でACPを取り入れた準備運動（ACP準備運動）を行い、B組では前半にACP準備運動を、後半に通常準備運動をそれぞれ実施した。準備運動以降の授業内容は2クラスで同一の内容を実施した。単元開始時において、運動有能感測定尺度を用いて運動有能感を調査するとともに、体育授業および運動・スポーツに対する意識についてアンケート調査を行った。単元終了時には、ACP準備運動の有無が生徒の意識に与える影響を調査した。質問紙は9項目から構成され、3件法（どちらの準備運動が楽しかったか等の支持傾向に関する5項目）あるいは5件法（ACP準備運動は楽しかったですか等の賛同度に関する4項目）によって回答を得た。分析に際して、運動有能感のT-scoreを算出し、上位群（ ≥ 55 ）、中位群（45～54）、下位群（ < 45 ）の3群に分類した。ACP準備運動に対する生徒の意識特性を検討するために、運動有能感と質問項目との関連についてクロス集計および χ^2 検定を行った。

分析の結果、運動有能感と体育・運動・スポーツへの意識との間に有意な関連が認められた。一方で、運動有能感とACP準備運動に対する意識との間には有意な関連は認められず、運動有能感の高低に関わらずACP準備運動に対する肯定的回答の割合が高い傾向が確認された。これらのことから、高校体育授業におけるACPの活用は、体育嫌いや運動嫌いな女子生徒の運動を推進していくうえでの効果的な活動内容となり得る可能性が示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

📅 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:49 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1709-10] 体育科教育学／口頭発表⑦

座長:山口 孝治(佛教大学)

11:20 ~ 11:34

[11教-口-23]

教員養成大学におけるパルクール授業の実践報告—第一報—

*長谷川 晃一¹、荒本 英世³、稲垣 良介² (1. 上越教育大学、2. 岐阜聖徳学園大学、3. 日本体操協会 パルクール委員会)

11:35 ~ 11:49

[11教-口-24]

静水での小児の落水に関する実験的研究

*栗栖 茜¹、藤田 恵理²、横澤 喜久子³、平工 志穂³、天野 勝弘⁴、中島 弘毅⁵ (1. 日本赤十字看護大学附属災害救護研究所、2. 帝京大学、3. 東京女子大学、4. スポーツパフォーマンスデザイン⁷、5. 松本大学)

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:49 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1709-10] 体育科教育学／口頭発表⑦

座長:山口 孝治(佛教大学)

11:20 ~ 11:34

[11教-口-23] 教員養成大学におけるパルクール授業の実践報告―第一報―

*長谷川 晃一¹、荒本 英世³、稲垣 良介² (1. 上越教育大学、2. 岐阜聖徳学園大学、3. 日本体操協会 パルクール委員会)

パルクールは、走る・跳ぶ・登るといった移動動作を通じて心身を鍛える運動文化であり、その起源はフランス軍の訓練法であり、現在では競技・パフォーマンスとしても展開されている（松川，2019；泉，2019）。近年は映像メディアの拡散によって日本でも関心が高まりつつあるが、派手な技術が注目されるあまり、「危険」や「エクストリーム」といったイメージが先行する傾向がある。

しかし本来のパルクールは、受け身や衝撃回避など安全な身体操作を前提とする技術が集積されており、実践者は基礎動作の積み重ねと段階的な技能の習得を重視している（泉，2019）。この点は、「多様な動きをつくる」「動きを高める」ことを目的とする日本の「体づくり運動」（文部科学省，2018）と高い親和性を持ち、教育的にも大きな可能性を有している。

すでにヨーロッパでは教育現場への導入も進んでおり、特にデンマークにおいては専門施設や教育機関の整備が進み、学校体育の一環として定着している（松川，2019）一方で、パルクールを適切に実践するためには、初心者が無理な技に挑戦するリスクを避けるための自己理解と安全意識の涵養、さらに指導者の適切な支援が不可欠であるとされている（ベリンダ，2019）。近年、日本でも一部の教育機関において授業実践が報告されているものの（廣瀬・黒谷，2025）、依然として危険性への懸念は根強く（長谷川，2024）、体系的な指導モデルを構築することが課題となっている。

そこで本研究では、将来的な初等中等教育への展開を見据え、教員養成大学において全15回のパルクール授業を設計・実践した。対象は初等教育課程1年次の学生28名であり、「基礎的動作の体得」「競技型模擬大会」「屋外実践」「動画編集を通じた再認識活動」といった多面的な学習内容及び方法で授業を構成した。

■ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:49 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1709-10] 体育科教育学／口頭発表⑦

座長:山口 孝治(佛教大学)

11:35 ~ 11:49

[11教-口-24] 静水での小児の落水に関する実験的研究

*栗栖 茜¹、藤田 恵理²、横澤 喜久子³、平工 志穂³、天野 勝弘⁴、中島 弘毅⁵ (1. 日本赤十字看護大学附属災害救護研究所、2. 帝京大学、3. 東京女子大学、4. スポーツパフォーマンスデザイン⁷、5. 松本大学)

背景：日本では毎年多くの人々が水難事故で命を落としており、特に子どもの溺死が不慮の事故の上位を占めている。水中での動きや溺水のメカニズムを解明することは、事故防止や救助法の向上に不可欠である。しかし、これまでの研究は、水中での具体的な動態について十分なデータは存在しない。目的：本研究の目的は、5歳児相当の体格を持つダミーを用いて、水中での動態を静水環境で測定し、溺水時の沈降や浮上のメカニズムを明らかにすることである。これにより溺水事故時の対策や指導法に科学的根拠を提供することを目指す。方法：屋外プールを使って静水での小児の落水に関する実験を、5歳児に代わるダミーを用いておこなった。ダミーとしては比重1前後に調整した20リットルポリタンクを用いた。ダミーの水中での位置を正確に測定するために小型で軽量な水深計を用いた。結果：浮力材を装着せずに比重を人の呼気状態と同じ1.05に調整して水面でリリースしたダミーはゆっくりと水底に沈むことが立証された。また、同じダミーに0.5kgf、1kgf、2kgfの空のペットボトル、4kgfのライフジャケットをそれぞれ装着して高度12cm、45cm、65cmより水面に落下させると全例、浮力材を装着しているにもかかわらず着水直後に水中に沈んだ。浮力が少ないほど水面から深く沈み水面下に沈んでいる時間も長かったが、いずれにしても水面に浮上することが立証された。0.5kgfという少ない浮力でも水面に浮上するまでより長い時間がかかるものの水面まで浮上することができた。考察：今回の実験では0.5kgfの浮力を装着したダミーは65cmの高度から落水しても水面に浮上することができた。したがって、落水した場合でも衣服を着ている場合には、一度は水中にもぐるものの必ず水面に浮上することが予想される。今後は着衣による浮力の大きさと持続時間を実験で明らかにする必要がある。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1711-14] 体育科教育学／口頭発表⑧

座長:山本 理人(北海道教育大学)

13:30 ~ 13:44

[11教-口-25]

共同体感覚を醸成する小学校体育の実践報告

年齢差包摂プロジェクト学習によるコンヴィヴィアルな関係の構築・促進

*梅澤 秋久¹、村瀬 浩二²、石塚 諭³、平田 智也⁴、山内 朋也⁵、久保 賢太郎⁶、中村 有希⁷ (1. 横浜国立大学、2. 和歌山大学、3. 宇都宮大学、4. 海老名市教育委員会、5. 日本文化大学、6. 玉川大学、7. 九州共立大学)

13:45 ~ 13:59

[11教-口-26]

武道の一般理論に基礎付けられた剣道授業の学習指導試論

*千葉 寛樹¹、鈴木 理¹ (1. 日本大学)

14:00 ~ 14:14

[11教-口-27]

性別にみた「知識及び技能体育授業評価尺度」得点の比較

小学校高学年から高等学校までの児童生徒を対象にして

*高橋 野人^{1,7}、大友 智²、藤井 一貴^{3,7}、西田 順一⁴、深田 直宏⁵、吉井 健人³、甲斐 義一^{6,7} (1. 桐生市立新里東小学校、2. 立命館大学、3. 育英大学、4. 近畿大学、5. びわこ学院大学、6. 大分県教育委員会、7. 立命館大学大学院)

14:15 ~ 14:29

[11教-口-28]

小学校低学年を対象とした形成的授業評価法の開発

同一項目に対する児童と教師の評価値の比較を元に

*七澤 朱音¹ (1. 学習院大学大学院・千葉大学)

■ 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1711-14] 体育科教育学／口頭発表⑧

座長:山本 理人(北海道教育大学)

13:30 ~ 13:44

[11教-口-25] 共同体感覚を醸成する小学校体育の実践報告

年齢差包摂プロジェクト学習によるコンヴィヴィアルな関係の構築・促進

*梅澤 秋久¹、村瀬 浩二²、石塚 諭³、平田 智也⁴、山内 朋也⁵、久保 賢太郎⁶、中村 有希⁷ (1. 横浜国立大学、2. 和歌山大学、3. 宇都宮大学、4. 海老名市教育委員会、5. 日本文化大学、6. 玉川大学、7. 九州共立大学)

次期学習指導要領改訂に向けた論点整理（文科省、2024）では、学校の本質的役割において福祉的な側面を重視している。すなわち「多様な他者に出会い、共感や軋轢の中で自己を知り、高めるとともに、他者とどのように共存するか（中略）子供たち相互の関係で学ぶ貴重な場」であり「包摂的で、他者への信頼に基づく民主的・公正な社会を実現していく基盤として一層重要」であると。UNESCO教育勧告（2023）においても学校の福祉的役割が重視されている。同教育勧告では、変革的で質の高い教育に向けた14の指導原則が掲げられており、その内容にはインクルーシブやウェルビーイング、ジェンダー等、包摂性や衡平性に関する文言が繰り返し登場する。これからの衡平な体育・スポーツ教育においてキーワードとなる指導原則の内容はコンヴィヴィアルな関係だと考えられる。単なる友好を超えた関係性について、指導原則の(d)では「コンヴィヴィアルな関係を高めるために、互惠性及び思いやりを培う」（一部抜粋）と述べられている。

本発表では、コンヴィヴィアルな関係構築を目指した小学校体育実践の事例を報告する。具体的には、小学校5年生が小学校2年生と共にタグラグビーを楽しむための「年齢差包摂のためのアダプテーションルール創造」のプロジェクト学習である。他方、5年生の学級内には前年度まで体育に参加できない児童が在籍していた。同児童は自身の経験をもとに技能差を包摂するアダプテーションルールを提案する。クラスメイトや教師は共感共苦の関わりを繰り返す。多様な他者を受容する学習ムードの中で全ての児童の居場所感（今のウェルビーイング）の醸成に繋がっていると解釈された。

コンヴィヴィアルを1970年代に提唱したイリイチは、脱学校論（1977）を提唱している。福祉的役割を踏襲した学校教育であればコンヴィヴィアルな関係を高められるのではないだろうか。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1711-14] 体育科教育学／口頭発表⑧

座長:山本 理人(北海道教育大学)

13:45 ~ 13:59

[11教-口-26] 武道の一般理論に基礎付けられた剣道授業の学習指導試論*千葉 寛樹¹、鈴木 理¹ (1. 日本大学)

本研究は、保健体育科「武道」領域における剣道指導を対象に、個別技術の習得を越えて、身体的関係性の構築を中核とする授業デザインの理論的基盤を検討するものである。近年の学習指導要領では、各運動領域に通底する原理の学習が求められているが、現実の授業ではなお個別種目の「動き方」の伝達・習得に執心する傾向が強く、剣道においても「面打ち」や「小手打ち」といった動作の再現が目的化されるケースが多い。しかし、武道は元来、自己と他者との間に生起する応答的・状況的な関係性の構築を本質とする文化的身体技法である。すなわち、対峙する相手とせめぎ合う場としての「中間局面」において発動する駆け引きや制御こそが、武道の核心であると考えられる。したがって、この局面における身体的やり取りの意味理解がなければ、有効打突の意味もまた成立し得ない。また、武道史的にみれば、殺傷術としての武術は、江戸期以降、他者との応答的在り方を軸とした内面化と精神性の体系へと変容した。その過程で、武道は単に暴力を否定するのではなく、人間的・倫理的に制御する「暴力の媒介装置」として再機能化された。この変容は、武道を単なる競技的技術に還元せず、身体の倫理的構造として捉える視点を準備する。本研究は、剣道を個別種目としてではなく、対人的緊張関係の中で自己を調整し、他者との共振のうちに「応答的自己」を構築する身体実践として捉え直す。体育授業においては、こうした応答性と間主観的構造に根ざす学びを設計原理とすることで、武道領域に固有の指導内容が構成される。今後は、種目主義を超克し、関係論的・身体論的な一般理論の確立を視野に入れた実践的知見の蓄積が課題となる。

2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1711-14] 体育科教育学／口頭発表⑧

座長:山本 理人(北海道教育大学)

14:00 ~ 14:14

[11教-口-27] 性別にみた「知識及び技能体育授業評価尺度」得点の比較

小学校高学年から高等学校までの児童生徒を対象にして

*高橋 野人^{1,7}、大友 智²、藤井 一貴^{3,7}、西田 順一⁴、深田 直宏⁵、吉井 健人³、甲斐 義一^{6,7} (1. 桐生市立新里東小学校、2. 立命館大学、3. 育英大学、4. 近畿大学、5. びわこ学院大学、6. 大分県教育委員会、7. 立命館大学大学院)

文部科学省は、小・中・高等学校学習指導要領(2017a、2017b、2018)において、育成を目指す資質・能力として3つの柱を示した。その1つに、「知識及び技能」(以下、知技)の習得を掲げた。Mckenzi et. al.(2006)及びViciania et. al.(2017)は、体育授業の運動量に関して、女子生徒は男子生徒よりも中強度から高強度の身体活動に費やした授業時間の割合が少ないことを報告した。またスポーツ庁(2024)は、体育授業以外で、運動やスポーツに取り組む時間及び地域のスポーツクラブでの活動回数は、女子が男子よりも少ないことを報告した。これらから、体育授業中及び体育授業以外の時間において、女子児童は運動に関わる時間が男子児童よりも少ないことが明らかであるが、そのため、女子は男子よりも運動技能が低いのではないかと考えられる。

以上から、本研究の目的は、「知識及び技能体育授業評価尺度」(以下、知技尺度)得点に関する児童生徒の性別による差異を明らかにすることであった。公立小学校5校、公立中学校3校、及び、公立高等学校3校の計990名(男子463名、女子527名)の児童生徒を対象として、2021年6-7月に「知技尺度」(藤井ほか、2024)による質問紙調査を実施した。対象者を小学5・6年、中学1・2年、中学3年・高1年、及び、高2・3年の4つに区分し、性差による平均得点についてMann-WhitneyのU検定を行った。小学5・6年では、性別による有意差が見られなかった。中学1・2年では「運動の知識」因子、中学1・2年では「運動の安全」因子、中学3年・高1年では「運動・体力の知識」因子、並びに、高2・3年では「運動の技能」、「体育の見方・考え方」、及び、「運動・安全の知識」因子の3因子に加え、総得点において、女子は男子よりも有意に低い値を示した。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育科教育学

📅 2025年8月29日(金) 13:30 ~ 14:29 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[3a1711-14] 体育科教育学／口頭発表⑧

座長:山本 理人(北海道教育大学)

14:15 ~ 14:29

[11教-口-28] 小学校低学年を対象とした形成的授業評価法の開発
同一項目に対する児童と教師の評価値の比較を元に*七澤 朱音¹ (1. 学習院大学大学院・千葉大学)

体育授業の単元中の学習成果を見取る「形成的授業評価」で、低学年児童を対象とした学術研究は稀少である。これは、認知発達過程の途上にある低学年児童には、認知的負荷や記憶容量の関係から評価研究で不可欠な「評価の真実性」等の検証が難しいからだと考えられる。しかし国語科では、視覚情報を用いることで低学年でも自身の読みに対するメタ認知的活動が可能になることが示されている（村田、2022）。この成果を応用し、低学年段階から体育授業を評価することができれば、全学年を通して児童が自身の学びを把握し調整する資質・能力の向上につながる考える。本研究では「低学年児童対象の形成的授業評価票」（七澤、2024）を用いて授業実践を行い、同一尺度に対して行った児童と教師の評価値を比較分析することにより児童の評価の「真実性」を検討すること、さらに教師の立場から見た「実行可能性」を検討することを目的とする。

授業は令和6年10月から令和7年3月まで実施した計8単元で、調査対象はB小学校第一学年2組（各23名）、第二学年2組（各26名）、計4組（計98名）と教師4名である。評価尺度は、現行の「形成的授業評価」（小学校中学年以上対象、学術的成果が認められている方法）のLikert Scale（三件）と、医療現場で五歳から利用可能とされるVisual Analog Scale（VAS変法）を用いて、授業終了直後に評価を行った。児童と教師の評価値を分析した結果、LSでは両者ともにほぼ全項目の解答が「はい」に集まる傾向が認められた。一方、VASでは両者ともに項目間の評価値にばらつきが見られ、両者の評価値の変容が単元を通して類似していく傾向が明らかになった。「実行可能性」については、両尺度とも調査期間が長期化すると児童の興味が低下する傾向があること、さらに教師間で捉え方が異なることが明らかになった。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：測定評価

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1802-05] 測定評価／口頭発表①

座長:小椋 優作(中部学院大学短期大学部)

10:10 ~ 10:24

[08測-口-01]

BIA法によって測定された一般大学生の体組成の現状

*川端 悠¹、小笠原 佑衣¹、吉井 泉¹、三宅 孝昭¹ (1. 大阪公立大学 都市健康・スポーツ研究センター)

10:25 ~ 10:39

[08測-口-02]

片上肢前腕部位に障害のある男性に対するOne-arm push-up テストの信頼性・妥当性の検証

*瀬川 海¹、金田 和輝²、松田 繁樹³ (1. 立命館大学共通教育推進機構、2. 京都先端科学大学健康医療学部、3. 龍谷大学政策学部)

10:40 ~ 10:54

[08測-口-03]

ジュニア期の陸上競技100m走におけるスプリント能力とプライオメトリクスパフォーマンスとの関係

*渡邊 静空¹、小笠原 大智¹、安 妮¹、小林 秀紹¹ (1. 札幌国際大学)

10:55 ~ 11:09

[08測-口-04]

ニューラルネットワークによる幼児の遊びの性差

*青柳 領

専門領域別研究発表 | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1802-05] 測定評価／口頭発表①

座長:小椋 優作(中部学院大学短期大学部)

10:10 ~ 10:24

[08測-口-01] BIA法によって測定された一般大学生の体組成の現状*川端 悠¹、小笠原 佑衣¹、吉井 泉¹、三宅 孝昭¹ (1. 大阪公立大学 都市健康・スポーツ研究センター)

【背景・目的】我々は、これまで一般大学生の体力と体組成に関する基礎データを収集し、健康の維持・増進、そして効果的な運動指導や栄養教育プログラムの開発に資する知見の蓄積を目指してきた。近年では、若年層における不適切なダイエットや生活習慣の乱れに起因する低栄養、あるいは「隠れ肥満」といった問題が指摘されている。本研究ではBIA法を活用し、一般大学生の体組成の様相を詳細に明らかにすることを目的とした。【方法】対象は大阪府のO大学に通う1年生（男子1,443名、女子722名）であった。測定項目は年齢、身長、体重、除脂肪量および脂肪量（全身、上肢、体幹、下肢の除脂肪体重、脂肪体重）であった。測定にはInBody470を用いた。測定されたデータは、t検定によって男女比較を実施し、相関係数の差の検定によって、上肢、体幹、下肢の部位別除脂肪量の関係を検討した。統計学的仮説検証における有意水準は5%に設定された。【結果】除脂肪量と脂肪量には有意な性差が部位別に認められ、部位別には上肢と体幹の除脂肪量の関係が男女ともに一番強かった。【考察】上肢と体幹の除脂肪量の関係が強い相関を示したことは、両者の機能的な連動性が深く関与している可能性を示唆しており、この点についてはさらなる詳細な検討を要する新たな研究課題である。本研究で用いたBIA法は多周波数帯を用いることで、部位別の体組成が測定可能であり、その信頼性が先行研究で報告されている。今回の研究結果は、大学生の体組成特性を理解し、彼らの健康増進に向けた個別のアプローチを検討する上での基礎データを提供するものとする。

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1802-05] 測定評価／口頭発表①

座長:小椋 優作(中部学院大学短期大学部)

10:25 ~ 10:39

[08測-口-02] 片上肢前腕部位に障害のある男性に対するOne-arm push-up テストの信頼性・妥当性の検証

*瀬川 海¹、金田 和輝²、松田 繁樹³ (1. 立命館大学共通教育推進機構、2. 京都先端科学大学健康医療学部、3. 龍谷大学政策学部)

目的：本研究の目的は、片上肢前腕部に障害のある男性を対象にOne-arm push-upテストの信頼性および妥当性を検証することであった。

方法：対象は前腕に障害のある男性8名であった。One-arm push-upテストは、障害側（非利き腕）の肘をヨガブロックに置き、非障害側（利き腕）を2秒に1回のペースで肘を曲げ伸ばす方法を用いた。2試行実施し、最大値を代表値として分析に用いた。2試行間の級内相関係数（ICC（1、1））により信頼性を検証した。また利き腕の上腕三頭筋、大胸筋、腹直筋の表面筋電図（EMG）を計測し、%MVCを算出した。EMG解析区間は最初と最後の1回を除いた前半10回と後半10回とし、前後半の%MVC比較により妥当性を検証した。さらに質問紙調査を用いて主観的疲労度（5段階評価）とテストの安全性を評価した。

結果：1回目 39.1 ± 8.9 回、2回目 41.5 ± 13.6 回であり、ICCは0.83であった。EMG解析では上腕三頭筋、大胸筋、腹直筋において後半10回の%MVCが有意に高かった。さらに、主観的疲労度は胸部 3.5 ± 1.2 、体幹 3.4 ± 0.7 、脚部 2.1 ± 1.1 、利き腕 3.6 ± 1.4 であった。また、身体的苦痛や不快感は確認されなかった。

考察：障害のない人を対象に行った瀬川ら（2021）と同様に本テストは信頼性が良好であった。またAlizadeh et al.（2020）が示すように、後半10回のEMGの増加は筋疲労による運動単位が動員され筋活動量が増えた結果であると考えられる。さらに上腕三頭筋、大胸筋、腹直筋に対する主観的な疲労が確認され、本テストは動的な筋持久力評価として妥当と考えられた。以上より、片上肢前腕部に障害のある男性に対するOne-arm push-upテストは信頼性および妥当性が高く、また安全性も有する筋持久力テストであることが示された。

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 ■ 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1802-05] 測定評価／口頭発表①

座長:小椋 優作(中部学院大学短期大学部)

10:40 ~ 10:54

[08測-口-03] ジュニア期の陸上競技100m走におけるスプリント能力とプライオメトリクスパフォーマンスとの関係*渡邊 静空¹、小笠原 大智¹、安 妮¹、小林 秀紹¹ (1. 札幌国際大学)

本研究は発育発達期のジュニア選手における100m走のピッチ、ストライド、疾走速度、プライオメトリクスパフォーマンスの関係を明らかにすることを目的とした。

被験者は陸上競技を行う小学5年生から中学3年生24名であった。測定項目は100m走タイム、メディシンボール前・後投(0.6kg、2kg)、リバウンドジャンプ、立五段跳、両脚五段跳の6項目であった。

スプリント能力に基づく上位群中位群下位群の3群間の一要因分散分析、及び多重比較検定の結果、100m走のストライドと疾走速度では全区間において上位群と下位群の間に有意な差が認められた。メディシンボール前・後投では、下位群中位群より上位群の順にパフォーマンスが有意に高かった。立五段跳と両脚五段跳では、下位群より中位群上位群でパフォーマンスが有意に高かった。100m走ではストライド、疾走速度、パワーとの間に中程度以上の相関係数が認められ、身長の影響を除いた偏相関係数においても同様の傾向が確認された。

スプリント走ではストライドと疾走速度間の関係は高く、成人同様ジュニア期においてもストライドはスプリント能力に関与すると推測される。メディシンボール前投げは、スプリント走で動員される主要筋群と同様な筋発揮であり、パワー発揮がストライド長の確保と関連すると推測される。メディシンボールの重量に関しては、ストライドと疾走速度の関係が高かった2kgがジュニア期のトレーニングに適していると推察される。さらにリバウンドジャンプのパフォーマンスを規定する体力因子では、短時間で大きな筋出力を発揮するSSCの能力が重要であり、それを高めるトレーニングの重要性が示唆される。立五段跳、両脚五段跳においても、疾走時に身体を前方へ移動させるキック時の筋発揮が行われ、疾走速度を決定する要因であるピッチやストライドの増大に影響を及ぼすと推測される。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：測定評価

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:09 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1802-05] 測定評価／口頭発表①

座長:小椋 優作(中部学院大学短期大学部)

10:55 ~ 11:09

[08測-口-04] ニューラルネットワークによる幼児の遊びの性差

*青柳 領

【緒言】幼児の遊びは多岐に渡るが、決して無作為に行われることはなく、幼児の特性に応じて行われ、そこには性差が存在することも考えられる。そこで、本研究では幼児の遊びの性差についてニューラルネットワークを用いて検討する。【研究方法】日本のF市内の幼稚園児の保護者123名を対象に自分の子供が好んでしている遊びについて自由記述によるアンケート調査を行った。表現は違うが実質意味する内容が同じ場合は表現を統一した後、さらに535個を①おりがみやブロックなどの工作②すべり台、砂遊び、鉄棒などの公園遊び③ままごとやヒーローごっこなどのごっこ遊び④鬼ごっこなどの戸外遊び⑤野球やサッカーなどのボール遊び⑥お絵かきやぬり絵⑦自転車⑧テレビやテレビゲーム⑨絵本⑩オセロやカードゲーム⑪ミニカー遊び⑫歌、ピアノ、ダンス⑬人形遊び⑭プールや水遊び⑮虫や花採取の15種に分類した。そして、その頻度を用いて、隠れ層が1層からなり、出力層を男女にしたニューラルネットワークを用いて予測した。【結果】誤判別率は、隠れ層のニューロンの数が2個では13.82%、3個では9.76%、4個では8.13%と単調的に数の増加とともに単調に減少したが、3個から4個への減少率は2個から3個への減少率と比較すると著しい改善は見られず、4個の隠れ層から見られる「重み」には特徴的な値が見られなかったため、3個解を採用した。特徴を示す隠れ層の「重み」には男児につながるニューロンには⑪ミニカー遊び(5.99)や虫や花採取(5.16)が大きな値を示し、女児につながるニューロンには⑬人形遊び(8.24)、⑫歌、ピアノ、ダンス(5.62)、③ごっこ遊び(4.07)が大きな値を示し、男児は活発で好奇心旺盛なので、体を動かすことや新しいものを発見することを好むのに対して、女児は音楽に合わせて踊ったり、歌ったりすることを好む傾向が見られた。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：測定評価

📅 2025年8月29日(金) 14:20 ~ 15:19 📍 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1806-09] 測定評価／口頭発表②

座長:村山 敏夫(新潟大学)

14:20 ~ 14:34

[08測-口-05]

高齢者ドライバーにおける認知機能と運転自信度が主観的な運転自己評価に及ぼす影響

*山次 俊介¹、山田 孝禎¹、杉浦 宏季²、横谷 智久² (1. 福井大学、2. 福井工業大学)

14:35 ~ 14:49

[08測-口-06]

独りよりも友人とのテニスの方が実行機能は向上する

*高橋 信二¹ (1. 東北学院大学)

14:50 ~ 15:04

[08測-口-07]

努力度に基づく力発揮の個人差と現在の運動習慣との関係の検討

*菅谷 亮介¹、林 容市^{2,1} (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学文学部心理学科)

15:05 ~ 15:19

[08測-口-08]

ダンス作品鑑賞者の注視に関する研究

*池田 恵子¹ (1. 新潟医療福祉大学)

2025年8月29日(金) 14:20 ~ 15:19 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1806-09] 測定評価／口頭発表②

座長:村山 敏夫(新潟大学)

14:20 ~ 14:34

[08測-口-05] 高齢者ドライバーにおける認知機能と運転自信度が主観的な運転自己評価に及ぼす影響*山次 俊介¹、山田 孝禎¹、杉浦 宏季²、横谷 智久² (1. 福井大学、2. 福井工業大学)

高齢者ドライバーの簡易な運転技能評価として主観に基づく診断票が利用されている。我々はハンドル操作とアクセル・ブレーキ操作による制動を踏まえたDual-task test(DT)を開発し、高齢者ドライバーの安全運転能力の評価を試みているが、DTパフォーマンスと高齢者の自己運転評価との間に認知機能の低下に伴う過大評価によるバイアスが窺えた。本研究では65～90歳の高齢者ドライバー385名(男性111名)を対象として認知機能と運転自信度によって自己運転評価に及ぼす影響について、実測値及び主観的身体機能との関連性を踏まえて検証することを目的とした。認知機能(基準値: MoCA-J得点21点)と運転自信度(安全運転に自信がある/ない)でクロスカテゴリを作成した(認知機能/運転自信度: 低/有群、低/無群、高/有群、高/無群)。各群における男性の割合はそれぞれ33.3%、20.0%、26.6%、28.1%であった。「運転中に危険を感じたか」、「周囲から運転を控えるよう忠告されたか」、「過去3年間に交通事故を経験したか」はいずれも低/有群が「いいえ」と回答する割合が高く、低/無群と高/無群より有意に高かった。また、運転能力診断12項目の得点について年齢を共変量とした群と性の二要因分散分析の結果、低/有群と高/有群が低/無群と高/無群より有意に優れていた。また、主観的な身体機能としてADL、易転倒性、LSAも同様に低/有群と高/有群が有意に優れていた。一方、握力、開眼片足立ち、10m歩行、逆順ステップ、敏捷性ステップの実測値項目の主成分得点及びハンドル操作とアクセル・ブレーキ操作による制動を踏まえたDual-task test(DT)では、低/有群と低/無群が高/有群と高/無群より有意に劣っていた。以上より、低/有群は自信の運転を過大評価する傾向にあること、及び男性にその傾向が多いことが窺えた。

2025年8月29日(金) 14:20 ~ 15:19 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1806-09] 測定評価／口頭発表②

座長:村山 敏夫(新潟大学)

14:35 ~ 14:49

[08測-口-06] 独りよりも友人とのテニスの方が実行機能は向上する*高橋 信二¹ (1. 東北学院大学)

一過性運動の高次の認知機能である実行機能に対する効果はこれまでに数多く検証されている。運動強度、実施時間など一の量的特性は明らかになってきているのに対し、運動の種類などの質的特性についてはまだ不明な点が多いが、オープンスキル運動がクローズドスキル運動よりも実行機能を向上させるという報告が増えている。オープンスキル運動は、対戦相手やボールなどの動きに対応して運動を行う視覚運動と相手の表情や動作を観察・理解するという社会相互作用という2つの特性を有する。本研究は、視覚運動と社会相互作用を比較し、オープンスキル運動の実行機能に対する効果を分析した。対象者は男子大学生24名であった。対象者は、対人でショートテニスのラリーを行う条件（ラリー条件）、一人で壁打ちを行う条件（壁打ち条件）、トレッドミル上での歩行（統制条件）を行った。各条件の実施順はカウンターバランスにより相殺された。各条件の運動強度は46.1%VO₂peakで同等であった（ $p=0.359$ ）。実行機能を評価するために、対象者は各条件の前後でストループ課題（中立課題，不一致課題）を行い、各課題の反応時間を記録した。反応時間は、条件（3水準）×時間（2水準）×課題（2水準）および各交互作用を独立変数とする混合モデルにより解析された。その結果、条件×時間×課題の交互作用に有意性が確認され（ $F(2, 23)=3.7$, $p=0.040$ ）、ラリー条件は実行機能を求められる不一致課題の反応時間を統制条件よりも有意に短縮させた（ $p=0.021$ ）。一方、壁打ち条件と統制条件間に有意な違いは認められなかった（ $p=0.916$ ）。これらの結果は、オープンスキル運動の実行機能に対する効果は、視覚運動ではなく社会的相互作用によりもたらせられることを示し、誰かと行う運動の効果を示唆している。

■ 2025年8月29日(金) 14:20 ~ 15:19 ■ 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1806-09] 測定評価／口頭発表②

座長:村山 敏夫(新潟大学)

14:50 ~ 15:04

[08測-口-07] 努力度に基づく力発揮の個人差と現在の運動習慣との関係の検討*菅谷 亮介¹、林 容市^{2,1} (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学文学部心理学科)

【背景】合目的な力発揮を行うには、目標とする出力（目標値）に対して実際の出力（測定値）を一致させる必要がある。この一致度を高めるうえで重要な役割を果たすのが「努力度」である。努力度とは、動作発揮時に生じる主観的な感覚であり、実際の力発揮はこの感覚に基づいて行われる。しかし、努力度に基づく力発揮の精度には対象者間でばらつきがみられ、その要因として、偶然誤差に加え、努力度に基づく力発揮の巧拙における個人差（以下、「精度の個人差」とする）が示唆されている。努力度の見積もりには、力発揮の準備や開始に関与する脳領域（例：補足運動野）の活動が関連し、生成される努力度の大小は過去や現在の運動経験に応じて可塑的に変化する可能性がある。したがって、運動経験の差異が精度の個人差を生む一因と推察される。そこで本研究では、一致度のばらつきにおける精度の個人差の影響を統計的に明らかにし、その個人差に対する運動習慣の影響を分析した。【方法】青年男性30名（ 23.9 ± 2.8 歳）を対象に、最大握力の25%、50%、75%を目標値とした握力課題を実施させた。分析1では目標値と測定値との差の絶対値（%）を従属変数、目標値（3水準）を独立変数、精度の個人差を変量効果とした混合効果モデルを構築した。分析2では分析1に運動習慣（あり／なし）を加えてモデルを再構築した。各モデルにおける一致度のばらつきに対する精度の個人差の寄与割合をICCで評価した。【結果】分析1では、精度の個人差が一致度のばらつきの約44%を説明していた。分析2では、精度の個人差が約41%を説明し、運動習慣がこの個人差を説明する割合は約3%であった。【結論】目標値と測定値の一致度のばらつきの約半分は、精度の個人差に起因していたが、運動習慣はこの個人差に大きな影響を及ぼさない可能性が示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：測定評価

⌚ 2025年8月29日(金) 14:20 ~ 15:19 🏢 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1806-09] 測定評価／口頭発表②

座長:村山 敏夫(新潟大学)

15:05 ~ 15:19

[08測-口-08] ダンス作品鑑賞者の注視に関する研究

*池田 恵子¹ (1. 新潟医療福祉大学)

ダンス作品は、テーマやタイトル、構成、振付、音楽、照明、衣裳、小道具等、多くの要素が複雑に関わり合って創作される。鑑賞者によってさまざまな解釈ができることがダンスの魅力でありながらも、コンクールや公演等で披露した際に、作者が意図した内容が実際に鑑賞者に届いているかどうかを測ることは困難とされている。

本研究は、ダンス作品を鑑賞している際の各エリアの注視時間について、ダンス熟練者群とダンス非熟練者群との違いを明らかにすることを目的として行った。測定時には、ウェアブル型アイトラッカー Tobii Pro Glasses3（トビーテクノロジー社製）を装着させ、両群に対して同じダンス作品を鑑賞させた。アイトラッカーから抽出した映像のエリア分けを行い、各エリアの注視時間を算出した。その結果、両群における各エリアの注視時間について、有意な差はみられなかった。

本研究では、1作品のみの分析に留まったが、今後さらに作品構成や振りの質感および強弱の異なるダンス作品を用いて測定し、鑑賞者が注視する点の傾向について整理していく。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：測定評価

📅 2025年8月29日(金) 15:30 ~ 16:14 📍 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1810-12] 測定評価／口頭発表③

座長:青木 宏樹(福井工業高等専門学校)

15:30 ~ 15:44

[08測-口-09]

レジスタンストレーニングにおけるアームカール時の肘関節可動域の違いが筋力に及ぼす影響

*小笠原 大智¹、安 妮¹、小林 秀紹 (1. 札幌国際大学)

15:45 ~ 15:59

[08測-口-10]

一般中高年者及び中高年パワーリフターの身体的特性の比較

*藤瀬 武彦¹ (1. 新潟国際情報大学)

16:00 ~ 16:14

[08測-口-11]

立ち幅跳び能力・垂直跳び能力・リバウンドジャンプ能力の関係性に関する研究

*原 幸輝¹ (1. 広島文化学園大学大学院 人間健康学研究科)

2025年8月29日(金) 15:30 ~ 16:14 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1810-12] 測定評価／口頭発表③

座長:青木 宏樹(福井工業高等専門学校)

15:30 ~ 15:44

[08測-口-09] レジスタンストレーニングにおけるアームカール時の肘関節可動域の違いが筋力に及ぼす影響*小笠原 大智¹、安 妮¹、小林 秀紹 (1. 札幌国際大学)

レジスタンストレーニングにおいて、1RM向上には関節可動域の影響が知られている。また、スティッキングポイントを含む可動域でのトレーニングが筋力向上に大きく貢献することが明らかになっている。しかし、異なる関節可動域による1RMを比較した研究は十分検討されていない。本研究は、アームカールにおけるスティッキングポイントを含む部分的可動域と全可動域のいずれが1RM向上に貢献するかについて検討することを目的とした。

被験者は男子大学生9名であった。本研究では、ダンベルプリーチャーカールにおける可動域について0~68°を初期部分可動域、0~135°を全可動域と設定した。まず、ダンベルプリーチャーカールの1RMを全可動域で、トレーニング介入前と介入後に実施した。のちに、ダンベルプリーチャーカールを4週間、週に2回の頻度で実施し、1回あたり4セットのトレーニングを行った。一方の腕を初期部分可動域、もう一方の腕を全可動域とし、挙上できなくなるまで行った。トレーニングする腕は毎回入れ替え、休息は3分とした。

初期部分可動域と全可動域における介入前および介入後の1RMの平均値の差を対応のあるt検定を行い、さらに効果量を算出した。

その結果、初期部分可動域と全可動域のいずれにおいても介入前と介入後の間の1RMの平均値に有意な差が認められ、効果量においても大きな効果が認められた。

初期部分可動域と全可動域の双方において、介入前と介入後の間の1RMの平均値に有意な差が認められたことからスティッキングポイントは筋力の向上に貢献すると考えられる。また、先行研究では筋力向上にストレッチポジションが関係していることが報告されている。初期可動域、全可動域にはストレッチポジションが含まれていたため、筋力の向上にはトレーニングする際の関節可動域にストレッチポジションが含まれている必要性も示唆される。

■ 2025年8月29日(金) 15:30 ~ 16:14 ■ 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1810-12] 測定評価／口頭発表③

座長:青木 宏樹(福井工業高等専門学校)

15:45 ~ 15:59

[08測-口-10] 一般中高年者及び中高年パワーリフターの身体的特性の比較*藤瀬 武彦¹ (1. 新潟国際情報大学)

本研究では、一般中高年者と中高年パワーリフターの身体的特性を比較することによって長年にわたるウェイトトレーニング (WT) の効果を検討することが目的であった。被験者は一般中高年男性11名 (56.6±10.0歳、C群) と中高年男性パワーリフター7名 (54.1±10.0歳：競技歴25.3±9.0年、PL群) であった。PL群の公認最高記録はトータル重量 (スクワット、ベンチプレス、デッドリフト) が543±79kgであった。測定項目は、身体組成がTANITA社製のインナースキャンRD-803Lを用い、握力が竹井機器社製握力計を用いた。身長、体重、及び体脂肪率はC群 (平均173cm、71kg、22.1%) とPL群 (平均170cm、83kg、26.1%) 間に有意差はなかったが、BMI (23.8と28.8kg/m²)、全身筋肉量 (51.1と58.2kg)、基礎代謝量 (1481と1751kcal)、推定骨量 (2.80と3.30kg)、SMI (8.05と9.84 kg/m²) には有意差が認められた。一方、握力 (左右の平均) はPL群 (47.4±6.3kg) がC群 (36.6±6.7kg) よりも有意に高値を示したが、体重当たりの握力 (C群が0.527±0.098kg/wt、PL群が0.565±0.067kg/wt) は両群間に有意差は認められなかった (p=0.5309)。パワーリフティングはWTの三大基本種目の合計重量を競う競技であり、PL群はこれらの種目を用いて長年トレーニングすることによって全身筋肉量や推定骨量等が増加したものと思われる。一方、PL群においてデッドリフトではおそらく受動握力を用いることから能動握力へのトレーニング効果は少なく、元々筋力が高かった者が競技を継続しているものと思われる。以上の結果から、中高年パワーリフターは長年WTを継続することによって高い筋肉量や骨量等を維持している可能性が示唆された。

⌚ 2025年8月29日(金) 15:30 ~ 16:14 🏢 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[3a1810-12] 測定評価／口頭発表③

座長:青木 宏樹(福井工業高等専門学校)

16:00 ~ 16:14

[08測-口-11] 立ち幅跳び能力・垂直跳び能力・リバウンドジャンプ能力の関係性に関する研究*原 幸輝¹ (1. 広島文化学園大学大学院 人間健康学研究科)

跳躍能力は、さまざまなスポーツにおいて重要とされている能力の一つである。また、速く走る、高く跳ぶなどのスポーツ動作において伸張-短縮サイクル(SSC)が必要となっている。これらの能力は、跳躍能力で括られていることが多いが、陸上競技での走高跳や走幅跳では、跳躍方向が、異なっているため一つの測定項目だけで跳躍能力のすべてを知ることは難しいのではないかと考える。したがって、本研究では、前方方向、垂直方向、リバウンドジャンプの3つ跳躍能力の関係について研究した。対象者は、スポーツ系学科に所属する男子大学生30名(平均年齢19.1歳)であった。課題は、立ち幅跳び、垂直跳び、リバウンドジャンプ(RJ)を行った。立ち幅跳びでは、両足で踏み切り、参加者にはできるだけ前方方向の遠くに跳ぶように教示した。垂直跳びでは、参加者にジャンプマット上でできるだけ高く跳ぶように教示した。RJでは、参加者にジャンプマット上で、5回連続で垂直飛びを行い、その際、できるだけ早く、高く跳ぶように教示した。また、5回の垂直飛びのなかで、最も高かった記録と5回の平均それぞれのリバウンドジャンプ指数(RSI)、跳躍高、接地時間を測定した。立ち幅跳びは、垂直飛び($r=0.86$)、RJ平均跳躍高($r=0.63$)、RJ最高跳躍高($r=0.65$)との間に強い正の相関があり、RSI平均値($r=0.45$)、RSI最大値($r=0.42$)との間には正の相関関係があった。垂直跳びは、RJ平均跳躍高($r=0.70$)、RJ最高跳躍高($r=0.74$)、RSI最大値($r=0.51$)、RSI平均値($r=0.50$)との間に強い正の相関があり、RSI平均値($r=0.50$)との間には正の相関があった。したがって、跳躍の方向による能力の差はほとんどないため、前方方向、垂直方向どちらかの能力が向上すればもう一方も向上していくことが示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a201-04] バイオメカニクス／口頭発表①

座長: 貴嶋 孝太(大阪体育大学)

9:00 ~ 9:14

[05バ-口-01]

男性円盤投競技者におけるリリースパラメータと投擲体力と技術の関係

*中町 真澄¹ (1. 新潟医療福祉大学)

9:15 ~ 9:29

[05バ-口-02]

男性棒高跳競技者の重心高に影響するキネマティクスの探索

*風間 未来¹ (1. 新潟医療福祉大学大)

9:30 ~ 9:44

[05バ-口-03]

曲り特性の異なるポールは跳躍中のポールの挙動に影響するのか？

曲率半径を観点としたポールのセグメントの最大湾曲位置による評価

*武田 理¹、植松 倫理¹、鈴木 啓太³、藤井 範久² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学、3. 名古屋学院大学)

9:45 ~ 9:59

[05バ-口-04]

系の運動方程式を活用した陸上ハンマー投げにおける自励系加速メカニズム解明の試み

*小池 関也¹ (1. 筑波大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a201-04] バイオメカニクス／口頭発表①

座長:貴嶋 孝太(大阪体育大学)

9:00 ~ 9:14

[05バ-口-01] 男性円盤投競技者におけるリリースパラメータと投擲体力と技術の関係*中町 真澄¹ (1. 新潟医療福祉大学)

円盤投は、サークル内で円盤を投擲しその飛距離を競う。円盤投の飛距離はリリースパラメータによって決まると言われている(前田ら、2019)。リリースパラメータの代表的な変数として、初速度、迎え角（投射角、姿勢角）が挙げられる。特に初速度に影響する要因として腕部獲得速度、体幹捻転動作などが重要だと報告されている(前田ら、2019)。また、体力要素との関係として、スナッチ、砲丸バック投げと飛距離との間に相関関係が認められている(前田ら、2018)。しかしながら、投擲体力との関係は、全身動作の分析にとどめられており、手指に至る詳細な動きとの関係は不明である。前田らの研究では、体組成、コントロールテストが飛距離に関係していたと報告しているが、手部に関連する最大筋力と飛距離との関係は不明である。対象者は、男子大学生の円盤投競技者9名とし、室内投擲場で実験を行った。全身26点にマーキングし、ハイスピードカメラ4台で最大努力による円盤投試技を撮影した。また、コントロールテストとして、ベンチ、スクワット、クリーン、スナッチ最大重量を聞き取り、体組成を計測した。加えて握力、手指把持力を測定した。現在分析中であり、最終的にはパフォーマンスレベル、リリースパラメータ（初速度、迎え角）との相関関係を調査し、重要な変数を報告する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a201-04] バイオメカニクス／口頭発表①

座長:貴嶋 孝太(大阪体育大学)

9:15 ~ 9:29

[05バ-口-02] 男性棒高跳競技者の重心高に影響するキネマティクスの探索*風間 未来¹ (1. 新潟医療福祉大学大)

棒高跳とは、ポールと呼ばれる長い棒を使って、一定の距離を助走し、ポールの反発力を使ってバーを越え、その高さを競う。これまでの研究では、助走速度や踏切速度、ポールの湾曲率などが棒高跳の跳躍高やパフォーマンスに関係すると述べられている（Gudeljら、2015、武田ほか、2007）。しかしながら、これらの動作分析は、重心のキネマティクスが中心であり、関節運動などの詳細なキネマティクスまでは検討されていない。指導現場において、踏切時の姿勢や、ポール操作の助言は多く、実態に即した動作分析は少ない。本研究では、男性棒高跳競技者の重心高に関係するキネマティクスを探索的に調査することを目的とし、パフォーマンス向上に役立つ知見を得る。屋外陸上競技場にて最大努力で棒高跳の試技を行い、3台のビデオカメラで撮影した。対象者は12名の17~24歳の青年男性とし、研究内容の同意を得たうえで実験を行った。三次元DLT法を用いて、全身25点とポール2点の空間座標を算出した。分析項目として、最終的には重心高を目的変数とし、体幹の傾き具合やリード脚の状態などを説明変数に、重回帰分析または相関分析を行う。現在分析中であり、発表時にはこれらの結果を紹介する。

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 ■ 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a201-04] バイオメカニクス／口頭発表①

座長:貴嶋 孝太(大阪体育大学)

9:30 ~ 9:44

**[05バ-口-03] 曲り特性の異なるポールは跳躍中のポールの挙動に影響するのか？
曲率半径を観点としたポールのセグメントの最大湾曲位置による評価***武田 理¹、植松 倫理¹、鈴木 啓太³、藤井 範久² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学、3. 名古屋学院大学)

棒高跳ポールに関する研究は湾曲量による評価が多く、ポールの曲り方、ポールのどの部位が大きく曲がっているかに関する研究はわずかしかなない。一方、指導現場では「下曲がり」など、曲り方に関連する言葉が使われており、曲り方もポールの評価では重要であろう。そこで本研究では、キックポイント(KP)の異なる5種類のポール(A:Mid, B: Low-Mid, C: Mid-high, D: Low, E: High)を製造し、跳躍中のポール挙動や使用感に影響するかを検討した。研究対象者1名、8歩の足合わせ跳躍を各ポール10試技(合計50試技)、モーションキャプチャを用いてポールに取り付けた反射マーカの座標値を計測し、ポールセグメントの曲率半径を求めた。踏切時重心水平速度($5.51\text{m/s} \pm 0.08$)、踏切角度($21.6^\circ \pm 0.42$)、ポール最大湾曲率($22.6\% \pm 0.26$)の3つのパラメータの2SD以内を分析対象試技とし、KPは研究対象者に開示せず、実験終了後にポールの使用感を順位付けした。ポール最大湾曲時の最大湾曲位置(下端0%-上側グリップ100%)は、Dが65-70%区間で最もポールの上端に近く、A,B,Cは50-55%でポール中央付近、Eは45-50%とやや下端側の湾曲が最も大きかった。次に湾曲の大きい位置は、A, Cは中央付近(45-50%)を示したが、B, Dは上端側(60-65%, 66-70%)が湾曲し、Eのみ、やや下端側(40-45%)の湾曲を示した。跳びやすさの主観評価は高評価順にB>A>C>D>Eの順番であった。D(KP: Low, 最大湾曲位置:ポール上端側)のようにKPの設定と最大湾曲位置は逆の傾向を示し、KPが最も高い位置のEが最も跳びにくい評価であった。ポールのKPは跳躍中のポール湾曲、挙動に影響すること、個人でKPの位置と使用感が異なる可能性が示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:59 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a201-04] バイオメカニクス／口頭発表①

座長:貴嶋 孝太(大阪体育大学)

9:45 ~ 9:59

[05バ-口-04] 系の運動方程式を活用した陸上ハンマー投げにおける自励系加速メカニズム解明の試み*小池 関也¹ (1. 筑波大学)

身体は多くの節が関節により連結された多体リンク機構であり、その動力学的な特性は極めて複雑である。ここで、スポーツ動作は、全身による高速・高加速な動作のため、その動作生成のしくみは複雑となり、一流の競技者がどのようなしくみを活用して、パフォーマンスを向上させているかを明らかにすることは急務の課題である。この課題に対して、対象とする系の運動方程式を活用した順動力学的貢献分析を行うと、パフォーマンスを表す物理量の生成に、どのような項目がどのように寄与しているかを詳細に明らかにできるため、動作生成のしくみ理解における大きな助けとなる。そこで、本研究では、未だ明らかにされていない陸上競技のハンマー投げ動作の自励系に関する動力学的な加速メカニズムについての理解のために、簡易モデルを用いたしくみ分析の結果についてより詳細な検討を行うことを目的とした。従来、上肢-ハンマー連成系を空間3リンク機構として3次元モデル化した対象に関する順動力学的貢献分析により、ターン局面におけるハンマーヘッドの加速には、遠心力やコリオリ力よりなる運動依存項の寄与が大きなこと、さらには、この運動依存項の生成要因を明らかにしたとしても、関節トルク、近位端加速度入力への寄与は小さく、一般化セグメント速度の初期状態量による自励系としての寄与が大きいことなどが分かっている (Koike et al., IUTAM2023)。しかしながらこの自励系特有の加速のしくみについては、空間機構の対象の複雑さから、いまだ明らかにされていない。そこで本研究では、この自励系の動力学的な特徴を抽出することを試みるために、ターン局面における上肢-ハンマー系を、傾斜平面上に拘束された平面3リンクモデルによって簡易化した対象に対して、順動力学的貢献分析を行うこととした。これにより、自励系における加速メカニズムを明らかにすることを試みている。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

📅 2025年8月29日(金) 10:05 ~ 10:49 🏢 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a205-07] バイオメカニクス／口頭発表②

座長:大高 千明(奈良女子大学)

10:05 ~ 10:19

[05バ-口-05]

自発的同調が高速度ランニングにおけるピッチに与える影響

*長谷 伸之助¹、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

10:20 ~ 10:34

[05バ-口-06]

高密度表面筋電図法を用いた外側広筋のMUNE算出における電極選択の影響

*井川 快斗¹、渡邊 航平¹ (1. 中京大学)

10:35 ~ 10:49

[05バ-口-07]

高齢者における運動神経の働きと骨格筋の量を反映する指標の関係

“神経筋チャート”を用いた個人が有するトレーニング能力の定量化・視覚化を目指して

*渡邊 航平¹、井川 快斗² (1. 中京大学、2. 中京大学大学院)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 10:05 ~ 10:49 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a205-07] バイオメカニクス／口頭発表②

座長:大高 千明(奈良女子大学)

10:05 ~ 10:19

[05バ-口-05] 自発的同調が高速度ランニングにおけるピッチに与える影響*長谷 伸之助¹、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

音楽を聴くことでランナーの意志に関わらずピッチが音楽のテンポに近づく「自発的同調」が低速度のランニングにおいて報告されている。一方、同様の現象が高速度のランニングでも起こるかは明らかではない。ランナーにとってピッチまたはストライド長を増加させるトレーニングは走速度向上の基盤となることから、本研究では高速度ランニングを対象に音楽による自発的同調の発生を検証した。大学陸上競技部に所属する16名を実験対象者とし、トレッドミルで最大走速度の70%で7秒間走行させた。試技は、音楽なし条件と9種類の異なるテンポ（90%から110%）の音楽条件の計10条件であった。慣性計測装置で測定した加速度データの鉛直成分を用いてピッチ（1分間あたりの歩数 [SPM]）を算出し、反復測定一元配置分散分析および事後検定を用いて条件間比較をした。その結果、103%条件（ 196 ± 8 SPM）でのピッチは、100%条件（ 194 ± 9 SPM, $p < 0.05$ ）および97%条件（ 195 ± 8 SPM, $p < 0.05$ ）より有意に高い値を示した。一方で、その他の条件（90%、95%、99%、101%、105%、110%）間では、有意な差は認められなかった。この結果は、高速度域の疾走時に103%の速いテンポの音楽への自発的同調が生じた一方、遅いテンポの音楽への自発的同調は生じなかったことを示す。これは本実験で用いた70%maxの走速度が、様々な速度条件で一定速度を維持して走行した際にストライド長が最大となる速度に近かったためと考えられる。つまり、最長ストライドを超えるストライド長を維持して走行することが困難であったため、遅いテンポへの同調がなされなかったと推察される。これらの結果は、走速度の増加が主にピッチの増加に起因する高速度のランニングにおいて、速いテンポの音楽への自発的同調のみが即時効果として期待できることを示唆している。

2025年8月29日(金) 10:05 ~ 10:49 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a205-07] バイオメカニクス／口頭発表②

座長:大高 千明(奈良女子大学)

10:20 ~ 10:34

[05バ-口-06] 高密度表面筋電図法を用いた外側広筋のMUNE算出における電極選択の影響*井川 快斗¹、渡邊 航平¹ (1. 中京大学)

背景:大腿四頭筋は加齢や不活動により著しく筋力が低下し、その一要因として運動単位 (MU) 数の減少が挙げられる。したがって、大腿四頭筋のMU数の評価は筋力低下の理解に重要である。大腿四頭筋を構成する外側広筋 (VL) のMU数推定 (MUNE) は筋内筋電図による侵襲的手法で算出され、方法論的制約がある。高密度表面筋電図 (HDsEMG) 法による非侵襲的なMUNE算出は代替手法となり得るが、VLにおける手法は確立されていない。目的:HDsEMGによるMUNE算出に用いる電極数や位置の違いがMUNEの精度に及ぼす影響を検討する。方法:男性3名 (41±8歳) のVLに64個の多点電極を装着し、大腿神経刺激による複合筋活動電位 (CMAP)、25%MVC中のHDsEMGから単一運動単位活動電位 (sMUAP) を記録した。1~64個の電極数の組み合わせをそれぞれ最大10⁶通りランダムに抽出し、CMAPおよびsMUAPからMUNEを算出した。MUNEの精度はCMAPとsMUAPの電極間の残差分散 (RV) およびMUNEの変動係数 (CV) で評価した。選択電極の座標の共分散行列の対角成分和 (位置情報) とRVの関連を相関分析により評価した。結果:RVは電極数による主効果があり、電極数間で有意差はなかった。電極の位置情報とRVは全電極数および全対象者で有意に相関していた ($r=0.19$ 、 $p<0.001$)。RVとMUNEのCVは有意に相関していた ($r=-0.94$ 、 $p<0.001$)。考察:MUNE算出において、位置の近い電極選択がRVを小さくする理由として、電極と記録されたsMUAPとの距離が小さく、sMUAPとCMAPの時空間的情報の差異が小さくなった可能性がある。結論:MUNE算出における電極の選択はRVだけでなく、電極数や位置の差異によるMUNEのばらつきを考慮することが精度向上に重要であることが示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 10:05 ~ 10:49 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a205-07] バイオメカニクス／口頭発表②

座長:大高 千明(奈良女子大学)

10:35 ~ 10:49

[05バ-口-07] 高齢者における運動神経の働きと骨格筋の量を反映する指標の関係
“神経筋チャート”を用いた個人が有するトレーナビリティの定量化・視覚化を目指して*渡邊 航平¹、井川 快斗² (1. 中京大学、2. 中京大学大学院)

最大筋力といった筋パフォーマンスの規定因子は、多岐にわたるが、運動神経の働きと骨格筋の量はその主たる要因である。高校サッカー選手を対象とした研究では、これら2つの要因を反映する指標は負の相関関係にあった (Yoshimura, Watanabe et al. IJSP 2022)。このことは、個人が有する運動神経の働きと骨格筋の量の特性には個性があり、筋力の増大を目的とした筋力トレーニングを実施する際には、その個性に合わせたメニューの提案が必要であると考えられる。近年では、高齢者においても筋力トレーニングの実施が推奨されており、個人に特化した効果的なメニューの提案は、超高齢社会に関連した様々な社会課題の解決に繋がると考えられる。本研究の目的は、高齢者を対象として、運動神経の働きと骨格筋の量を反映する指標の関係を明らかにすることとした。高齢男女38名 (72.3±5.4歳) を研究対象とした。運動神経の働きの指標として、等尺性膝関節伸展運動での最大下筋力発揮中の外側広筋における高密度表面筋電図を記録し、単一運動単位の活動へ分離したのちに、運動単位の発火頻度と動員特性を定量化した。骨格筋の量の指標として、超音波画像法を用いて外側広筋における筋厚および生体インピーダンス法を用いて下肢筋量を測定した。運動単位の発火頻度は、筋厚および下肢筋量と有意な負の相関関係を示した ($p < 0.05$)。運動単位の動員様式は、筋厚および下肢筋量と有意な正の相関関係を示した ($p < 0.05$)。運動単位の発火頻度および動員様式に関する指標は、加齢に伴って減少および増加することが知られているため、運動神経の働きと骨格筋の量を反映する指標は個人間で相反することが示された。高齢者においても、運動神経の働きと骨格筋の量には個性があり、そのトレーナビリティにも大きな個人差が存在することが示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

📅 2025年8月29日(金) 11:00 ~ 11:44 🏢 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a208-10] バイオメカニクス／口頭発表③

座長:山下 大地(国立スポーツ科学センター)

11:00 ~ 11:14

[05バ-口-08]

柔道の背負投における体幹回旋運動の解析

骨盤・胸郭による回旋・側方傾斜・前方傾斜の順序性とその連動

*菅谷 友紀¹、射手矢 岬²、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学
学術院)

11:15 ~ 11:29

[05バ-口-09]

フィギュアスケートのにおける回転数の違いが鉛直速度生成に及ぼす踏切動作特性

*ガンスフ マラルエレデン¹、桜井 伸二² (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科、2. 中京大学 スポーツ
科学部)

11:30 ~ 11:44

[05バ-口-10]

男子体操競技ゆかにおける後方伸身2回宙返り3回ひねり(Shirai3)の成功試技・失敗試技の動作
比較

*白井 健三¹、畠田 好章¹、中瀬 卓也¹、有井 さやか¹、河鱒 真世¹、阿江 数通¹ (1. 日本体育大学)

2025年8月29日(金) 11:00 ~ 11:44 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a208-10] バイオメカニクス／口頭発表③

座長:山下 大地(国立スポーツ科学センター)

11:00 ~ 11:14

[05バ-口-08] 柔道の背負投における体幹回旋運動の解析

骨盤・胸郭による回旋・側方傾斜・前方傾斜の順序性とその連動

*菅谷 友紀¹、射手矢 岬²、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学
学術院)

柔道における背負投は、相手の面前で瞬時に自身の身体を180度回旋して相手を背中に担ぎ、肩口から投げる技である。技を確実に遂行するには、体幹部の素早い回旋が必要不可欠である。そこで本研究は、背負投実施時における体幹部の回旋運動の連動を明らかにすることとした。女子柔道選手21名を対象として、慣性センサ式モーションスーツ (e-skin MEVA, Xenoma社製) を用いて背負投動作を計測した。分析区間は、自然本体から回旋に入る際に踏み込み足が離床した時点から胸郭が回旋後に前傾し終えた時点までとした。出力値の中から胸郭と骨盤の角速度ベクトルと四元数を抽出し、(1)角度 (2) 角速度の最大値 (3) 最大値の出現タイミング、を求めた。尚、左組の対象者のデータは左右反転し、全対象者が右組データ (左方向に回旋) となるよう統一した。また、角度と時刻は分析開始時点の値を0と定義した。分析の結果、骨盤の回旋動作は胸郭に先行して開始し、一歩目着床時点(0.21s)には 38 ± 13 度(胸郭: 10 ± 10 度)、0.47s時点(胸郭は0.55s)には180度に達していた。最大回旋角 (骨盤: 207 ± 14 度、胸郭: 211 ± 12 度)の到達はほぼ同時(0.7-0.72s)であった。この回旋と同時に骨盤と胸郭は左方向へ傾斜を開始したが、その最大値 (いずれも48度) には骨盤 (0.34s) が胸郭 (0.44s)に先行して到達していた。左傾斜角が最大値に到達するタイミングで骨盤、胸郭ともに前方傾斜角が急激に増大し、0.82-0.85s時点に最大値(骨盤: 102 ± 16 度、胸郭: 169 ± 10 度)に達した。背負投の回旋運動は骨盤が先行し胸郭が追従する順序で行われていると示された。また、骨盤および胸郭の左傾斜によって相手を自身の右背部に呼び込み、回旋により身体の向きを変えることで、相手を背中に担いだ前傾姿勢へと移行したものと考えられる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 11:00 ~ 11:44 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a208-10] バイオメカニクス／口頭発表③

座長:山下 大地(国立スポーツ科学センター)

11:15 ~ 11:29

[05バ-口-09] フィギュアスケートのにおける回転数の違いが鉛直速度生成に及ぼす踏切動作特性

*ガンスフ マラルエレデン¹、桜井 伸二² (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科、2. 中京大学 スポーツ科学部)

【目的】フィギュアスケートのジャンプにおいて滞空時間の確保は不可欠な要素である。特にエッジ系ジャンプの一つであるループは、踏切脚後ろ向きアウトサイドエッジで急激に旋回運動を行いながら、身体重心（COM）の水平速度を適切に鉛直方向へ変換する技術が求められる踏切であり、鉛直速度の獲得メカニズムを理解することは競技力向上や指導への応用において重要である。本研究では、ループの跳躍高に着目し、回転数が異なる場合（2回転・3回転）の踏切特性の違いを、倒立振子モデル（阿江、1999）の観点から明らかにすることを目的とした。

【方法】女子選手10名の2回転（2LP）および3回転ループ（3LP）を光学式モーションキャプチャ（Vicon、200Hz）で撮影し、COMと踏切脚中足骨中心を結ぶベクトルから倒立振子モデルを構築した。ベクトルの伸縮からなる鉛直速度を半径成分VR、COMの踏切脚ブレードの長軸を中心にした進行方向への回転からなる鉛直速度を接線成分VEとした。回転間の比較には対応のあるt検定を用いた。【結果】COMの最下点以降にVEが先行して出現し、その後、踏切脚トゥピックが氷面にかかり始めてからVRが増加しCOM鉛直速度が加速していた。回転間の比較では、離氷時鉛直速度および跳躍高は3LPが有意に高い値を示した($p<.05$)。VRのピーク値には有意差が見られなかったが($p=.26$)、VEは3LPにおいて有意に高い値を示した ($p<.01$)。【考察】3LPでは空中で回転を回り切るために、身体を進行方向へ起こす動作による鉛直方向への推進成分をより大きく生成して鉛直速度を高めていることが示唆された。一方で、下肢の伸長動作は回転数による影響を受けず、跳躍高の差異は主に起こし回転量の違いに起因すると考えられる。本研究の知見は、ジャンプ種別や回転数に応じたトレーニング指導や技術分析への応用が期待される。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：バイオメカニクス

2025年8月29日(金) 11:00 ~ 11:44 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[3a208-10] バイオメカニクス／口頭発表③

座長:山下 大地(国立スポーツ科学センター)

11:30 ~ 11:44

[05バ-口-10] 男子体操競技ゆかにおける後方伸身2回宙返り3回ひねり(Shirai3)の成功試技・失敗試技の動作比較*白井 健三¹、畠田 好章¹、中瀬 卓也¹、有井 さやか¹、河緒 真世¹、阿江 数通¹ (1. 日本体育大学)

男子体操競技では2025年から施行されたルールにおいて、後方伸身2回宙返り3回ひねり(以下：シライ3)を含む後方伸身2回宙返り系の難度が前ルールから上がり、実施する選手が増加している。しかしシライ3は、過去5年の国際大会をみても実施した選手は1人のみであり、希少価値の高い技である。世界的に実施数の少ないシライ3の成功要因を明らかにすることは、ゆかの難度点向上につながると考えられる。本研究では、男子体操選手のゆかにおけるシライ3の成功試技と失敗試技の動作をバイオメカニクスの観点から比較することで成功要因を明らかにすることとした。対象者は国際大会においてシライ3の成功経験を持つ五輪金メダリスト1名(年齢：26歳、身長：164cm、体重：55kg、競技歴：23年)である。3次元動作解析システムカメラ15台を用いて得られた3次元データから重心速度、関節角度および角運動量などのデータを算出した。分析範囲は後転とび開始時からシライ3の動作終了時までとした。また審判有資格者により採点を行い、実施減点が1.0以下の試技を成功試技、1.0以上の試技を失敗試技とした。離地時点における成功試技と失敗試技の動作を比較した結果、重心速度および角運動量については顕著な差はみられず、関節角度については、右肩関節の屈曲伸展および内外転角度においていずれも5.3度の差がみられた。また体幹の左右回旋角度において4.0度の差が見られた。加えて、重心最大高については、成功試技が失敗試技よりも0.05 m大きかった。したがって、離地時に体幹の回旋を減らしひねり開始を遅延させていること、右肩を高い位置で外転させることによって、弾性力と反力を持ったゆかのバネをより効果的に利用できたと考えられる。その結果として、空中局面における最大重心高が増加して、接地において減点の少ないシライ3の実施を可能としていることが示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:55 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a301-02] 体育社会学／口頭発表①

座長: 渡辺 泰弘(広島経済大学)

9:00 ~ 9:25

[02社-口-01]

日本語版フィジカルリテラシー評価尺度とその関連項目の検討

*乾 順紀¹ (1. 奈良県立奈良商工高等学校)

9:30 ~ 9:55

[02社-口-02]

スタジアムの公共性をめぐるポリティクス

クリーブランド市のゲートウェイ・プロジェクト

*高部 巖輝¹、中田 健斗¹ (1. 明治大学大学院教養デザイン研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:55 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a301-02] 体育社会学／口頭発表①

座長:渡辺 泰弘(広島経済大学)

9:00 ~ 9:25

[02社-口-01] 日本語版フィジカルリテラシー評価尺度とその関連項目の検討*乾 順紀¹ (1. 奈良県立奈良商工高等学校)

近年、青少年に対する将来的な生涯スポーツ参画を睨んだ方策の重要性が高まっている中で注目されるのが「フィジカルリテラシー」である。乾・長ヶ原（2024）は、わが国の高校生対象に2つの日本語版尺度を開発している。ただ、フィジカルリテラシーは尺度開発が盛んに行なわれてきた一方で、対象や尺度によって測定内容や範囲が変わるため、それぞれの尺度に関連する項目との検証が進んでいない（乾ら，2023）。本研究の目的は、日本語版フィジカルリテラシー評価尺度と運動・スポーツ参画に関する項目の関連を検討することである。高等学校3校の生徒計107名に対して質問紙調査を実施した。主な調査項目は、個人的属性、運動・スポーツ参画状況・希望、フィジカルリテラシー尺度（PPLI, APLQ）、調査期間は2024年5月21日・30日、12月9日であった。分析については、評価尺度と運動・スポーツ参画関連項目との相関（Kruskal-Wallis検定/Spearmanの相関係数）を用い、尺度と有意な関連がみられた項目については階層的重回帰分析を実施した。評価尺度と多くの運動・スポーツ参画関連項目との関連は有意であり、特に運動・スポーツ実施に関する項目は、両尺度で広く関連がみられた。また、押しなべてAPLQがより強い関連をみせた。重回帰分析の結果からは、両尺度ともに「体育授業好意度」「体力自己評価」が有意な項目として回帰式に含まれ、尺度が体育科教育に関連するものとして機能し得ることが示唆された。さらに、APLQではフィジカルリテラシーの向上によって育まれるべき資質・能力にかかる項目も有意であった。ただし、観戦やボランティアに関する項目は回帰式に残らず、実施との関連の強さには差があると考えられた。特にAPLQで高い説明率が示され、尺度が運動・スポーツ参画に関する項目で構成されていることが示された。

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 9:55 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a301-02] 体育社会学／口頭発表①

座長:渡辺 泰弘(広島経済大学)

9:30 ~ 9:55

**[02社-口-02] スタジアムの公共性をめぐるポリティクス
クリーブランド市のゲートウェイ・プロジェクト***高部 厳輝¹、中田 健斗¹ (1. 明治大学大学院教養デザイン研究科)

サッカースタジアムの建設をめぐって栃木市で住民訴訟がおり、運営会社への「固定資産税の免除」が差し止められたことは記憶に新しい。当時（2022年）の報道によれば、スタジアムの公益性を主張する市に対して、裁判長は「強い公益性があるものとは到底認められない」と結論づけたという。この事例に典型的であるように、スタジアム建設には少なくない反対が存在し、地域住民と行政の間にある種の摩擦が生じている。日本の研究において、スポーツ・スタジアムへの公共投資の理想像としてしばしば引き合いに出されるのが、アメリカの事例だろう。アメリカではスタジアムへの公的資金の投入が地域住民に歓迎されているとする論調である。しかし、アメリカには日本と大きく異なる事情も存在する。第一に、数多くのプロ球団によるフランチャイズ移転をめぐる都市間の競合である。各都市は球団の誘致に多大な努力—新規の課税も珍しくない—を払い、その誘致に失敗した都市ではエクспанションチームと呼ばれる新球団が創設されることさえある。第二にはしかし、そのような誘致の努力が常に地域住民に支持されるわけではなく、多くの住民投票が実施され、その結果、公的資金の投入が拒否される場合も少なくない。全米では1990年から2023年にかけてスタジアムとアリーナの提案に対して57の住民投票が実施され、そのうち22の提案が否決されている。こうした事実は、アメリカにおいてもスタジアム建設への公的資金の投入をめぐっては、ある種のポリティクスが存在していることを示唆している。スタジアム建設は、地域経済を活性化させるのか、それともその経済効果は限定的なのか。スタジアム建設による受益者は地域住民なのか、それとも球団を所有する富裕層なのか。本報告では、都市の再開発と密接に結びついた成功例として取り上げられることが多いクリーブランド市の事例について検討する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:05 🏢 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a303-04] 体育社会学／口頭発表②

座長:大勝 志津穂(相山女学園大学)

10:10 ~ 10:35

[02社-口-03]

1970年代の性教育論とウーマン・リブ運動

純潔教育から性教育へ

*劉 曉宇¹ (1. 明治大学大学院)

10:40 ~ 11:05

[02社-口-04]

エリアス学派スポーツ社会学に関する批判的考察

方法論的課題としての「非西欧」の描き方

*村下 慣一¹ (1. 立命館大学大学院社会学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:05 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a303-04] 体育社会学／口頭発表②

座長:大勝 志津穂(相山女学園大学)

10:10 ~ 10:35

[02社-口-03] 1970年代の性教育論とウーマン・リブ運動

純潔教育から性教育へ

*劉 曉宇¹ (1. 明治大学大学院)

戦後日本の公教育における性教育は、処女と童貞を守らせようとする「純潔教育」として開始された。その純潔教育は、処女と童貞の価値に差をつける二重基準（ダブルスタンダード）であったと批判されている。しかし、「言説」と「実態」を明確に区分するならば、純潔教育の主要著書に、処女と童貞の二重基準を明記する言説はみられず、逆に、二重基準を戒めるような言説さえ認められるのである。確かに、純潔教育には実態としての二重基準の読み込みを可能にする言説も存在していた。「男の性欲は能動的」であり「女の性欲は受動的」である、「男は労働する身体」であり、「女は産み育てる身体」である、といった言説である。純潔教育においては、それらの言説に「科学」としての力が付与され、男女平等とは「男女の役割を尊重し、それぞれの任務を遂行すること」とみなされた。

1970年代になると、「純潔を守らせる」という純潔教育の言説と、「愛があれば純潔を失ってもよい」とする市井の言説との落差が広く認識されるようになり、文部省も純潔教育から性教育へと舵を切り直すことになる。本報告では、この純潔教育から性教育への転換に焦点をあて、その背後にあった新しい言説の誕生について考察する。

純潔教育のなかでも、処女と童貞の二重基準を批判的に捉えていた数少ない論客に、文部省視学官の山室民子とキリスト教矯風会の久布白落美があげられる。彼女たちはいずれもエリート層の家庭に育ち、アメリカやキリスト教という外部の視点から日本人女性の法的権利の拡大を重視していた。これに対して、1970年代初頭に市井の論客として、「純潔」を象徴権力の次元で批判したのが田中美津であった。山室や久布白とは異なる出自をもつ田中は、「語られえるもの」でありながら「語られなかったもの」の何を新しく語ることで、「純潔」を再定義してみたのか。本報告において明らかにしたい。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:05 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a303-04] 体育社会学／口頭発表②

座長:大勝 志津穂(椋山女学園大学)

10:40 ~ 11:05

[02社-口-04] エリアス学派スポーツ社会学に関する批判的考察

方法論的課題としての「非西欧」の描き方

*村下 慣一¹ (1. 立命館大学大学院社会学研究科)

本報告では、歴史社会学の泰斗ノルベルト・エリアスの「文明化の過程」論に依拠するエリアス学派のスポーツ社会学研究群に対する批判的考察を行う。本報告では、2000年代以降の学派のスポーツ研究に大きな影響を与えたジョセフ・マグワイアおよび「非西欧（日本）」研究として学派内部で高く評価されているラウル・サンチェス・ガルシアの2名を取り上げる予定である。両名の研究については、国内でもいくつかの論考が取りあげており、蓄積が進められてきた。本報告では、日本武道の文明化の過程に焦点化することで、先行研究群が指摘しえなかった方法論上の課題を提起することを試みる所存である。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:15 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a305-06] 体育社会学／口頭発表③

座長:谷口 勇一(大分大学)

11:20 ~ 11:45

[02社-口-05]

アメリカの高校運動部活動の実態に関する調査研究 (3)

テキサス州でのフィールドワークをもとに

*中澤 篤史¹、束原 文郎²、小石川 聖¹ (1. 早稲田大学、2. 帝京大学)

11:50 ~ 12:15

[02社-口-06]

アメリカの高校運動部活動の実態に関する調査研究 (4)

ミシガン州公立校の事例分析

*束原 文郎¹、中澤 篤史²、小石川 聖² (1. 帝京大学、2. 早稲田大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:15 🏢 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a305-06] 体育社会学／口頭発表③

座長:谷口 勇一(大分大学)

11:20 ~ 11:45

[02社-口-05] アメリカの高校運動部活動の実態に関する調査研究 (3)

テキサス州でのフィールドワークをもとに

*中澤 篤史¹、東原 文郎²、小石川 聖¹ (1. 早稲田大学、2. 帝京大学)

アメリカの高校運動部活動は、どのような形態で、どのように実施されているのか。私たちは、日本と同様に高校運動部活動が盛んなアメリカの実情を調査して、両者の共通点や相違点などを分析することで、アメリカから学びながら、日本が抱える問題を解決したり今後のあり方を展望しようと継続的に研究している。

アメリカの学校運動部活動は、日本のモデルになってきた一方で、その現状がどのようなものなのかに関する先行研究は、十分ではない。そこで昨年度の本学会大会では、試行的な研究成果として、カリフォルニア州とミシガン州で実施したフィールドワーク調査の結果を紹介した。本発表では、その継続的な調査研究の成果である(3)として、あらためて調査プロジェクト全体のねらいを説明するとともに、テキサス州で実施したフィールドワーク調査の結果を元にししながら、アメリカの高校運動部活動の実態・背景・課題について探索的に分析する。なお、本発表は独立した内容を持つものではあるが、関心のある聴者には(4)の発表も合わせて聞いてほしい。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 12:15 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a305-06] 体育社会学／口頭発表③

座長:谷口 勇一(大分大学)

11:50 ~ 12:15

[02社-口-06] アメリカの高校運動部活動の実態に関する調査研究 (4)

ミシガン州公立校の事例分析

*東原 文郎¹、中澤 篤史²、小石川 聖² (1. 帝京大学、2. 早稲田大学)

本研究は、ミシガン州の公立高校における運動部活動の実態を、現地校長・アスレチック・ディレクター（以下、AD）等への聞き取りと、学校ハンドブック・Web情報等を活用して明らかにしたものである。教師がコーチを兼任し、生徒の学業との両立を重視する点は日本と共通するが、大きく異なる点も多数存在した。たとえば校長・ADを中心とする運営組織体制、施設整備費の起債、スポンサー契約、放映権・収益の管理、地域大会から州大会への接続、明確な出場資格管理など、すべてが説明責任を伴った制度設計のもとで運営されている事が挙げられる。ビジネス的要素も利潤追求でなくより充実した教育環境の実現に資するものであり、むしろ積極的に奨励されている点が特徴的であった。

アメリカの高校スポーツ文化の高度な発展の背景には、ユーススポーツを教育の重要な柱とみなす市民的合意と、スポーツを通じた人間形成に対する強い信念、すなわち、スポーツへの信仰に近い情熱が根底にあると考えられる。

なお本発表は、独立した内容を持つものであるが、中澤ほか「アメリカ高校運動部活動の実態に関する調査研究 (3) テキサス州でのフィールドワークをもとに」と連動した共同調査研究プロジェクトの一部である。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

■ 2025年8月29日(金) 13:50 ~ 14:45 ■ 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a307-08] 体育社会学／口頭発表④

座長:下竹 亮志(筑波大学)

13:50 ~ 14:15

[02社-口-07]

中学校運動部における補欠部員のアンビバレンスに関する実証的研究
指導者の補欠部員への指導に着目して

*種谷 大輝¹、松尾 哲矢¹ (1. 立教大学)

14:20 ~ 14:45

[02社-口-08]

中学校における武道必修化がもたらす剣道の文化的変容に関する研究
授業における「気」の指導をめぐって

*沓掛 哲平¹、松尾 哲矢¹ (1. 立教大学)

■ 2025年8月29日(金) 13:50 ~ 14:45 ■ 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a307-08] 体育社会学／口頭発表④

座長:下竹 亮志(筑波大学)

13:50 ~ 14:15

[02社-口-07] 中学校運動部における補欠部員のアンビバレンスに関する実証的研究

指導者の補欠部員への指導に着目して

*種谷 大輝¹、松尾 哲矢¹ (1. 立教大学)

運動部における補欠部員は、自らのプレーを試合で発揮する機会が制限される一方で、練習での貢献が求められるなど、補欠部員ならではの様々な葛藤を抱えながら運動部活動を継続していることが考えられる。従来の補欠部員に関する研究は、山本(1990,1991)、青木(1990)、山崎・鈴木(2015)の部活動の参加動機や継続、退部の要因に着目した研究や、福井・豊田(2020)の応援活動に着目した研究など、補欠部員自身にアプローチした研究は見られるが、指導者側からアプローチした研究は少ない。

そこで本研究では、同一の対象に対して相反する傾向、態度、感情が同時に存在する精神状態を意味する「アンビバレンス」の概念に着目し、指導者が補欠部員の葛藤をどのように認識し、補欠部員の指導上どのような葛藤を抱えているかを検討していく。具体的には、中学校の運動部指導者を対象とし、半構造化面接法を用いて、主な調査項目を「補欠部員との人間関係」、「補欠部員のアンビバレンス」、「指導者自身のアンビバレンス」、「補欠部員に対する考え方」に設定し、調査を行った。

その結果、指導者が補欠部員のアンビバレンスとして認識しているものとして最後の大会に出られないとわかっているのに、指導者から引退まで練習を頑張れと言われる「心理学的アンビバレンス」や、主顧問と副顧問の指導法の矛盾によって生じる「社会的アンビバレンス」、パスを出せと言われたが、すでに出すタイミングが遅く、なんでパスをしたんだと叱られるような「状況的アンビバレンス」が挙げられた。また、指導者は部員が葛藤を抱えることで自分で考える力が身につくと認識しており「治療的ダブルバインド」として葛藤を認識している様相が見られた。

■ 2025年8月29日(金) 13:50 ~ 14:45 ■ 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a307-08] 体育社会学／口頭発表④

座長:下竹 亮志(筑波大学)

14:20 ~ 14:45

[02社-口-08] 中学校における武道必修化がもたらす剣道の文化的変容に関する研究

授業における「気」の指導をめぐって

*沓掛 哲平¹、松尾 哲矢¹ (1. 立教大学)

平成24年（2012年）の学習指導要領改訂により、中学校の体育授業において武道が必修化され、剣道を含む各武道は教育現場において一定の定着を見せている。一方で、これまでの剣道授業に関する先行研究や実践的報告（上野, 2018；本多, 2020ほか）では、技能習得の側面に重点が置かれる傾向が強く、「気」に代表される剣道固有の精神文化を交えた議論は十分に展開されてこなかった。「気」は剣道において中心的な精神文化を担うものであり、有効打突の条件としてもその充実が求められる。このような背景のもとで、学校教育において「気」の概念が軽視されたり、形式的にしか扱われなかったりすることで、剣道が本来有していた精神的な本質的価値が失われている可能性があるのではないかと推察する。すなわち、武道必修化によって剣道の身体的動作及び礼節等の儀礼的側面のみが強調され、精神的な涵養という教育的価値が十分に伝わっていないという、いわば「非武道化」が起きていることが懸念される。

そこで本研究では、中学校保健体育教員が「気」という概念をいかように捉え、指導現場においていかなる形で伝承・変容・あるいは捨象されているのかを明らかにすることを目的とする。調査方法としては、公立中学校保健体育科教員を対象に半構造化インタビューを実施した。加えて、得られた語りを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下, 2007）に基づき分析することで、非専門教員並びに専門教員による「気」の解釈とその実践的な運用プロセスを明らかにした。

詳細な分析結果においては学会大会にて発表することとする。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 15:00 ~ 16:25 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a309-11] 体育社会学／口頭発表⑤

座長:白石 翔(富山大学)

15:00 ~ 15:25

[02社-口-09]

日本バスケットボール界へのアフリカ出身留学生の移住に関する研究
アフリカ出身留学生斡旋企業の事業内容に着目して

*千葉 直樹¹ (1. 中京大学)

15:30 ~ 15:55

[02社-口-10]

インターネット上におけるスポーツニュースにみたナショナリズムに関する検討
2024年パリオリンピックにおけるバスケットボール日本代表チームの記事を事例にして

*楊 橋宇¹、下窪 拓也¹、渡 正¹、鈴木 宏哉¹ (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科)

16:00 ~ 16:25

[02社-口-11]

現代におけるメディア・スポーツのリアリティ
原像と複製、体験と情報の反転

*佐藤 慈¹ (1. 明治大学大学院)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 15:00 ~ 16:25 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a309-11] 体育社会学／口頭発表⑤

座長:白石 翔(富山大学)

15:00 ~ 15:25

[02社-口-09] 日本バスケットボール界へのアフリカ出身留学生の移住に関する研究

アフリカ出身留学生斡旋企業の事業内容に着目して

*千葉 直樹¹ (1. 中京大学)

BaleとSang (1994)は世界システム論に基づき1970年代から80年代にケニア陸上界がアメリカの大学に留学したケニア出身長距離選手の流出に伴い「未発達」な状態に陥ったことを指摘した。同じような状況は、1990年代以降、日本の高校指導者によって有望な選手を勧誘されたアフリカの国々で起こっていたかもしれない。河野 (2019) は日本の高校バスケットボール部に登録された留学生が2004年の53名から2019年の81名に増加したことを指摘した。2011年の全日本大学バスケットボール選手権大会に出場した留学生の数は11名であった一方で、2021年には38名に急増した (Chiba and Falcous, 2024)。一方、2022-23シーズンのBリーグに登録された選手の内、留学生選手は全体の2.2%であった。一方、外国出身選手は全選手の34.8%を占め、その内68%はアメリカ人だった。つまり、留学生選手は高校でセンターのポジションを務める傾向があり、ゴール下シュートとリバウンドでの貢献を求められオールラウンダーとしての技術が不十分であるため、アメリカ人に太刀打ちできない。アフリカから日本の高校に留学生を勧誘するためには、企業等との調整が必要になる。それではアフリカ出身の留学生はどのような仕組みで日本の高校に勧誘されているのだろうか。本研究では、日本の高校に在学したアフリカ出身バスケットボール選手を勧誘した企業関係者の斡旋理由や仲介事業の内容を明らかにすることを目的とする。2025年3月にC社でA氏とB氏に90分の専門家インタビューを行った。C社は高校関係者から運動部を強化する目的で留学生の勧誘依頼を受け2016年から斡旋事業を始めた。C社は2025年4月時点で36名のナイジェリア人を日本の高校や大学に留学する斡旋業務を行った。詳細な調査結果は当日発表する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月29日(金) 15:00 ~ 16:25 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a309-11] 体育社会学／口頭発表⑤

座長:白石 翔(富山大学)

15:30 ~ 15:55

[02社-口-10] インターネット上におけるスポーツニュースにみたナショナリズムに関する検討

2024年パリオリンピックにおけるバスケットボール日本代表チームの記事を事例にして

*楊 橋宇¹、下窪 拓也¹、渡 正¹、鈴木 宏哉¹ (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科)

【背景と目的】近年、急速な発展を遂げるSocial Network Service（SNS）が注目を集めている。特に、SNS上で表現されるニュースとその影響が検討されている。SNSを利用してスポーツイベントを視聴する人は増えており、その影響も大きくなっている。ここ数年、人々はメディアを通じて世界と民族に対する認識やリアリティ、自己のアイデンティティを形成してきた。本研究は、2024年パリオリンピックにおけるバスケットボール日本代表チームの報道とネットユーザーのコメントを解析し、認識的ナショナリズムの観点から検討することを目的とする。

【方法】パリオリンピックにおけるバスケットボール男子日本代表の試合に着目し、スポーツナビからニュースを収集し、テキスト分析を実施した。先行研究の検討から作成したナショナリズムのコードに基づいて、テキストからコードに関連する単語を抽出し、ニュースにおけるナショナリズムのコードに該当する単語数とコメントにおけるナショナリズムのコードに該当する単語数の関連を考察した。

【結果】ランダムサンプリングにより抽出したニュースにおけるナショナリズムのコードに該当する単語数とコメントにおけるナショナリズムのコードに該当する単語数の間に、統計的に有意な正の相関が見られた。ニュースの投稿日付とナショナリズムのコードに該当する単語数の間には有意な関連は見られなかった。ポジティブな意味をもつナショナリズムのコードに該当する単語数はニュースとコメントの間に正の相関を示したが、ネガティブな意味をもつナショナリズムのコードに該当する単語数には有意な関連は見られなかった。

【結論】ニュース記事内のナショナリズムは、コメントする人々のナショナリズム意識に影響を与える可能性が示唆された。しかし、本研究は短期間のデータからランダムサンプリングしたものであり、より深い探究が必要である。

■ 2025年8月29日(金) 15:00 ~ 16:25 ■ 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[3a309-11] 体育社会学／口頭発表⑤

座長:白石 翔(富山大学)

16:00 ~ 16:25

[02社-口-11] 現代におけるメディア・スポーツのリアリティ

原像と複製、体験と情報の反転

*佐藤 慈¹ (1. 明治大学大学院)

本報告では、テレビ中継、判定テクノロジー、eスポーツなど電子メディアのテクノロジーが介在しているスポーツを「メディア・スポーツ」と規定し、そのメディア・スポーツにおけるリアリティの所在について検討する。

スポーツとメディアの結びつきは新しいものではなく、新聞やラジオなどはスポーツの普及に大きな影響を及ぼしてきた。しかし、近年の急速なメディア・テクノロジーの進歩とそのスポーツの応用は、前世紀までとは異なる次元でスポーツを変容させつつある。ハンナ・アーレントは、人工衛星が地球の軌道を回り、「人間の条件」が大きく変わりはじめていることに驚愕したが、現代におけるメディア・テクノロジーの進化は彼女の時代を上回る変動をもたらしている。

アーレントは、複数人の議論の場において他者からその存在を認識され、同定されるところにリアリティを位置づけた。この捉え方によれば、テレビでのスポーツ視聴など、複数人の実在を必要としないメディア・スポーツはリアリティを喪失させていることになる。だが、テレビの視聴やオンラインを通じたテレビゲームでの対戦に、私たちはリアリティを感じてはいないだろうか？現代のメディア・スポーツは本当にリアリティを喪失させていると言えるのだろうか？

例えば、ヴァルター・ベンヤミンのアウラの概念を念頭におきながら、樋口聡は現代のメディア・スポーツが「複製技術をめぐるオリジナルとコピーといった観念」を崩壊させた事実を喝破したが、ニクラス・ルーマンの社会システム論に基づきながら、「原像」と「複製」という観念の崩壊が現代のリアリティに有している意味にまで踏み込んだ考察を可能にしているのが大黒武彦の「潜在(ヴァーチャル)社会」論である。本報告では、その「潜在(ヴァーチャル)社会」論の視点から、メディア・スポーツのリアリティについて検討する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育心理学

📅 2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:29 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a403-05] 体育心理学／口頭発表①

座長:長谷川 弓子(岩手大学)

14:30 ~ 14:49

[03心-口-01]

柔道競技の組手の攻防における攻撃切替技能の熟練差

*高野 綺海¹、奥村 基生² (1. 東京学芸大学大学院大学院連合学校教育学研究科、2. 東京学芸大学)

14:50 ~ 15:09

[03心-口-02]

大学生の運動能力観に関する研究

*古田 久¹、鹿野 晶子²、田中 良²、野井 真吾² (1. 埼玉大学、2. 日本体育大学)

15:10 ~ 15:29

[03心-口-03]

縦断データを用いた心理的安全性とバーンアウトの相互関係の検討

*甲谷 勇平¹、佐藤 優介¹、白坂 成功¹ (1. 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科)

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:29 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a403-05] 体育心理学／口頭発表①

座長:長谷川 弓子(岩手大学)

14:30 ~ 14:49

[03心-口-01] 柔道競技の組手の攻防における攻撃切替技能の熟練差*高野 綺海¹、奥村 基生² (1. 東京学芸大学大学院大学院連合学校教育学研究科、2. 東京学芸大学)

【目的】 柔道は、身体接触を伴う攻防一体型の対人競技であり、選手は自身と相手の運動が相互に影響し合う中で、状況に応じて適切に運動を調整・切替える能力が求められる。本研究の目的は、柔道において状況変化に迅速かつ正確に対応するための対人技能の特性を明らかにすることである。まず、①相手が動かず防御もしないと分かっている状況で釣手を取りに行く課題、②相手が防御すると分かっている状況で防御を避けて釣手を取りに行く課題という2つの単純課題を行った。次に、③相手が反応するかどうか分からない状況下で、防御がなければそのまま釣手を取りに行き、防御された場合は動作を回避動作に切り替える「切替課題」を実施した。練習場面に近い単純課題と、試合場面に近い選択課題を比較することで、実戦に求められる知覚－運動技能の特性を検討した。

【方法】 対象は大学女子柔道部所属の14名で、全国大会ベスト8以上の選手を上級群、それ未満を中級群とした。課題動作は、実戦で頻繁に見られる組手場面における釣手を取る動作とし、右組（参加者）対左組（実験者）の設定で実施。実験者の防御は、釣手を上から叩く動作とした。課題は、①・②の単純課題（各10回）と、③の切替課題（10回、ランダム呈示）を行った。動作の統一性を保つため、スタート位置と動作開始タイミングを固定した。分析項目は、釣手動作の開始から襟を握るまでの運動時間、襟を握った位置（正確性）、切替課題での成功率とした。

【結果および結論】 切替課題では、相手の動きが不確定であることにより、単純課題に比べて運動時間が長くなり、正確性が低下することが予想された。また、熟練度に応じて運動時間、正確性、成功率に違いが生じると考えられた。詳細な結果と考察は当日発表する。

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:29 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a403-05] 体育心理学／口頭発表①

座長:長谷川 弓子(岩手大学)

14:50 ~ 15:09

[03心-口-02] 大学生の運動能力観に関する研究*古田 久¹、鹿野 晶子²、田中 良²、野井 真吾² (1. 埼玉大学、2. 日本体育大学)

自身の能力・才能をどのように捉えるか(能力観)が学習行動に影響することが知られている。そこで、本研究は大学生を対象に、運動・スポーツに関する能力観(運動能力観)の実態を明らかにすることを目的として調査を行った。Microsoft Formsを用いて調査を行い、大学生326人(女性180人、男性143人、回答しない3人)から回答を得た。能力観に関する質問項目は、次の3つのタイプであった。1) 広域的な能力観: 言語、数学、音楽、運動・スポーツの4分野について、それぞれの分野の能力・才能を固定的(すなわち、遺伝的・先天的に決定される)と考えるか、増大的(すなわち、経験的・後天的に決定される)と考えるか。2) 運動・スポーツ分野における狭域的な能力観: 学習指導要領(保健体育)の運動7領域について、それぞれの領域の能力・才能を固定的と考えるか、増大的と考えるか。3) 自由記述: これまでの運動・スポーツ経験の中で「自分自身の能力や才能の限界を感じたこと」、及び「努力次第でどうにでもなると感じたこと」についての説明。

分析の結果、広域的な能力観については、運動・スポーツと音楽分野では固定的能力観を持つ者が増大的能力観を持つ者より多かった(運動・スポーツ: 固定的約6割、増大的約4割、音楽: 固定的約7割、増大的約3割)。他方、数学分野では固定的と増大的が約半々であった。言語分野では、増大的能力観を持つ者が約8割となり、固定的能力観を持つ者より多かった。狭域的な能力観については、陸上競技とダンスでは固定的能力観を持つ者がそれぞれ約7割と過半数で多かった。球技では約半々であった。器械運動、水泳、体づくり運動、武道では、増大的能力観を持つ者が、過半数から約8割と多かった。自由記述データの詳細については発表当日に報告したいが、能力観は広域的にも狭域的にも分野・領域によって大きく異なることが明らかとなった。

⌚ 2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:29 🏢 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a403-05] 体育心理学／口頭発表①

座長:長谷川 弓子(岩手大学)

15:10 ~ 15:29

[03心-口-03] 縦断データを用いた心理的安全性とバーンアウトの相互関係の検討*甲谷 勇平¹、佐藤 優介¹、白坂 成功¹ (1. 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科)

バーンアウトは、様々な障害の結果として生じる、スポーツ領域における深刻な弊害である(田中, 2016)。そんなバーンアウトの予防・低減に向けて、心理的安全性に注目が集まっている。先行研究では、心理的安全性がアスリートのバーンアウトの低下に影響することが一貫して報告されているが、1時点もしくは2時点での心理的安全性とバーンアウトの関連しか明らかにされておらず、心理的安全性とバーンアウトの縦断調査の必要性が指摘されている(Kinoshita & Sato, 2023)。そこで本研究では、心理的安全性とバーンアウトについて、3時点でデータを取得し、縦断的に関連を明らかにする。調査対象者は、日本の高校・大学生運動部活動部員である。2月、3月、4月の3時点でオンラインアンケートを実施し、全ての時点で回答した138名のデータを分析した。アンケート項目は、デモグラフィック変数として性別、学年、競技レベル、役割(選手/スタッフ)、立場(リーダー/非リーダー)を取得し、チーム心理的安全性尺度(Edmondson, 1999)、バーンアウト尺度(雨宮ら, 2013)を用いてデータを取得した。そして、得られたデータに対して交差遅延パネル分析を実施した。分析の結果、Time 1のバーンアウトがTime 2のチーム心理的安全性に影響を与え、Time 2のチーム心理的安全性がTime 3のバーンアウトに影響を与える可能性が明らかになった。これまでの先行研究では、心理的安全性がバーンアウトに影響を与えるという一方向の関連のみしか明らかにされていなかったが、本研究では、心理的安全性とバーンアウトは相互に作用し合う関係性が示唆された。今後は、調査対象者を増やし、より中長期的にデータを取得し、詳細について明らかにする必要がある。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育心理学

📅 2025年8月29日(金) 15:40 ~ 16:39 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a406-08] 体育心理学／口頭発表②

座長:山本 浩二(関西福祉大学)

15:40 ~ 15:59

[03心-口-04]

チアリーディングにおけるスタントを原因とした腰痛の心理社会的状況についての質的検討

*松岡 彩芽¹、中澤 史¹、岡野 かほる¹、時田 晃佑¹、鶴田 幸大¹、瀬戸 宏明¹ (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科)

16:00 ~ 16:19

[03心-口-05]

キリスト教を信仰するアスリートが競技生活を続けていくためのプロセス

*山本 築¹、高井 秀明¹ (1. 日本体育大学)

16:20 ~ 16:39

[03心-口-06]

「奚般氏著心理学」と「倍因氏心理新説」の体育心理学からみた史的研究

*楠本 恭久¹、高井 秀明¹、大久保 瞳¹、北橋 達朗¹、坂部 崇政²、藤本 太陽³ (1. 日本体育大学、2. 京都教育大学、3. 大阪産業大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育心理学

📅 2025年8月29日(金) 15:40 ~ 16:39 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a406-08] 体育心理学／口頭発表②

座長:山本 浩二(関西福祉大学)

15:40 ~ 15:59

[03心-口-04] チアリーディングにおけるスタントを原因とした腰痛の心理社会的状況についての質的検討

*松岡 彩芽¹、中澤 史¹、岡野 かほる¹、時田 晃佑¹、鶴田 幸大¹、瀬戸 宏明¹ (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科)

【背景】チアリーディングは「スタント」という人を持ち上げる動作などを行う、身体的および心理的要求の高い競技である。日本のチアリーディング関連外傷・障害において、スタント実施時に他の選手を持ち上げるポジション(以下ベース)の選手に腰部障害が多いことが報告されている。スポーツ関連の腰部障害は様々な要因が複雑に関与していることが明らかになっている。心理社会的背景として、腰痛を抱える他競技の選手は、痛みがあることを指導者やチームメイトに隠すという特徴的な行動が見られ、これは痛みがあることが普通であると考え文化の存在や、痛みや外傷・障害に対するネガティブな考えによるものと推測される。しかし、チアリーディング選手における腰部障害の要因は不明な点が多い。

【目的】チアリーディングにおけるスタントを原因とした腰痛の心理社会的状況を検討すること。

【対象と方法】スタントのベースの時に腰痛の経験があるチアリーディング選手7名を対象に、「腰痛の基本情報」「腰痛の要因」「腰痛後の経験」の3つのテーマに沿ってオンラインによる半構造化面接を実施した。収集した逐語データは、グラウンデッドセオリーアプローチにより分析した。

【結果および考察】「本人の考える腰痛の内的要因」「本人の考える腰痛の外的要因」「心理的要素」「チーム環境」「腰痛の発生」「腰痛への対応」「腰痛による影響」「腰痛を伝える」「周りからのサポート」という9つのカテゴリーが生成された。また、カテゴリー同士について一方向もしくは相互に影響する関係性が考察され、腰痛の発生と腰痛を取り巻く事象における自覚的もしくは潜在的な課題の存在が窺えた。

■ 2025年8月29日(金) 15:40 ~ 16:39 ■ 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a406-08] 体育心理学／口頭発表②

座長:山本 浩二(関西福祉大学)

16:00 ~ 16:19

[03心-口-05] キリスト教を信仰するアスリートが競技生活を続けていくためのプロセス*山本 築¹、高井 秀明¹ (1. 日本体育大学)

宗教は、古代から世界中で文化や社会に深く根付いてきたものであり、信仰や宗教観は個人の思想や人生観の根本に位置している（島田、2019）。キリスト教は1549年に日本に伝来して以来、冠婚葬祭やクリスマスといった形で日本文化に深く影響を与えている（文化庁、2023；深津、2006）。しかし、このような文化的な受容がある一方で、キリスト教の教えや思想に違和感を抱く人もおり、個人の宗教的信念としてキリスト教を信仰する人々が誤解や偏見に直面することも少なくない（石川、2019）。Ronkainen et al. (2020) により、宗教はアスリートの競技生活に影響を与え、彼らのキャリア形成や幸福に大きな影響を及ぼす可能性が指摘されている。このような背景から、キリスト教を信仰するアスリート（以下、クリスチャンアスリート）は競技生活において特有の課題を抱えているものと考えられる。本研究では、クリスチャンアスリートの宗教的信念が競技生活に与える影響について質的に検討することを目的とし、クリスチャンアスリート11名に半構造化インタビューを行った。分析には、社会的相互作用やプロセスを明らかにすることに適している修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：M-GTA）を採用した（木下、2003）。その結果、クリスチャンアスリートが競技生活を続ける中で、世の中の価値観とキリスト教の教えとの間に【価値観がなじまない】という経験をしていることが明らかになった。一方で、宗教的慣習の実践を通して、競技に対する目的意識が明確になり、【神のためのスポーツ】という意識が形成されていくことも確認された。つまり、クリスチャンアスリートの信仰が競技生活に影響を与えると同時に、競技生活での経験が信仰を深める契機にもなっていることが示された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育心理学

📅 2025年8月29日(金) 15:40 ~ 16:39 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[3a406-08] 体育心理学／口頭発表②

座長:山本 浩二(関西福祉大学)

16:20 ~ 16:39

[03心-口-06] 「奚般氏著心理学」と「倍因氏心理新説」の体育心理学からみた史的研究

*楠本 恭久¹、高井 秀明¹、大久保 瞳¹、北橋 達朗¹、坂部 崇政²、藤本 太陽³ (1. 日本体育大学、2. 京都教育大学、3. 大阪産業大学)

『Mental Philosophy』は1869（明治2）年にJoseph Haven（1816-1874）が著した書物であり、西周は1875（明治8）年にこれを『奚般氏著心理学』として翻訳している。これがわが国で出版された最初の心理学書であることは周知されている。これに対して、1868（明治元）年にAlexander Bain（1818-1903）が著した書物の『Mental Science』は、1882（明治15）年に井上哲次郎が『倍因氏心理新説』として抄訳して出版している。したがって、『Mental Science』は『Mental Philosophy』と近い年代に出版された作であり、その史的研究を行なうことは心理学の起源を探るために価値があるものの、それらの先行研究は限られている。例えば、鈴木（2007）は、兵庫県三田市立図書館調査相談室を訪問しており、同地での調査の際、「郷土先哲顕賞会」がまとめた『川本幸民関係資料調査報告書（平成8年3月）』のファイルの中に昭和18年6月に開催された「川本幸民遺品展示会」の陳死資料の1つとして、『心理学 川本清一訳 全13分冊』を確認している。そして、それらの資料をもとにしながら、Alexander Bainの心理学の特徴に迫っている。ちなみに、Alexander Bainの『Mental Science』の抄訳書である、井上哲次郎の『倍因氏心理新説』は、4巻から構成されている。例えば、第1巻では、第1章 総論、第2章 感覚、第3章 味覚、第4章 嗅覚、第5章 触覚、第6章 聴覚、第7章 視覚の見出しが示されており、第1巻は知覚に関係する内容が中心であることがうかがえる。本研究の詳細は、発表当日に報告させていただくのだが、井上哲次郎の『倍因氏心理新説』の史的研究は、現代の体育やスポーツ、健康に関する「研究の立ち位置を再考する」うえで有効な機会となるだろう。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:15 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a501-02] 体育史／口頭発表①

座長:石立 克己(至誠館大学)、後藤 光将(明治大学)

9:00 ~ 9:35

[01史-口-01]

近代日本の体育・スポーツ史叙述における「奉納競技」の系譜
明治神宮外苑造営・明治神宮大会成立の内在的論理を繙く

*藤田 大誠¹ (1. 國學院大學)

9:40 ~ 10:15

[01史-口-02]

明治後期の関西地域における女子バスケットボール普及過程の再検討

*柿山 哲治¹ (1. 福岡大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:15 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a501-02] 体育史／口頭発表①

座長:石立 克己(至誠館大学)、後藤 光将(明治大学)

9:00 ~ 9:35

[01史-口-01] 近代日本の体育・スポーツ史叙述における「奉納競技」の系譜
 明治神宮外苑造営・明治神宮大会成立の内在的論理を繙く

*藤田 大誠¹ (1. 國學院大學)

大正13年（1924）、「明治神宮外苑競技場」が造営されたことに伴い、「明治神宮競技大会」が創始された。この大会の実質的な「産みの親」である内務省保健局長の湯澤三千男は、「神前に技を闘はすといふことは東西共に昔から行はれたことで、我国の往時の奉納試合、西洋のオリンピックの競技などはこれである。それで、明治天皇の御聖徳をたゞへ奉り、一は運動競技の全国を中心となす意味で、各方面との話を進め、明治神宮例祭を期間に入れて、開会することにしたのである」と「明治神宮競技大会」の由来を語った上で、「外国のスポーツマンシップと、我々武士道とを長短補正し、新しい精神でやるところに大なる意味がある。一例をいへば我国の武道は多くは個人的であるが、外国から来た競技のチーム制によつて団体訓練に資するが如きである。／競技は日頃錬磨の結果を、正々堂々と争ふのであつて体育としても亦訓育としても非常に価値の高いものである。〔中略〕神宮競技に競技と云ふ名称を附したのも、こんな理由で、国民生活の上から競技の価値を認めたからである」と述べている（「明治神宮競技につきて」斯の道学会編『運動競技と訓育』中文館書店、大正15年）。当時の史料に即して跡付けると、「明治神宮外苑」は、①神社祭祀に伴う奉納競技空間「馬場」を媒介とした日本の伝統的（内在的）文脈と②オリンピア祭典競技を前提とする国際オリンピックという国際的（外在的）文脈、これら両文脈の結節点に位置付けられた近代的スポーツ施設であり、「明治神宮大会」は、祭典奉納競技空間で行われる「奉納競技」（祭典競技、神前競技）に源流を持つオリンピア祭典競技を前提とする国際オリンピックの日本国内版と言える。このうち本発表では、明治神宮外苑造営・明治神宮大会成立を大きな画期と捉え、その内在的論理を繙くべく、近代日本の体育・スポーツ史叙述で言及された「奉納競技」の系譜を辿りたいと考える。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

📅 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:15 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a501-02] 体育史／口頭発表①

座長:石立 克己(至誠館大学)、後藤 光将(明治大学)

9:40 ~ 10:15

[01史-口-02] 明治後期の関西地域における女子バスケットボール普及過程の再検討*柿山 哲治¹ (1. 福岡大学)

【研究目的】本研究は、明治後期の関西地域における女子バスケットボール普及過程を、新たに発掘した一次史料に基づき再検討する。特に、梅花女学校のMarion Allchin（オルチン女史）と神戸女学院のJulia Clarissa Hocking（ホッキング女史）という2人のアメリカ人女性宣教師に焦点を当て、米国東部女子教育ネットワークの影響を明らかにした。

【研究方法】オルチン女史については、Abbot Academy（マサチューセッツ州）の年鑑（1908年）や「A Singular School」からバスケットボール経験を分析した。神戸女学院については、同窓会誌「めぐみ」（1890年創刊）を分析し、ホッキング女史の経歴をOberlin College所蔵資料により追跡した。

【梅花女学校とオルチン女史の役割】オルチン女史は、Abbot Academy在学時（1908年卒）にYWCA支部長を務め、同校でバスケットボールを導入したRebecca Chickeringの影響を受けていた。1905年の写真史料から、Abbot Academyでは既に本格的な女子バスケットボールが実施されていたことが確認され、梅花女学校ではこのモデルに基づく組織的なチーム運営が行われていた。

【神戸女学院における展開】「めぐみ」の記録から、ホッキング女史着任前の1903年には既にバスケットボールが行われており、彼女が初めて導入したわけではないことが判明した。ただし、体育担当として赴任した宣教師としては最初期の事例であり、Mt. Holyoke College出身の前任者（英語兼体育担当）らとは異なる役割を果たしていた。

【結論】関西のキリスト教主義女学校におけるバスケットボール普及は、単なる技術移転ではなく、米国東部の女子教育ネットワークが媒介した文化的転移プロセスであった可能性が示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

📅 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 12:25 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a503-05] 体育史／口頭発表②

座長:中村 哲也(高知大学)、関口 雄飛(日本体育大学)、尾川 翔大(岐阜薬科大学)

10:30 ~ 11:05

[01史-口-03]

日本の卓球競技におけるカット打法の変化と採用過程に関する研究(1902-1942)

*木村 直登¹ (1. 神戸大学大学院)

11:10 ~ 11:45

[01史-口-04]

兵庫県における第1回国民体育大会（1946年）の開催準備に関する研究

*秋元 忍¹ (1. 神戸大学)

11:50 ~ 12:25

[01史-口-05]

戦後の少年柔道に関する史的研究

全日本柔道少年団を中心に

*桐生 習作¹ (1. 公益財団法人講道館)

■ 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 12:25 ■ 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a503-05] 体育史／口頭発表②

座長:中村 哲也(高知大学)、関口 雄飛(日本体育大学)、尾川 翔大(岐阜薬科大学)

10:30 ~ 11:05

[01史-口-03] 日本の卓球競技におけるカット打法の変化と採用過程に関する研究 (1902-1942)*木村 直登¹ (1. 神戸大学大学院)

本研究では、日本で卓球が認知された1902年から1942年の間に、卓球競技者間において取り組まれた守備的打法であるカット打法について、具体的な変化と採用過程について明らかにすることを目的とする。方法として、当時出版された卓球に関する技術書を中心とし、大会記録や当時の記録が残る年史等の記述内容から検討を実施した。研究結果は以下のようにまとめられる。初期においては守備的打法としては主にショート打法が採用され、自滅を避け、相手の返球が高くなった場合にのみ強打をする戦法が採用されていた。その後は、攻撃的打法とショート打法、カット打法の3打法を基本打法としてそれらを組み合わせ、競技が行われていた。しかし、ドライブ打法といった攻撃技術を中心とした戦法で1924年の全日本選手権にて優勝した鈴木貞雄の台頭と、同氏が執筆した日本初の卓球競技に焦点を当てた技術書の出版により、攻撃的技術への認識が改まり、攻撃主体のプレースタイルが急速に発展した。このドライブ打法主体のプレースタイルに対抗する形で、カット打法を主体とするプレースタイルが広まった。1924年の鈴木が執筆した『卓球競技法』ではカット打法は下回転のみならず横回転も含めた打球の進行方向に影響を弾道が変化する打法として紹介されているが、1936年に山田孝次郎が執筆した『卓球競技法』ではカット打法は下回転をボールに与える守備的な打法として紹介され、ドライブに対してのカット打法の優位性やドライブに対するカットの用い方、カット打法による持久戦についても言及がなされている。以降、カット打法は守備を主体とする選手にのみならず、攻撃を主体とする選手にも積極的に採用され、相手の攻撃を凌ぎ、反撃機会の創出にも用いられた。結果として、カット打法は、急速に発展した攻撃打法に対抗する為に発展、普及したのち、基本打法の1つとして、広く用いられ続けることになったものと考えられる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

2025年8月29日(金) 10:30 ~ 12:25 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a503-05] 体育史／口頭発表②

座長:中村 哲也(高知大学)、関口 雄飛(日本体育大学)、尾川 翔大(岐阜薬科大学)

11:10 ~ 11:45

[01史-口-04] 兵庫県における第1回国民体育大会（1946年）の開催準備に関する研究*秋元 忍¹ (1. 神戸大学)

兵庫県は、これまで、夏季・秋季大会と冬季大会を合わせて5回の国民体育大会（以下国体）を開催してきた。本研究は、このうち、広域開催となった1946年第1回国体が、兵庫県においていかに準備されたのかについて検討しようとするものである。国体から国民スポーツ大会に名称が変更され、今後のあり方が議論されている現在、兵庫県を対象として初開催時の状況を認識しようとする試みには、地域社会と全国的総合スポーツ競技大会とのこれからの関係を展望する上で意義を見出せる。

国体史研究においては、第1回国体の創設過程を解明した村井論文があるものの、その開催準備についての個別研究は見られない。戦後日本のスポーツの通史研究においても、第1回国体の開催準備に対する関心は薄く、これらの解明に不可欠な史料発掘も進展していない。以上の研究状況を踏まえ、本研究では、秩父宮記念スポーツ図書館において近年利用可能となった、関西準備委員会『第1回国民体育大会記録』、兵庫県地区準備委員会『第1回国民体育大会兵庫県報告書』などの新史料に依拠して、兵庫県における第1回国体の開催準備の経緯について、開催地としての兵庫県選定の背景、関西準備委員会の発会と活動の展開、兵庫県地区準備委員会の対応、の3点から再構成することを課題とした。

検討の結果、以下の点が明らかになった。1946年7月、関西準備委員会が発足し、春日弘が委員長、田辺五兵衛が総務委員長を務めた。同委員会は関西スポーツ連合や電鉄会社等で構成され、第1回国体の準備を進めた。府県ごとに準備委員会が設けられ、兵庫県ではスポーツ関係者と行政が協力し、輸送は京阪神急行に一任、宿舍や配給も綿密に調整された。第1回国体開催時、大日本体育会の事業部長であった吉田清は、民間主導と評価したが、実際には行政の支援も大きく、開催成功に不可欠な要素であった。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

📅 2025年8月29日(金) 10:30 ~ 12:25 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a503-05] 体育史／口頭発表②

座長:中村 哲也(高知大学)、関口 雄飛(日本体育大学)、尾川 翔大(岐阜薬科大学)

11:50 ~ 12:25

[01史-口-05] 戦後の少年柔道に関する史的研究

全日本柔道少年団を中心に

*桐生 習作¹ (1. 公益財団法人講道館)

本研究は、第二次世界大戦後、柔道を通した子どもたちの健全育成を目的として1962年に結団された全日本柔道少年団の実態を明らかにすることを目的とする。全日本柔道少年団は現在でも指導者研修会や全国少年柔道大会などの諸事業を行い、柔道による教育活動を行っている。これまでの柔道史研究では講道館、大日本武徳会、学校などを対象とした研究が中心であり、少年や市民レベルの活動を対象としたものは少ない。柔道史研究においても、また民主的な柔道のあり方を考える上でも、全日本柔道少年団の理念や活動について明らかにすることは意義があることと考える。資料としては、主に同団が発行する「団報」等を扱う。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

⌚ 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:15 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a506-07] 体育史／口頭発表③

座長:大林 太朗(筑波大学)、都筑 真(日本女子体育大学)

13:00 ~ 13:35

[01史-口-06]

オーストリアのトップストライカーに対するナチ黨員疑惑の追究
ナチス期のプロフェッショナルアスリートに関する考察として

*鈴木 明哲¹ (1. 東京学芸大学)

13:40 ~ 14:15

[01史-口-07]

ライプチヒ学派「トレーニング論」の変遷 その5
「競技スポーツの理論と実践」 誌の分析

*綿引 勝美

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:15 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a506-07] 体育史／口頭発表③

座長:大林 太郎(筑波大学)、都筑 真(日本女子体育大学)

13:00 ~ 13:35

**[01史-口-06] オーストリアのトップストライカーに対するナチ黨員疑惑の追究
ナチス期のプロフェッショナルアスリートに関する考察として***鈴木 明哲¹ (1. 東京学芸大学)

1938年3月の併合後、オーストリアではおよそ70万人がナチに入党したとされているが、体育・スポーツ関係者らはどのようなであったのか。1936年のオリンピック・ベルリン大会におけるカヌー競技で二つの金メダルを獲得したアマチュアスポーツの国民的英雄であったラデツキーはナチ黨員及びナチ親衛隊少尉であり、「自然体育」の理論と実践を主導したウィーン大学のシュトライヒャーもまたナチ黨員であったことがすでに明らかにされている。つまりオーストリアアマチュアスポーツのトップと学校体育のトップは、ともにナチ黨員であった。では、プロフェッショナルスポーツのトップアスリートはどうであったのか。プロスポーツの状況を解明することにより、プロ及びアマチュアのスポーツ、そして体育、つまりはオーストリアの体育・スポーツ関係者のトップすべてがナチ黨員であり、またナチに迎合していた様相を明らかにすることができる。そこで本報告においては、オーストリアサッカー界において稀代のトップストライカーとして1930年代から1940年代に活躍したフランツ・ビンダー（1911-1989）のナチ黨員疑惑を追究し、考察することを目的とする。先行研究やビンダーに関する人物史によると、彼がナチ親衛隊将校であったという噂が1946年10月にハンガリーで、また同年11月にはスイスで報じられていたことが明らかにされている。だが、現在までにビンダーがナチ黨員及びナチ親衛隊員であったという確たる証拠は一切発見されておらず、彼は依然としてナチ黨員ではなかったと見なされている。こうした定説を覆すために、本報告では先行研究が見落としてきたと考えられるナチ関係文書にアクセスした。それがすなわちドイツ連邦共和国連邦文書館ベルリン・リヒターフェルデ所蔵のベルリンドキュメントセンターが収集した「ナチ黨員個人証拠書類及び党通信文書」である。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

⌚ 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 14:15 🏢 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a506-07] 体育史／口頭発表③

座長:大林 太郎(筑波大学)、都筑 真(日本女子体育大学)

13:40 ~ 14:15

[01史-口-07] ライプチヒ学派 「トレーニング論」の変遷 その5

「競技スポーツの理論と実践」 誌の分析

*綿引 勝美

本発表の目的は、1963年に発刊された「競技スポーツの理論と実践」(TPL)誌の用語分析である。既報でも指摘したように、1960年代から1970年代に、トレーニング理論の根幹をなす諸概念が整理され、トレーニング学研究の対象や方法が形作られた。TPLはこの過程を詳細に検討するための基礎資料と評価できる。応用トレーニング研究所のアーカイブで公開されており、さまざまな観点からの検討や検証が可能になっている。本研究の作業手順は既報とおなじく、原典資料を電子化し、テキストマイニングアプリKhcoderで分析できるテキストファイルを作成し、第三報で示した「トレーニング学基幹用語リスト」を加筆修正しつつ、トレーニング関連語、パフォーマンス関連語、試合などにタグ付けを行い、対応分析、共起分析などを行った。本報では前報につづき、1963年第二号と第三号の合併号を中心に、UWV(直前試合準備)に関する論文、競泳のヨーロッパ選手権での観察報告論文などを対象に、トレーニング学を構築するにあたっての、三つの対象(パフォーマンス、トレーニング、試合)の分析を進めていくための「基幹概念」の構築・生成過程を明示する。また合併号では、1964年の東京での夏季オリンピックにむけた「直前の試合準備研究プロジェクト」の報告がまとめられている。直前試合準備はトレーニングの成果を試合のなかで最高のレベルで発揮できるようにするためのさまざまな準備的トレーニングの内容を含んでいる。直前試合準備研究プロジェクトは、それまでの取組を総括しつつあらたな視点をもとに準備トレーニングが計画された。その経緯が論文としてまとめられており、トレーニング計画を構成する項目や領域の検討、実施後の省察の方法、それにもとづいた新たな仮説的計画の作成の過程を詳細に見ることができる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

⌚ 2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:45 🏢 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a508-09] 体育史／口頭発表④

座長:平塚 卓也(奈良女子大学)、池田 恵子(北海道大学)

14:30 ~ 15:05

[01史-口-08]

ドイツのスポーツ政策に関する研究

1980年代の連邦政府スポーツ報告書の分析を中心に

*寶學 淳郎¹ (1. 大阪成蹊大学)

15:10 ~ 15:45

[01史-口-09]

カンタベリー入植黎明期に行われたスポーツに関する研究

*榎本 雅之¹ (1. 滋賀大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:45 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a508-09] 体育史／口頭発表④

座長:平塚 卓也(奈良女子大学)、池田 恵子(北海道大学)

14:30 ~ 15:05

[01史-口-08] ドイツのスポーツ政策に関する研究

1980年代の連邦政府スポーツ報告書の分析を中心に

*寶學 淳郎¹ (1. 大阪成蹊大学)

わが国におけるドイツ連邦共和国（以下、ドイツ）のスポーツ政策に関する研究の多くでは、スポーツ政策の基本方針、競技スポーツ、特定の施策（ゴールドンプラン、第二の道、トリム運動等）等に焦点があてられ、国家的なスポーツ政策の全般的な内容及び変容の分析等は不十分と考えられる。本研究は、連邦政府スポーツ報告書（以下、報告書）を手懸かりに、1970年代以降の同国のスポーツ政策を検討するものである。報告書が初めて出されたのは1970年であり、それは連邦政府のスポーツ支援に関する最初の包括的な報告書であった。報告書は以後継続的に出され、重要な資料と考えられるが、先行研究では殆ど用いられていない。今回は、主に1980年代の報告書を手懸りに、1970年代の同国におけるスポーツの状況、1980年代の同国のスポーツ政策の基本方針、内容、特徴等について検討した。結果、主に次が明らかになった。

①1970年代に同国では、高水準スポーツのインフラ整備等が進展し、ドイツスポーツ連盟、ドイツオリンピック委員会はテレビくじの収益等から十分な自己資金を持ち、また、スポーツ支援を協力的、円滑に行うための組織等がつけられた。②1980年代のスポーツ政策の基本方針は、1970年代のそれとあまり変化していない。③1980年代において、連邦政府は、内務省を中心に、主に、高水準スポーツ、スポーツ施設建設、スポーツ科学、その他の領域（大衆スポーツ、障がい者スポーツ、教育制度におけるスポーツ、青少年スポーツ、連邦職員の職務・補償スポーツ）、東西ドイツスポーツ交流、発展途上国のスポーツ等を支援し、スポーツの税的支援や間接的援助・支援を行っている。④1980年代に、連邦政府は、1970年代以上に、スポーツと環境、スポーツと税、スポーツと暴力、スポーツと経済の問題に積極的に取り組もうとしている。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育史

⌚ 2025年8月29日(金) 14:30 ~ 15:45 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[3a508-09] 体育史／口頭発表④

座長:平塚 卓也(奈良女子大学)、池田 恵子(北海道大学)

15:10 ~ 15:45

[01史-口-09] カンタベリー入植黎明期に行われたスポーツに関する研究*榎本 雅之¹ (1. 滋賀大学)

ニュージーランド（以下、NZ）への入植は19世紀半ばにNZ会社が計画主導した。南島にあるカンタベリー地域は、NZ会社と理念的・人的につながりのあるカンタベリー協会によって入植が進められ、英国の宗教や階級を維持した計画的な都市建設を行おうとした点で、特徴がある。1850年に最初の移民船団が到着し、その多くがオックスフォード大学クライストチャーチ・カレッジ出身者であったことから、町をクライストチャーチと名付け、イングランド国教会の総本山であるカンタベリーを模した町づくりが行われた。

このような都市建設のなかでスポーツがどのような役割を果たしたのか。NZにおけるスポーツ史研究は、種目史やスポーツクラブの歴史などの蓄積がある。本研究で着目するカンタベリーは、英国のパブリック・スクールの影響を強く受けた形で、1870年代以降クリケットやラグビーが学校や地域のクラブで行われた。特にクライストチャーチは、計画的英国的な都市建設が計画的に行われ、スポーツにおいてもジェントルマン・アマチュアの形式を他のNZの都市に比べて強く受け継いだことが明らかにされている。一方で、これら近代スポーツを受容する1870年代以前に関する研究は乏しく、記念日や祝日に行われた集会の中で、競走などが行われた指摘にとどまる。

本研究では、近代スポーツがカンタベリーで普及する前の時期に着目し、どのようなスポーツ活動が行われ、それが都市建設の中でどのような役割を担ったのかという点について検討することにより、カンタベリーのスポーツ史の空白部分を明らかにする。そのために、1869年から1871年にかけてレクリエーション活動を運営していたPopular Amusement and Entertainment Associationの議事録や当時の新聞を用い、スポーツ活動の記録とアマチュアや階級に関する議論などを整理する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

⌚ 2025年8月29日(金) 11:20 ~ 11:45 🏠 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a602-02] 体育・スポーツ政策／口頭発表①

座長:張 寿山(明治大学)

11:20 ~ 11:45

[15政-口-01]

演題取り下げ

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

⌚ 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 13:55 🏢 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a603-04] 体育・スポーツ政策／口頭発表②

座長:関 允淑(東亜大学)

13:00 ~ 13:25

[15政-口-02]

A Paradigm Shift in Sports Policy

The National Sport Policy Committee and the First Basic Plan for the Promotion of Sport

*Suk-Kyu Kim¹, Dong-Hyun Lee² (1. Dongkuk University WISE, 2. Sangmyung University)

13:30 ~ 13:55

[15政-口-03]

アダプテッドスポーツを活用した教員養成における新たな資質能力の育成

教職履修者を対象として

*永島 昇太郎¹ (1. 帝京大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

📅 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 13:55 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a603-04] 体育・スポーツ政策／口頭発表②

座長:関 允淑(東亜大学)

13:00 ~ 13:25

[15政-口-02] A Paradigm Shift in Sports Policy

The National Sport Policy Committee and the First Basic Plan for the Promotion of Sport

*Suk-Kyu Kim¹, Dong-Hyun Lee² (1. Dongkuk University WISE, 2. Sangmyung University)

This study analyzes the paradigm shift in Korean sport policy, with a focus on the National Sport Policy Committee and the First Basic Plan for Sport Promotion, which was launched in December 2023. Discourse analysis focuses on the transition from an existing state-led, result-oriented policy framework to a participatory, rights-based sports policy structure grounded in the legal system. Specifically, the discourse analysis approach was employed to examine the committee's legal status and function, its role in policymaking and implementation, and the vision and strategic direction of the Basic Plan. The analysis also revealed the limitations and areas for improvement. The paper aims to derive policy implications for the qualitative transformation of national sport policy and explore how an effective public sports governance system can be established in the future.

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

📅 2025年8月29日(金) 13:00 ~ 13:55 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a603-04] 体育・スポーツ政策／口頭発表②

座長:関 允淑(東亜大学)

13:30 ~ 13:55

[15政-口-03] アダプテッドスポーツを活用した教員養成における新たな資質能力の育成

教職履修者を対象として

*永島 昇太郎¹ (1. 帝京大学)

アダプテッドスポーツを教材として、文部科学省が示す「我が国の教育も、知識基盤社会、国際化、人口減少社会といった時代の変化に対応することが求められ、教育を支える教員は新たな時代にふさわしい資質能力を備える必要がある」という指針を踏まえ、教員養成の課題に取り組みます。具体的には、学生が「主体的・協働的に学ぶ授業を展開する力」、「各教科横断的な視野で指導する力」、そして「学校段階間の円滑な移行を実現する力」を養成することを目指す授業について、教員免許取得希望学生を対象に展開した。そこで、教科「体育」における「学習目標」と「学習志向」の調査、さらに「IKR調査」を実施し、学生が教科「体育」をどのように捉えているか、また「生きる力」がどのように育成されているかを把握し、学習指導要領における体育科の教育目標である「心と体を一体として捉え、適切な運動経験と健康・安全についての理解を深め、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てること」を達成するための教育活動を実行できる人材を育成する上での課題を探索的に検討した。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

■ 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 15:05 ■ 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a605-06] 体育・スポーツ政策／口頭発表③

座長:高峰 修(明治大学)

14:10 ~ 14:35

[15政-口-04]

トランスジェンダー女子選手の参加資格ルールと競技の公平性

*王 婧妍¹、森 浩寿² (1. 大東文化大学大学院、2. 大東文化大学)

14:40 ~ 15:05

[15政-口-05]

中学生バドミントン登録者数の男女差に関する研究

2014~2023年の都道府県別競技人口の変化率に基づくクラスター分析

*佐久間 浩平¹ (1. 筑波大学大学院)

■ 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 15:05 ■ 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a605-06] 体育・スポーツ政策／口頭発表③

座長:高峰 修(明治大学)

14:10 ~ 14:35

[15政-口-04] トランスジェンダー女子選手の参加資格ルールと競技の公平性*王 婧妍¹、森 浩寿² (1. 大東文化大学大学院、2. 大東文化大学)

【背景・目的】近年、トランスジェンダー女子選手の女子競技への参加に関して様々な議論が起こっている。例えば、トランス女子選手が自身の性別アイデンティティに基づき、競技に参加する権利を尊重すべきであるとか、参加によって多様性が広がり女子選手全体の競技力向上につながる可能性があるといった賛成意見がある。他方で、女子選手の安全性が脅かされる恐れがあることや、競技の公平性が損なわれるといった批判的な指摘がある。IOCは2004年に性別適合手術とホルモン療法を条件としてトランス選手の五輪参加を認めた。2015年には女性競技への参加基準として、血清テストステロン値を10nmol/L未満に保ち、12か月以上維持することを定めた。多くの国際競技団体は、2021年まではこのIOCルールを採用していたが、競技の公平性を確保するために各団体が競技の特性に応じたルールの見直しを進めてきた。2022年に国際水泳連盟は思春期を男性として過ごしたトランス女子選手の女子競技への参加を認めず、血清テストステロン値を2.5nmol/L以下にする基準を導入した。2023年、国際陸上競技連盟は男性として思春期を経験したトランス女子選手の参加を禁じ、血清テストステロン値を24か月以上連続で2.5nmol/L以下に維持する基準を設けた。2024年のパリ五輪ではトランス女子選手の参加を認めず、現在遺伝子検査の導入を含むルール改正の検討を開始している。このように各団体は競技の公平性を確保するため、ルールの厳格化を進めている。【目的】本研究の目的は、①トランスジェンダー女子選手の女子競技への参加をめぐるルールの変化とその背景を明らかにすること、②競技における公平性の概念を整理し、その確保のあり方について検討すること、③トランスジェンダー女子選手の競技参加に関するルールのあり方について考察することである。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

⌚ 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 15:05 🏫 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a605-06] 体育・スポーツ政策／口頭発表③

座長:高峰 修(明治大学)

14:40 ~ 15:05

**[15政-口-05] 中学生バドミントン登録者数の男女差に関する研究
2014～2023年の都道府県別競技人口の変化率に基づくクラスター分析***佐久間 浩平¹ (1. 筑波大学大学院)

近年の少子化や部活動の地域移行政策の進展などにより中学校の運動部活動は大きく変容し、様々な課題が生じているが、個別のスポーツ種目の実態を解明している研究は少ない。また、中学校の運動部活動人口について種目における男女差を分析した研究もほとんど行われていない。特にバドミントン競技については中学生に人気のある種目であり、競技人口も大幅な減少はなく、男女でも差異があることが考えられる。そこで、本研究では、2014年から2023年の10年間ににおける中学校のバドミントン部に所属する部員数および部数の都道府県別の変化率を男女別に明らかにし、男女差を比較考察することを研究の目的とした。分析方法としては、都道府県別の中学校バドミントン部に所属する登録部員数及び部数の変化率を用いて階層的クラスター分析を行った。分析にはSPSS Statistics 30.0を用い、ユークリッド距離と平均連結法を採用した。そして、部数と部員数の変化率の相関関係を散布図により可視化し、クラスターごとの分布傾向を分析した。その結果、男子は8つ、女子は6つのクラスターに分類された。男子では佐賀や大阪など、部数・部員数ともに急増した県がある一方で、和歌山のように部員数は増加しながらも部数が減少した県もあり、また女子に比べてクラスターのばらつきが大きいことが明らかとなった。女子では、都道府県の74%が平均的なクラスターに属しており、全国的に類似した傾向があることが明らかとなった。ただし、男女で同一の傾向を示した都道府県は鳥取と宮崎の2県にとどまり、45都道府県で男女で異なる傾向があることが明らかとなった。これらの結果から、中学生のバドミントン競技人口は、都道府県ごとに異なり、男女差が生じており、男女差が生じる背景として都道府県ごとの個別の要因があることが示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

■ 2025年8月29日(金) 15:20 ~ 16:15 ■ 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a607-08] 体育・スポーツ政策／口頭発表④

座長: 沖村 多賀典(名古屋学院大学)

15:20 ~ 15:45

[15政-口-06]

自治体のスポーツ鬼ごっこ導入による運動能力と意欲・対人関係の変容に関する実践報告
富里市における幼児期・学童期での鬼ごっこを通じた連携プログラムの成果と展望

*羽崎 貴雄¹ (1. 一般社団法人鬼ごっこ協会)

15:50 ~ 16:15

[15政-口-07]

競技者アイデンティティと実力発揮度の関連

大学生アスリートにおける競技レベル別の検討

*島津 頼夢¹、中村 美幸²、川田 裕次郎^{1,2,3}、高澤 祐治^{1,2,3}、室伏 由佳^{1,2} (1. 順天堂大学スポーツ科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部、3. 順天堂大学スポーツ健康医科学研究所)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育・スポーツ政策

■ 2025年8月29日(金) 15:20～16:15 ■ 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a607-08] 体育・スポーツ政策／口頭発表④

座長:沖村 多賀典(名古屋学院大学)

15:20～15:45

[15政-口-06] 自治体のスポーツ鬼ごっこ導入による運動能力と意欲・対人関係の変容に関する実践報告

富里市における幼児期・学童期での鬼ごっこを通じた連携プログラムの成果と展望

*羽崎 貴雄¹ (1. 一般社団法人鬼ごっこ協会)

本報告では、富里市が実施した「鬼ごっこを取り入れた幼児期の運動遊び支援事業」および「小学校体育でのスポーツ鬼ごっこ導入」の取組について、体力面のみならず心理・社会的効果を含めた成果を報告する。幼児期には市立幼稚園・こども園4園の4.5歳児206名を対象に、年間34回の鬼ごっこ遊びを実施し、25m走、立ち幅跳び等5項目で6～19%の向上を確認した。小学校では7校の小学校1.2年生281名を対象に体育授業で導入し、50m走の平均タイムが導入前比で6～10%改善したほか、県平均を超える結果が複数項目で確認された。さらに児童アンケートでは、「運動が得意になった」と感じた児童が多数を占め、体育の授業で「スポーツ鬼ごっこが楽しかった」と回答した割合も95%を超え、運動に対するポジティブな意識変容が見られた。また、作戦タイムを通じて「自分の意見を言えた」「友達と協力できた」と感じた子も多く、コミュニケーション能力や自己肯定感の向上も確認された。こうした成果は、スポーツ鬼ごっこのゲーム性と全員参加型の構造、セルフジャッジによる自律性育成によるものである。今後は小学3年生への拡大や親子参観の導入により、教育・家庭の連携を深め、子どもの心身の総合的発達に資する取組として定着を図っていく。

■ 2025年8月29日(金) 15:20 ~ 16:15 ■ 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[3a607-08] 体育・スポーツ政策／口頭発表④

座長:沖村 多賀典(名古屋学院大学)

15:50 ~ 16:15

[15政-口-07] 競技者アイデンティティと実力発揮度の関連

大学生アスリートにおける競技レベル別の検討

*島津 頼夢¹、中村 美幸²、川田 裕次郎^{1,2,3}、高澤 祐治^{1,2,3}、室伏 由佳^{1,2} (1. 順天堂大学スポーツ科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部、3. 順天堂大学スポーツ健康医科学研究所)

背景

近年、タレント発掘や競技者育成において、教師や指導者の支援の在り方が国際的に検討され、学業と競技の両立に関わる心理的特性として、アイデンティティの重要性が示されている。青年期後期に達した大学生では、学業及び競技のアイデンティティが一定程度形成されており、こうした自己認識と競技における実力発揮度との関係を競技レベル別に明らかにすることは将来的な育成支援への示唆となる。

目的

大学生アスリートを対象に、学業及び競技アイデンティティと自身の競技における実力発揮度との関連を明らかにすること。

方法

スポーツ系の学部 zu 所属する大学生アスリート（全国レベル未満：202名、全国レベル以上：208名）を対象とした。調査項目は、性別、競技種目等の属性情報に加え、日本語版学生競技者アイデンティティ尺度（AAIS-J；学業・競技アイデンティティの2因子）と現在の競技種目に関する実力発揮度（「1全くできていない」～「6とてもできている」）を含む。分析には、AAIS-J各因子と実力発揮度との間のピアソンの積率相関係数を競技レベル別に算出した。

結果

全国レベル以上群において、学業アイデンティティ（ $r = .322, p < .001$ ）は実力発揮度との間に中程度、同様に競技アイデンティティ（ $r = .231, p < .001$ ）との間に相関を示した。全国レベル未満群では、有意な相関ではあったが、いずれも弱かった（ $r = .140, p = .048$ ； $r = .203, p = .004$ ）。

考察・結論

全国レベル以上のアスリートは、全国レベル未満と異なる傾向を示し、学業アイデンティティが実力発揮度と中程度の相関を示した。この結果は、全国レベル以上のアスリートにおいて、学業アイデンティティが実力発揮に貢献している可能性を示唆する。この知見は、タレント発掘や競技者育成の初期のフェーズから学業アイデンティティに着目した支援の導入を検討することに資する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

■ 2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

9:40 ~ 9:54

[13ア-口-01]

大学生のデフスポーツに対する意識変容 2

ろう・難聴者とのスポーツ経験の有無に着目して

*赤羽根 颯河¹、齊藤 まゆみ¹、中島 幸則² (1. 筑波大学 、2. 筑波技術大学)

9:55 ~ 10:09

[13ア-口-02]

運動部活動経験が信念およびアダプテッドの考え方に及ぼす影響

体育教師を志望する学生を対象に

*平間 千晴¹、村上 祐介² (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学)

10:10 ~ 10:24

[13ア-口-03]

弱視者の動的バランス能力に影響を与える要因の検討

*朝海 仁美¹、齊藤 まゆみ² (1. 株式会社パソナグループ、2. 筑波大学)

10:25 ~ 10:39

[13ア-口-04]

国内ブラインドサッカー大会における頭部接触の実態と安全性に関する一考察

*相川 貴裕¹、河野 喬¹、原 幸輝²、加地 信幸¹ (1. 広島文化学園大学、2. 広島文化学園大学大学院人間健康学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

9:40 ~ 9:54

**[13ア-口-01] 大学生のデフスポーツに対する意識変容 2
ろう・難聴者とのスポーツ経験の有無に着目して***赤羽根 颯河¹、齊藤 まゆみ¹、中島 幸則² (1. 筑波大学 、2. 筑波技術大学)

昨年の学会大会では、デフスポーツに関する講義が、ろう・難聴者への理解とろう・難聴者のスポーツにおけるコミュニケーションの要素を含むことが、受講者に対してろう・難聴者への興味・関心につながることを報告した。先行研究より、対象者の障害当事者とのスポーツ経験の有無が、障害者への理解や興味・関心につながると示唆されている。以上より、本研究の目的は、デフスポーツに関する講義がろう・難聴者への興味・関心に与える影響について、スポーツ経験の有無に着目し検討することとした。対象はスポーツ系、医療系、教育系の学部に所属する12大学の大学生586名である。調査方法はデフスポーツに関する出前講義として1コマ分の授業を行い、講義の前後でアンケート調査を実施した。講師はろう・難聴者と聴者がそれぞれ担当した。調査内容はろう・難聴者とのスポーツ経験の有無、デフスポーツへの興味・関心であった。デフスポーツへの興味・関心については6項目を4件法で回答を求めて、とてもそう思うを3点、そう思うを2点、そう思わないを1点、全くそう思わないを0点とし、「スポーツ経験有り群」、「スポーツ経験無し群」に分けて混合分散分析を行った。分析にはIBM SPSS Statistics ver30 for Winを用いた。その結果、「スポーツ経験有り群」と「スポーツ経験無し群」とでは、6項目中5項目で被験者内効果と被験者間効果において有意な差が見られた。しかし交互作用では有意な差は認められなかった。本研究のデフスポーツに関する講義は、スポーツ経験の有無に関わらず、ろう・難聴者への興味・関心が高まるが、ろう・難聴者とのスポーツ経験は、ろう・難聴者への興味・関心によりポジティブな影響を与えることが推察される。今後は、スポーツ体験を含むプログラムの検討が必要である。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

■ 2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

9:55 ~ 10:09

[13ア-口-02] 運動部活動経験が信念およびアダプテッドの考え方に及ぼす影響
体育教師を志望する学生を対象に*平間 千晴¹、村上 祐介² (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学)

誰もが楽しめる体育のためには、体育教師がアダプテッドの考え方を持つ必要がある。しかし、体育教師は信念のタイプによってアダプテッドの考えが受け入れづらくなっている可能性がある。信念が形成される経験の中でも、体育教師においては運動部活動の存在が大きいと考えられる。そのため、今後アダプテッドの考え方を体育教師に浸透させていくには、運動部活動の経験と信念の関係性を知る必要がある。そこで本研究では、運動部活動の経験がどのような信念を形成し、それがアダプテッドの考え方の受容に繋がっているのかを明らかにすることを目的とした。調査はアンケートを用いて行い、分析対象はスポーツ系大学に通う教員免許取得予定の174名とした。調査項目は、主に、教師イメージと仕事の信念(朝倉・清水,2014)、高校・大学での競技歴と競技者アイデンティティ(磯貝ら,2001)、アダプテッド・スポーツへの意思に関する項目(齊藤,2022)を設定した。結果として、教師イメージと仕事の信念について分析したところ、有意な差があり、管理者型には閉鎖的信念型が最も多く、支援者型には生徒重視型と開放的信念型が多かった($\chi^2(4, N=174)=29.399, p<.001$)。次に、仕事の信念と高校時代の競技者アイデンティティについて分析したところ、有意な差があり、競技者アイデンティティが高い群には開放的信念型が多く、低い群には閉鎖的信念型が多かった($\chi^2(4, N=169)=12.220, p<.05$)。これらのことから、体育教師を志望する学生において、教師イメージと仕事の信念の関係は先行研究で示された体育教師と大きく変わらないが、仕事の信念は高校時代の運動部活動経験によって変わる可能性が示唆された。それらを踏まえ、運動部活動経験と信念、アダプテッドの考え方の関係について考察した。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

10:10 ~ 10:24

[13ア-口-03] 弱視者の動的バランス能力に影響を与える要因の検討*朝海 仁美¹、齊藤 まゆみ² (1. 株式会社パソナグループ、2. 筑波大学)

視覚情報や過去の運動経験が動的バランス能力に影響を与えることが、健常者では明らかになっている。しかし弱視者を対象にした研究では、静的バランスに関係するものは散見されるが、動的バランスを取り上げたものは管見の限りでは確認されず、弱視者が動的状況で姿勢維持を行う際に影響を与える要因が明らかになっていない。そこで本研究では弱視者の動的バランス能力に影響を与える要因について、学齢期の運動経験と視覚情報という2つの要因に着目して検討した。対象は弱視11名と健常20名の大学生とし、アンケート調査及び動的バランステストを実施した。動的バランステストは窪田ら(2012)が提示した測定器具を援用して実施し、全3回の動的バランステストで得られたスコアのうち、最小値を除いた2つのスコアの平均を動的バランススコアとして算出した。その結果、弱視者において学齢期の運動経験と動的バランススコアとの間に関連性は認められなかったが、弱視の程度と動的バランススコアとの間には関連が認められた。一方で、健常者においては学齢期の運動経験と動的バランススコアに関連が認められ、学齢期の運動経験が動的バランス能力に影響を及ぼす要因であることが、本研究で用いた動的バランステストからも確認された。これらのことから、弱視者の動的バランス能力に影響を及ぼす要因は、学齢期の運動経験よりも視覚情報であると考えられた。さらに弱視者のアンケート結果から、中学校期から球技種目が増えることや思春期の影響から運動への困難さが目立つようになることが示された。そのため、特に中学校期からの運動経験の質が下がることも動的バランス能力に影響があると考えられた。

■ 2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

10:25 ~ 10:39

[13ア-口-04] 国内ブラインドサッカー大会における頭部接触の実態と安全性に関する一考察

*相川 貴裕¹、河野 喬¹、原 幸輝²、加地 信幸¹ (1. 広島文化学園大学、2. 広島文化学園大学大学院人間健康学研究科)

ブラインドサッカーは視覚を遮断した状態で行われるゴール型競技のため、パラスポーツの中でも特に頭部外傷リスクが高い競技とされる。堤ら(2023)は、東京2020パラリンピックにおいて、1試合あたり平均52件の頭部接触があったと報告し、安全性の確保が重要な課題となっている。一方、国内大会における接触実態の把握は進んでいない。

本研究では、2023～2024年度に開催された日本ブラインドサッカー協会主催の西日本リーグ15試合を対象に、試合映像を用いて頭部接触の発生状況を分析した。評価はブラインドサッカー経験のあるトレーナー3名が担当した。分析の結果、1試合あたりの頭部接触件数は平均14.2件であり、国際大会に比べて明らかに少ない傾向が示された。

この背景には、競技レベルの違いに起因する移動距離やスピードの差があると考えられる。先行研究では、フットサルやサッカーにおいてエリート選手ほど移動距離や高強度運動量が多いことが報告されており、ブラインドサッカーにおいても同様の傾向が推測される。

また、三枝ら(2020)は、熟練選手ほどトラップ時に下向きの頭部角度が大きいと報告しており、こうした姿勢が頭部を接触のラインに入れやすくする可能性がある。国内大会に出場する選手ではこのような姿勢が未習得である者が多いため、接触自体が起こりにくい構造となっていると考えられる。

さらに、視覚障害者は運動時に恐怖心を抱きやすく、その影響で重心が後傾し、手足が前に出る防御的な動作パターンが生じやすいことも接触回避の一因と考えられる。

今後は競技力向上に伴うリスク増加を見据え、予防教育、安全な姿勢・動作指導、装備対応を含めた包括的な対策が求められる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

📅 2025年8月29日(金) 10:50 ~ 11:49 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a705-08] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表②

座長:曾根 裕二(大阪体育大学)

10:50 ~ 11:04

[13ア-口-05]

神戸市立中学校における「特別な配慮が必要な生徒」のスポーツ環境
通常学級の障害種別出現パターンによる類型別特徴

*金山 千広¹、瀬川 海¹ (1. 立命館大学)

11:05 ~ 11:19

[13ア-口-06]

KUNDE柔道が晴眼者の柔道の技術向上に与える影響

*瀬戸 勇次郎¹、齊藤 まゆみ² (1. 福岡県立糸島高等学校、2. 筑波大学)

11:20 ~ 11:34

[13ア-口-07]

障害児者を対象としたアダプテッド・スポーツ実践の検討

Standup paddleboard (SUP) のレース出場にむけた取り組み

*加地 信幸¹、河野 喬¹、小川 海希都²、相川 貴裕¹ (1. 広島文化学園大学、2. 広島市立広島特別支援学校)

11:35 ~ 11:49

[13ア-口-08]

我が国の障害者スポーツの施策の変遷

2020東京大会を中心に

*藤田 紀昭¹ (1. 日本福祉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 10:50 ~ 11:49 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a705-08] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表②

座長:曾根 裕二(大阪体育大学)

10:50 ~ 11:04

[13ア-口-05] 神戸市立中学校における「特別な配慮が必要な生徒」のスポーツ環境

通常学級の障害種別出現パターンによる類型別特徴

*金山 千広¹、瀬川 海¹ (1. 立命館大学)

「地域スポーツ・文化芸術創造と部活動改革に関する実行会議」最終報告では、部活動の地域展開において障害の有無にかかわらず活動機会を保障することを基本理念の一つとしている。この理念に通じる「インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」（文科省、2012）では、合理的配慮や個別支援、教育資源の柔軟な活用が掲げられたが、実施体制の違いにより都道府県間格差が顕在化した。本研究が対象とする、兵庫県・神戸市は特別支援学級の設置率が高い地域である。本研究では神戸市立中学校を対象に、通常学級に在籍する「特別な配慮が必要な生徒」の障害種別出現パターンをもとにクラスター分析（ワード法、平方ユークリット距離）を行い、類型別にインクルーシブなスポーツ環境を把握することを目的とした。調査は市立中学校の全てを対象に、各校毎特別支援教育に精通した教員1名が無記名で記入する形で実施し、57校から回答を得た（回収率71.2%）。すべての中学に特別支援学級が設置され、生徒の在籍率平均は2.29%であった。大半の学校でインクルーシブ体育が行われており、特別支援学級のみで実施している学校は1校にとどまった。さらに、特別な配慮が必要な生徒は9割の学校で部活動に参加し、運動部に参加する生徒のうち88%が対外試合にも出場していた。これらの生徒は、周囲の理解のもとで競技のルールを理解しながら積極的にプレーしていると考えられる。一方で、2026年度に予定されている地域クラブ活動（コベカツ）への移行に際し、こうした生徒の参加機会確保に関する具体的支援策は十分に検討されていないことが課題として浮上している。クラスター分析の結果、「肢体不自由対応型」「多様型」「不在型」「未分類対応型」の4類型が抽出された。発表では、これらの類型別にみたスポーツ環境の特徴と、部活動地域展開への対応課題を報告する。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 10:50 ~ 11:49 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a705-08] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表②

座長:曾根 裕二(大阪体育大学)

11:05 ~ 11:19

[13ア-口-06] KUNDE柔道が晴眼者の柔道の技術向上に与える影響*瀬戸 勇次郎¹、齊藤 まゆみ² (1. 福岡県立糸島高等学校、2. 筑波大学)

国内の視覚障害者柔道における諸課題を解決する手段のひとつとして、視覚障害の有無にかかわらず互いに組み合った状態から始める「KUNDE柔道」を発案した。KUNDE柔道を普及させるためには、晴眼者が組んで始める柔道を継続的に実践する動機を提示する必要があると考え、KUNDE柔道の技術に着目した。本研究の目的は、KUNDE柔道の実践によって変化、向上する柔道の技術を明らかにすることである。対象と方法については、大学柔道部に所属する晴眼の柔道部員7名に対して、3週間の稽古における乱取り稽古をKUNDE柔道によるものに置き換えて実施し、それによって変化、向上した柔道の技術について半構造化インタビューを行った。インタビューから得られた質的データは『語り』として処理を行いテーマティック・アナリシス法を用いて分析した。分析の結果、【組み方の違い】などのKUNDE柔道の特性を示す6つのテーマと、【技や技術の変化】などのKUNDE柔道の効果を示す4つのテーマ、合わせて10のテーマとそれらを構成する38のサブテーマが生成された。語りをもとに考察を行い柔道の技術の観点から再構成したところ、KUNDE柔道の実践によって「組み手の選択肢の増加」、「優位な状態を作る技術の向上」、「技の向上」の3つの事項で技術が向上することが示唆された。また、これらの技術を向上させるためにKUNDE柔道が有用な稽古方法であること、KUNDE柔道の実践が、柔道に必要な体力要素の向上と、組手争いのある乱取りの質を向上させることも示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

📅 2025年8月29日(金) 10:50 ~ 11:49 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a705-08] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表②

座長:曾根 裕二(大阪体育大学)

11:20 ~ 11:34

[13ア-口-07] 障害児者を対象としたアダプテッド・スポーツ実践の検討

Standup paddleboard (SUP) のレース出場にむけた取り組み

*加地 信幸¹、河野 喬¹、小川 海希都²、相川 貴裕¹ (1. 広島文化学園大学、2. 広島市立広島特別支援学校)

本研究では、障害児者を対象としたアダプテッド・スポーツ実践の中でも例の少ないウォータースポーツのうち、海上で実施するStandup paddleboard (SUP) に焦点を当て、筆頭筆者が開発した障害児者SUP用具、および指導法の工夫による、西日本SUP大会におけるユニバーサルサップ部門へのレース出場に係る取り組みについて報告する。調査の方法は、SUPレースに参加した障害者（アンケート回答が可能な肢体不自由者・成人）3名、およびボランティア10名を対象に事後アンケート調査を実施した。調査の結果、SUP大会へ出場したことについて、障害者からは「SUP練習も本番も楽しかった。海で風を感じて気持ちよかった。」「普段からSUP練習をしているのでレースに出場できて良かった。」等、肯定的な回答を得た。ボランティアからは「考案されたフロート付きSUPがあり安心して参加できた。」「誰でも海を楽しめる点がとても良い。」等、肯定的な回答を得た。一方では、「波がとても高くSUPには結構ハードルが高く苦戦した。」「波に覆われることが数回あったので自然がいかに危険であることが分かった。」「波と風等の天候を予測する事が難しいので、安心、安全かつ信頼性を持ってもらえる人になりたいと思った。」「難しいコンディションでも支援できる力を身に付けるためにもSUP練習が必要。」「岸からボードへの障害者移動がもっとスムーズに出来ると良い。」等、自然を相手にした海上でのSUPに対する課題も挙げられた。しかし、開発した障害児者SUPが「体験」ではなく、一般のSUP大会において障害者が健常者と共に「レース出場」を果たしたことは価値が高いと考える。検証の結果、障害者の障害の状態等に応じて、スポーツが可能となるよう用具、指導法等を工夫したスポーツ提供の場、および指導者の技術向上と指導者養成が重要であることが示唆された。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:50 ~ 11:49 🏢 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a705-08] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表②

座長:曾根 裕二(大阪体育大学)

11:35 ~ 11:49

**[13ア-口-08] 我が国の障害者スポーツの施策の変遷
2020東京大会を中心に***藤田 紀昭¹ (1. 日本福祉大学)

本研究発表では東京2020パラリンピック開催決定前後から今日までの障害者スポーツに関わる国の施策の変遷と予算の推移をたどる。この間の政策は東京パラリンピックが開催されなければ起こりえなかったであろう。しかしながらこれらはパラリンピック大会開催のみによるレガシーというよりは、スポーツ基本法の制定を起点とした障害者スポーツ推進の流れを東京パラリンピックの開催が強く後押しした結果と理解すべきである。

スポーツ基本法制定前、我が国の障害者スポーツ振興は厚生労働省によって担われていた。障害者基本法の第25条において障害者スポーツは障害者の生活の質的向上や社会参加を促進する事業として位置づけられていた。障害者スポーツの普及や強化とは異なる目的であった。つまり、障害者スポーツは社会参加のための手段であって、障害者スポーツの普及や選手を強化するための大義はないため、オリンピックスポーツとの一体的な施策展開や予算措置を講ずることはできなかった。

2016年のオリンピック・パラリンピック招致を機にスポーツ基本法の制定の機運が高まった。しかし、2009年、東京承知は失敗に終わる。2年後の2011年にそれまでのスポーツ推進のよりどころであったスポーツ振興法を全面改正したスポーツ基本法が制定された。障害者スポーツの普及と強化の法的根拠となり、障害者スポーツの推進は大きく進むことになる。

2012年にスポーツ基本計画が発表され、2013年に東京大会招致が決定する。2014年には障害者スポーツの管轄がリハビリテーション関連を除き、文科省に移管される。翌2015年にスポーツ庁が創設された。本発表ではこの間の国の障害者スポーツ施策の変遷と障害者スポーツ関連予算の推移（2014年～2024年）について明らかにし、2016年の招致失敗が我が国の障害者スポーツ推進にとって追い風になった可能性について述べる。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：運動生理学

⌚ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:13 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a801-05] 運動生理学／口頭発表①

座長:須永 美歌子(日本体育大学)

9:00 ~ 9:13

[04生-口-01]

パワーリフティング選手におけるマウスガード使用が肩関節等速性筋力に及ぼす影響

*菅嶋 康浩¹、石田 直章²、大森 俊和¹ (1. 朝日大学、2. 愛知学院大学)

9:15 ~ 9:28

[04生-口-02]

性差が運動後低血圧に及ぼす影響

*土橋 康平¹、松田 知華² (1. 北海道教育大学、2. 名古屋大学)

9:30 ~ 9:43

[04生-口-03]

ワンサイドスカッシュを通した小学校3年生の心理尺度と唾液セロトニン濃度の変化

*時野谷 勝幸¹、梅澤 秋久¹、出越 拓磨² (1. 横浜国立大学、2. 附属鎌倉小学校)

9:45 ~ 9:58

[04生-口-04]

月経周期における腸内細菌叢由来代謝産物と運動パフォーマンスの関連

月経周期における腸内環境とパフォーマンス

*松生 香里¹、森山 進一郎²、須永 美歌子³ (1. 周南公立大学、2. 東京学芸大学、3. 日本体育大学)

10:00 ~ 10:13

[04生-口-05]

競泳におけるインターバルトレーニング中の深部体温とパフォーマンスについて

*島谷 康弘¹、杉田 正明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学体育学部)

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:13 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a801-05] 運動生理学／口頭発表①

座長:須永 美歌子(日本体育大学)

9:00 ~ 9:13

[04生-口-01] パワーリフティング選手におけるマウスガード使用が肩関節等速性筋力に及ぼす影響*菅嶋 康浩¹、石田 直章²、大森 俊和¹ (1. 朝日大学、2. 愛知学院大学)

背景と目的: パラパワーリフティング競技では、最大重量挙上には安定した動作が不可欠である。競技スポーツでは、歯や口腔保護と噛み合わせ改善のためマウスガード (MG) 使用が推奨されており、MG装着による筋力増加も報告されている。本研究は、MG装着が肩等速性筋力に与える影響を筋電図学的に検証した。方法: 大学生ラグビー選手男子11名を対象とし、Biodexを用いて肩等速性筋力を60°/s、120°/s、180°/sの速度で、短縮性収縮による座位での対角運動（腕振り上げ－腕振り下ろし）を連続5回計測した。計測条件は、①MG未装着 (NMG) 右肩筋力、②NMG左肩筋力、③MG装着 (MG) 右肩筋力、④MG左肩筋力の4条件であった。筋力計測時に、左右の咬筋、三角筋、大胸筋から筋電図 (EMG) を導出記録した。筋量、関節可動域、肩等速性筋力（最大トルク/体重、立ち上がりトルク、最大トルク発生時間）、およびRMSを解析した。結果と考察: 筋量、筋厚、関節可動域に利き手と非利き手間の有意差はなかった。肩等速性筋力において、体重当たり最大トルクおよび立ち上がりトルクの非利き手/利き手比がMG装着により有意に変化した。また、最大トルク発生時間も有意に短縮した。動作中のEMG活動は、三角筋は腕の振り上げ、大胸筋は振り下ろしの局面でそれぞれ活動し、咬筋は両局面で活動していた。RMSでは、MG装着時に咬筋活動が両局面で有意に増大した他、三角筋は腕振り上げ局面で、大胸筋は振り下ろし局面でそれぞれ有意に活動が増大した。この咬筋活動の増大は、噛みしめが脊髄運動神経の興奮性を亢進させ、筋活動を増強するという既報と一致する可能性があった。MGは噛み合わせの改善を通じて筋活動を増強し、筋力、特に初動時の筋力増大と利き手・非利き手の筋力バランス改善をもたらす可能性が示唆された。

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:13 ■ 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a801-05] 運動生理学／口頭発表①

座長:須永 美歌子(日本体育大学)

9:15 ~ 9:28

[04生-口-02] 性差が運動後低血圧に及ぼす影響*土橋 康平¹、松田 知華² (1. 北海道教育大学、2. 名古屋大学)

【背景】長時間の動的運動後には動脈血圧が運動前よりも低下する運動後低血圧が生じる場合がある。運動後低血圧は運動後失神の要因の一つと考えられているため、運動後低血圧を誘発する要因を明らかにすることは重要である。運動後低血圧を検討した多くの研究では男性被験者を対象としており、性差が運動後低血圧に及ぼす影響は明らかではない。【目的】本研究では性差が運動後低血圧に及ぼす影響を検討することを目的とした。【方法】被験者は健康な成人男性12名および女性13名(卵胞期初期)を対象とした。30分間の安静を取ったのち、60分間の自転車運動(70%最高酸素摂取量強度)を行った。その後、30分間のリカバリーをとった。動脈血圧において、運動前安静時は10分毎、運動後の回復期は5分毎に測定した。運動後の血圧の最小値の出現が被験者間で異なっていたため、運動前安静時の平均値から血圧の最大低下量を計算し、運動後低血圧の程度を算出した。【結果】運動前安静時から運動後における平均動脈血圧(-8.3 ± 4.7 vs. -4.1 ± 6.0 mmHg) および拡張期血圧(-7.5 ± 4.2 vs. -3.4 ± 4.2 mmHg) の最大変化量は女性よりも男性で有意に大きく(both $P < 0.03$)、収縮期血圧の最大変化量は女性よりも男性で大きい傾向を示した(-11.9 ± 7.7 vs. -6.4 ± 5.6 mmHg, $P = 0.053$)。また、平均動脈の最大変化量は最高酸素摂取量と負の相関が見られた($r = -0.453$, $P = 0.023$)。【結論】持久性運動後の運動後低血圧の程度は女性よりも男性で大きいことが明らかとなった。また、運動後低血圧の程度の差は有酸素性能力(i.e., 最高酸素摂取量)に関連していることが示唆された。

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:13 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a801-05] 運動生理学／口頭発表①

座長:須永 美歌子(日本体育大学)

9:30 ~ 9:43

[04生-口-03] ワンサイドスカッシュを通した小学校3年生の心理尺度と唾液セロトニン濃度の変化*時野谷 勝幸¹、梅澤 秋久¹、出越 拓磨² (1. 横浜国立大学、2. 附属鎌倉小学校)

【背景】学校教育は時代の変化に合わせて指導方針を変遷させてきた。特にVUCA時代において、新たな教育の在り方が求められている。近年、ウェルビーイングの概念が教育現場において重要視されており、身体的、精神的、社会的に良好な状態を意味するこの概念の実践が、豊かな未来の創造に繋がるとされている。特にストレスフリーな健康的ライフスタイルの重要性が指摘されており、唾液を用いた非侵襲的なストレス評価が教育現場での応用が期待できる。唾液セロトニン濃度は、別名幸せホルモンと呼ばれ、運動やストレスの軽減によって、分泌が促進されることが知られている。【目的】本研究の目的は、小学生を対象とした体育授業の単位を通して、幸福感の変化を明らかにすることである。具体的には、授業前後の唾液中セロトニン濃度を測定し、さらに心理指標を用いて心身の自己調整に関する変化を明らかにする。【方法】研究対象は、保護者の同意を得た24名の小学校3年生であり、唾液の分析には13名を対象に実施した。対象とした単位は、ボール運動系であるワンサイドスカッシュを全5回の構成で行った。測定は、5回の授業のうち、1回目、3回目、5回目の授業前後に実施した。授業前後に唾液を採取し、セロトニン濃度を測定した。また、心理的な変化を評価するため、二次元気分尺度（子ども用）を使用して、授業前後に測定用紙に記入した。【結果・考察】授業前後での快適な気持ちは、運動後に有意に上昇する結果が得られた。一方で、唾液中のセロトニン濃度は、授業前後で有意に低下するという結果が得られた。この結果は、体育授業を通して身体的な活動が心理的な状況下では、快適な気分になっていることが明らかとなった。一方で生化学的な指標であるセロトニンが低下した理由は、他の唾液ストレスマーカーなども測定して、包括的に今後検討していく余地がある。

2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:13 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a801-05] 運動生理学／口頭発表①

座長:須永 美歌子(日本体育大学)

9:45 ~ 9:58

[04生-口-04] 月経周期における腸内細菌叢由来代謝産物と運動パフォーマンスの関連

月経周期における腸内環境とパフォーマンス

*松生 香里¹、森山 進一郎²、須永 美歌子³ (1. 周南公立大学、2. 東京学芸大学、3. 日本体育大学)

【背景】女性では月経周期におけるホルモン動態によって、消化器系の状態などコンディションに変化がみられる場合がある。これらの体調の悪化は、日常的にスポーツ活動を実施している選手ではパフォーマンス発揮への影響が懸念される。

【目的】月経周期における腸内環境の変化に注目し、月経周期の各フェーズで腸内細菌が産生する代謝産物を調べ、運動パフォーマンスとの関連を比較し、トレーニング時の対策に還元できる基礎資料を得ることを目的とした。

【方法】対象者は正常な月経周期を有する運動習慣のある健康成人女性とした。月経周期は基礎体温法と排卵日予測検査薬を用いて、黄体期、卵胞期、月経期を確認した。また、月経周期の3フェーズで各対象者の糞便を採取し、腸内細菌の代謝産物を比較した。加えて、採便時の便の形状変化を調べるために、Bristol stool scaleを用いて対象者が質問票にて回答した。運動パフォーマンスは、月経周期の各フェーズで試合をモデル化し、60%HRmax強度の有酸素運動（ウォーミングアップ）を30分実施し、その後、最大無酸素性パワーテスト（パフォーマンス発揮）を実施した。また、有酸素運動中の酸素摂取量と呼吸交換比から糖質と脂質のエネルギー代謝量を算出した。

【結果とまとめ】有酸素運動時の糖質と脂質代謝量および、無酸素性パフォーマンスの発揮には、月経周期による違いはみられなかった。便の形状は、月経期と卵胞期に便秘または下痢様の状態を示した対象者が多い傾向を示した。また、大腸上皮細胞の炎症抑制や腸管のバリア機能を担っており、短鎖脂肪酸の一種である酪酸は、月経期、卵胞期、黄体期の順に増加する傾向がみられた。これらの結果から、月経周期における運動パフォーマンスへの影響はみられなかったものの、便形状や酪酸の変化がみられたことから、大腸上皮組織の防御機能と関連している可能性が考えられた。

■ 2025年8月29日(金) 9:00 ~ 10:13 ■ 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a801-05] 運動生理学／口頭発表①

座長:須永 美歌子(日本体育大学)

10:00 ~ 10:13

[04生-口-05] 競泳におけるインターバルトレーニング中の深部体温とパフォーマンスについて*島谷 康弘¹、杉田 正明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学体育学部)

深部体温が適度に上昇することは、身体パフォーマンスの向上に寄与することが知られているが、過度な体温上昇はパフォーマンスの低下を引き起こすことが報告されている。近年では、競歩において深部体温上昇を抑制することを目的としたクーリング対策を実施した研究が報告されているが、競泳においてトレーニング中の深部体温上昇を抑制することを目的とした研究はほとんど見受けられず、競泳のトレーニング時における深部体温は不明である。競泳のインターバルトレーニング中の深部体温が陸上運動時と同様な結果を示すとすれば、競歩などで実施しているクーリング対策を競泳でも活用することができるのではないかと考える。そこで本研究では、競泳のインターバルトレーニング中における深部体温を測定し、深部体温とパフォーマンスについて検討することを目的とした。対象は、N大学で練習を実施している健康な男子競泳選手9名とし、実験中の水温は28.3℃であった。実験のプロトコルは、日頃実施しているインターバルトレーニングメニューとした。測定項目は各本数の記録、深部体温（直腸温）、心拍数、自覚的運動強度(以下RPE)、温熱感覚（0：非常に寒い～8：非常に暑い9段階）、給水量、体重、血中乳酸濃度、および尿比重とした。インターバルトレーニング中の対象者全員の深部体温の最高値は39℃以上を示し、最も深部体温が高い人は39.62℃を示した。また、トレーニング終了時のRPEは 18.3 ± 1.9 、温熱感覚は 7.1 ± 0.9 を示し、多くの選手で最高値に近い値を示した。陸上と異なった環境下で行う水中運動時の深部体温は水温によって大きく左右されることが報告されているが、本研究において、水温約28℃の環境では、パフォーマンスが低下する深部体温の指標とされている40℃までは上がらず、最後までトレーニングを実施することができた。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：運動生理学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:25 ~ 11:23 🏠 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a806-09] 運動生理学／口頭発表②

座長:土橋 康平(北海道教育大学)

10:25 ~ 10:38

[04生-口-06]

カフェイン摂取が800m走パフォーマンスに及ぼす影響

*佐々木 健成¹、土橋 康平²、森田 憲輝² (1. 北海道教育大学大学院、2. 北海道教育大学)

10:40 ~ 10:53

[04生-口-07]

国内トップレベルのローイング選手における酸素摂取動態と運動パフォーマンスとの関連

*小泉 潤¹、波多野 慶¹、中村 真理子¹、松林 武生¹ (1. 国立スポーツ科学センター/ハイパフォーマンスセンター)

10:55 ~ 11:08

[04生-口-08]

大学男子柔道選手における減量が動脈スティフネスに及ぼす影響

*小芝 裕也¹、前島 悦子¹ (1. 大阪体育大学)

11:10 ~ 11:23

[04生-口-09]

早期 vs 遅延型時間制限食

運動なしでも体力は向上するのか？

*于 自富¹ (1. 広島大学人間社会科学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：運動生理学

2025年8月29日(金) 10:25 ~ 11:23 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a806-09] 運動生理学／口頭発表②

座長:土橋 康平(北海道教育大学)

10:25 ~ 10:38

[04生-口-06] カフェイン摂取が800m走パフォーマンスに及ぼす影響*佐々木 健成¹、土橋 康平²、森田 憲輝² (1. 北海道教育大学大学院、2. 北海道教育大学)

【背景】カフェインは競技力向上を目的として広く用いられている。先行研究ではカフェイン摂取によりトレッドミル上での擬似800m走記録を向上させたと報告されている。しかし、実際のトラック上での800m走で記録が向上するのかが検証されていない。また、高強度運動時には動脈血酸素飽和度 (SpO₂) が低下し運動誘発性低酸素血症 (EIAH) が生じることがパフォーマンス低下の要因とされる。そこで、本研究ではカフェイン摂取が実際のトラック上での800m走記録、SpO₂および骨格筋酸素化動態に及ぼす影響を検討し、カフェインの有効性を検証した。

【方法】被験者は800m走を専門とする若年成人14名 (M/F=10/4, age= 20.9±1.8歳) であった。6 mg/体重kgのカフェイン (カフェイン条件) もしくは6 mg/体重kgのグルコース (プラセボ条件) のいずれかを二重盲検条件下で摂取し、85分後に公認陸上競技場にて800m走試験を行った。SpO₂および筋酸素化動態は安静時から試験終了まで継続的に測定した。【結果】800m走タイムはカフェイン条件 (135.1±15.9s) とプラセボ条件 (134.8±15.7s) 間の対応のあるt-testからは有意差はみられなかった。しかし、各条件時の気温と風速を補正した分析においてカフェイン条件は800m走タイムの有意な短縮効果が認められた。ゴール直前10秒間のSpO₂値はカフェイン条件 (90.7±6.0%)、プラセボ条件 (91.2±5.4%) であり、いずれも中等度EIAHに分類される水準であった。しかし、SpO₂および筋酸素化動態に条件間の相違はみられなかった。【結論】カフェイン摂取は800m走行時の酸素化動態に大きな影響を与えないものの、気象条件による走タイム低下を抑制することが示唆された。

2025年8月29日(金) 10:25 ~ 11:23 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a806-09] 運動生理学／口頭発表②

座長:土橋 康平(北海道教育大学)

10:40 ~ 10:53

[04生-口-07] 国内トップレベルのローイング選手における酸素摂取動態と運動パフォーマンスとの関連

*小泉 潤¹、波多野 慶¹、中村 真理子¹、松林 武生¹ (1. 国立スポーツ科学センター/ハイパフォーマンスセンター)

【背景】酸素摂取量 (VO_2) の立ち上がりの速さを表す時定数は有酸素性能力を評価する指標の一つである。ローイング選手では VO_2 動態の時定数と運動パフォーマンスには有意な相関関係が報告されている。しかし、トップレベルのローイング選手においても、 VO_2 動態の立ち上がりの速さと有酸素性能力や運動パフォーマンスとの関連あるかどうかは不明である。【目的】国内トップレベルのローイング選手の VO_2 動態を評価し、最大酸素摂取量 (VO_{2max}) や乳酸作業性閾値、運動パフォーマンス指標との関係を明らかにする。【方法】男性ローイング選手24名を対象とした。ローイングエルゴメーターにて漸増負荷試験を実施し VO_2 を測定した。3分の運動を1分の休息を挟み行い、負荷は200Wから50Wずつ漸増させた。1分の休息時に血中乳酸濃度を測定し、2mmol/L (LT) および4mmol/L (OBLA) 時の運動強度をそれぞれ算出した。 VO_2 の時定数は200W開始時の VO_2 を指数関数式による近似によって算出した。パフォーマンス指標は漸増負荷テストより算出した2km推定タイムを採用した。時定数と VO_{2max} 、LT、OBLAおよび2km推定タイムとの関連を検討した。【結果】 VO_{2max} は 4.46 ± 0.35 L/min、LT強度は 261.6 ± 35.0 W、OBLA強度は 318 ± 36 Wであった。2km推定タイムは 6.34 ± 0.22 分であった。時定数は 18.7 ± 3.6 秒であった。時定数と2km推定タイム ($r=0.587$, $p<0.01$) および VO_{2max} ($r=-0.479$, $p<0.05$) には有意な相関関係があったが、LTおよびOBLA強度との間に有意な相関関係はなかった。【結論】トップレベルのローイング選手において、 VO_2 の立ち上がりの速さは運動パフォーマンスや有酸素性能力を反映する指標であることが示された。

■ 2025年8月29日(金) 10:25 ~ 11:23 ■ 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a806-09] 運動生理学／口頭発表②

座長:土橋 康平(北海道教育大学)

10:55 ~ 11:08

[04生-口-08] 大学男子柔道選手における減量が動脈スティフネスに及ぼす影響*小芝 裕也¹、前島 悦子¹ (1. 大阪体育大学)

【目的】柔道は体重階級制の競技であり、選手は競技上の優位性を得るために減量を行うことが多い。しかし、減量はパフォーマンスの低下だけでなく、免疫機能の低下、活力の低下など、心身の健康にも悪影響を及ぼすことが報告されている。しかし、減量が心血管機能、特に動脈スティフネスに及ぼす影響については十分に検討されていない。本研究は、大学男子柔道選手を対象に、減量が動脈スティフネスに及ぼす影響を検討した。【方法】対象は、公式計量に向けて減量を実施する大学男子柔道選手21名（年齢 20.3 ± 0.9 歳）とした。本研究では、体組成の測定にInBody 270を用い、体重、体格指数（BMI）、体脂肪率、体水分量を評価した。また、血圧脈波伝播装置HBP-8000を使用して、収縮期血圧、拡張期血圧、脈拍、および上腕-足首脈波伝播速度（baPWV）を測定した。測定タイミングは、減量前（Baseline）と試合前日（Weigh-In Day）の2時点で実施した。【結果】対象者の体重減少量は 4.3 ± 2.8 kgであり、減量率は $6.3 \pm 4.4\%$ 、減量期間は 14.6 ± 9.1 日であった。Baselineに比較してWeigh-In Dayは、BMI、体脂肪率、体水分量が有意に減少した（ $p < .05$ ）。また、脈拍は有意に増加したが（ $p < .05$ ）、収縮期血圧および拡張期血圧には有意な変化が認められなかった。一方で、baPWVは有意に増加し（ $p < .05$ ）た。さらに、回帰分析の結果、体水分量減少率が大きいほどbaPWV増加率も高かった（ $\beta = 0.613, r^2 = .376, p < .05$ ）。【結論】本研究の結果から、減量とりわけ体水分量の減少が大学男子柔道選手の動脈スティフネスを増加させる可能性が示唆された。今後、長期的な減量の反復が血管機能に与える影響を縦断的に評価し、安全かつ効果的な減量方法を確立することが必要であると考えられた。

2025年8月29日(金) 10:25 ~ 11:23 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[3a806-09] 運動生理学／口頭発表②

座長:土橋 康平(北海道教育大学)

11:10 ~ 11:23

[04生-口-09] 早期 vs 遅延型時間制限食

運動なしでも体力は向上するのか？

*于 自富¹ (1. 広島大学人間社会科学研究科)

目的：

時間制限食（Time-Restricted Eating, TRE）は、食事の時間帯を限定することで代謝健康を改善する新たな栄養介入法として注目されている。本研究では、運動介入を行わずに、早期TRE（eTRE: 08:00～16:00）および遅延TRE（dTRE: 12:00～20:00）が健常成人の有酸素および無酸素運動能力に及ぼす影響を検証することを目的とした。方法：

本研究は単群クロスオーバー試験として設計された。28名の健常成人（平均年齢：23.4±2.5歳、女性：60%）が、4週間のeTREおよび4週間のdTREの2条件を順不同で実施した。介入前、eTRE終了時、およびdTRE終了時において、有酸素能力（90W定負荷による持久サイクリング）と無酸素能力（10秒間のスプリント×3セット）を評価した。結果：

eTRE条件では、有意な体重減少および有酸素持久時間の延長が観察された（ $p<0.05$ ）。また、eTREはdTREに比べ、無酸素スプリント時の出力保持率もわずかに向上する傾向を示した。一方、dTREでは大きな改善は見られなかった。結論：

運動介入を伴わない場合でも、食事の時間帯が身体能力に影響を与える可能性が示唆された。

特にeTREは、昼夜リズムとの整合性を通じて、より有利な生理的適応をもたらす可能性がある。本研究は、運動習慣のない個人に対する現実的な健康介入法として、TREの応用可能性を支持するものである。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：保健

■ 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 14:54 ■ 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[3a902-04] 保健／口頭発表①

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

14:10 ~ 14:24

[10保-口-01]

高等学校保健「健康を支える環境づくり」における実験を取り入れた実践
水道水の残留塩素濃度測定を通じた学習

*中川 雅智¹、今城 遥¹、上田 敏子² (1. 聖カタリナ大学、2. 愛媛大学)

14:25 ~ 14:39

[10保-口-02]

球技を専門とする日韓の女子体育大学生におけるやせ志向と食習慣との関連

*白石 百音華¹、古泉 佳代² (1. 日本女子体育大学大学院、2. 日本女子体育大学)

14:40 ~ 14:54

[10保-口-03]

女子大学生における運動の目的とたんぱく質摂取の選択行動との関連

*菊川 理子¹、古泉 佳代²、中島 早苗³ (1. 東京経営短期大学、2. 日本女子体育大学、3. 共立女子短期大学)

2025年8月29日(金) 14:10 ~ 14:54 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[3a902-04] 保健／口頭発表①

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

14:10 ~ 14:24

[10保-口-01] 高等学校保健「健康を支える環境づくり」における実験を取り入れた実践

水道水の残留塩素濃度測定を通じた学習

*中川 雅智¹、今城 遥¹、上田 敏子² (1. 聖カタリナ大学、2. 愛媛大学)

【目的】保健授業における飲料水の衛生的管理の内容は中学校保健領域「健康と環境」で学習しているが、高等学校では科学的な原則や概念に基づいて健康や安全に関する内容をさらに深め、総合的に学ぶことが可能であり、そうした実践が必要である。そこで本研究は、指導要領解説において指導方法の工夫の一つとして挙げられている「実験」に着目し、水道水の残留塩素濃度測定を通じ、水質を守る仕組みと重要性について深く理解することをねらいとした実践を行い、その効果を検証した。【方法】高等学校2年生120名を対象に、単元「健康を支える環境づくり」の内、上下水道の整備について授業を行った。授業は数日前から当日に採取した水道水を3つ準備し、色、匂いを官能法により調べた。その後、グループで残留塩素濃度を測定し、いつ採取した水道水であるか予想する内容とした。授業前後には保健授業及び環境に対する認識や態度について質問紙調査を行った。分析は質問紙調査に回答した者の内、誤回答等がない86名を対象に行った。授業前後の比較は回答を平均値化し、Wilcoxonの順位符号検定を用いて検討した。自由記述の項目は計量テキスト分析を行い、その傾向を分析した。【結果・考察】授業前後を比較すると保健授業に関する項目では「保健の授業の中で自分の意見や考えを持つことができる」等の項目で値が上昇し、授業に対し主体的に取り組めたことが推測された。環境に関する項目では「環境問題は自身の行動で変えることができる」等の項目で値が上昇し、環境問題に対し積極的に解決しようとする姿勢へ変容したと考えられた。授業後の感想では日が経つごとに塩素濃度が薄くなることや、実験を通して日本の水の安全さを実感したこと等の感想があり、水質を守る仕組みや重要性について体験的に学ぶことができたことが確認された。これらの結果から本授業の実践が深い学びにつながったことが推測された。

■ 2025年8月29日(金) 14:10 ~ 14:54 ■ 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[3a902-04] 保健／口頭発表①

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

14:25 ~ 14:39

[10保-口-02] 球技を専門とする日韓の女子体育大学生におけるやせ志向と食習慣との関連*白石 百音華¹、古泉 佳代² (1. 日本女子体育大学大学院、2. 日本女子体育大学)

〔緒言〕日本の若年女性のやせ志向の強さ、欠食率の高さは問題とされており、韓国も同様の問題を抱えている（池田ら2017）。本研究では、体重の影響を受けにくい球技を専門とする女子体育大学生における、やせ志向と食習慣との関連を、韓国の女子体育大学生と比較することにより、明らかにすることを目的とした。〔方法〕調査は、2024年11月から2025年1月に、日本女子体育大学体育学部、ソウルのスミョン女子大学体育教育学部の学生に、アンケートを実施した。分析対象者は、224名（日本：177名、韓国：47名）とした。調査項目は、身長、体重、理想体重、やせ志向、食習慣、および食品多様性スコアとした。身長、体重から現状BMI、身長、理想体重から理想BMIを算出した。日韓の違いは、カイ二乗検定、t検定を用いて分析した。

〔結果〕日本の現状BMI (21.6 ± 2.1) は、韓国 (20.6 ± 2.4) より有意に高値を示した ($p = 0.013$)。また、日本の現状BMIが18.5未満の者は4.5%で、韓国より少なかった ($p < 0.001$)。食品多様性スコアは、日本 (2.28 ± 2.0 点) が、韓国 (1.19 ± 1.68 点) に比べて有意に高値を示した ($p < 0.001$)。日本の朝食の摂取率は、80.1%であり、韓国より高かった ($p < 0.001$)。やせ志向がある者は、日韓で有意な違いはみられず約70%程度だった ($p = 0.018$)。また、理想BMIが18.5未満の者も、日韓で有意な違いはみられず約10~20%程度だった ($p = 0.059$)。〔結論〕球技を専門とする日本の女子体育大学生は、韓国と比較し、やせている者が少なく、朝食の摂取率は高かった。このことから、日本の女子体育大学生に対して、食の多様性を促進し、過度なやせ志向の危険性を周知する必要があると考えた。

2025年8月29日(金) 14:10 ~ 14:54 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[3a902-04] 保健／口頭発表①

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

14:40 ~ 14:54

[10保-口-03] 女子大学生における運動の目的とたんぱく質摂取の選択行動との関連

*菊川 理子¹、古泉 佳代²、中島 早苗³ (1. 東京経営短期大学、2. 日本女子体育大学、3. 共立女子短期大学)

目的:運動習慣のある大学生は、鉄分やたんぱく質の摂取を心がけている傾向がある(五島ら,2006)。目的をもって運動している者は、たんぱく質摂取に関する意識や知識があり、意図的に選択していると考えるが、これらを検討した報告はない。そこで本研究では、運動習慣のある女子大学生を対象に、運動の目的の有無とたんぱく質摂取に対する意識の有無、知識の有無及び選択行動との関連を明らかにすることを目的とした。方法:対象者は、運動系部活動、サークルに所属している141名(有効回答率45.5%)とした。調査は、2022年10月～11月に実施した。質問項目は、運動に関する項目、食事に関する項目及びたんぱく質に関する項目の全23項目とした。運動の目的を大会に出場する、健康・ダイエット及び仲間づくりとしている者を「目的有り群(n=83)」、なんとなく運動をしている者を「目的無し群(n=58)」とした。目的の有無とたんぱく質の意識、知識及び選択行動の関連を検討するためにクロス集計を行い、Pearsonのカイ二乗検定を用いて分析した。有意水準はいずれも5%未満とした。結果:部活動の指導者からの情報でたんぱく質を摂取している者(p=0.014)、及びダイエット・美容目的でたんぱく質を摂取している者(p=0.002,p=0.040)は2群間で有意な違いが認められた。すなわち目的有り群は、部活動の指導者からの情報で摂取している者が多く、ダイエット・美容目的で摂取している者が少なかった。結論:大会に出場する、健康・ダイエット及び仲間づくりを目的として運動をしている者は、指導者からの情報を得ていることが多くダイエット・美容目的で摂取していないことから、指導者がたんぱく質に対する正しい知識や意識および根拠のある選択行動をすることの重要性が示唆された。